
めざめて中の人

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めざめて中の人

【Nコード】

N8292C

【作者名】

遼

【あらすじ】

伊藤環が転校した先にいたのは、不幸を運ぶ少女と、幸せを運ぶ少女だった。対立してるわけでもない？しかし教室内の雰囲気は二分してしまっている。環が、幸せを運ぶ少女——四条美鈴に感じた違和感。それを看過できなかった彼は、当然のように不幸を運ぶ少女——八千代雫と共に過ごすことを決めたのだ。

ブローグ

ごおっ

なんて音が相応しかったんだと思う。風が焼かれ唸り、舞い上がる音だ。

どんなものが見えてたかなんて覚えてない。ただ視界は真っ黒で、そのくせ意識ははつきりとそいつを捉えてた。確かに、苦しかったんだろうと思う。それが始まり。

めざめて中の人

「ぶえつきしっ」

盛大に唾を撒き散らして身を震わせ、その身体を掻き抱いてみる。もちろん冷たい身体で冷たい身体を包んだところで温まるはずもないが、余計な仕草だろうとそうやって足掻いてしまうのが人間だ。

そうは言ったところで寒いという事実が薄れることはないし、それ以上に圧倒的で冷たい現実がある。

冷たいのは身体が現実か、或いは社会だろうか。

例えば一億円詰まったバッグから、一万円札の一枚も抜き取らず警察に届けるのは、いいことだろうか。例えば猫を助けたとする。それは？ 金と命、比べたところで意味はないが、命と聞くとそれだけで重く感じるから不思議なものだ。

それなのに、腕の中の「それ」を見て、内心ため息をついた。鳴いてすらくれないこいつを見てると、自分のしたことが果たして正しいのか、わからなくなってくる。

後はこいつの主を探して、責任を履行するのみ、だが。

「参った……」

交番を探そうにも、この町のことはまだよく知らないし、高校二年という中途な年齢では、町内を手がかりなしに探検しようなどとは思えなくなってしまった。それが果たして成長というのかそれともただの変化というのかは、それこそ大人と子供で意見は真つ二つに分かれてしまうんだろう。

どうでもいい。この濡れた身体をなんとかするのと、それからこいつを保護してくれる人を探すこと。現状での最優先事項だ。

とはいえ、こんな人気のない河原ではどうしようもない。運がよかったから助かったものの、今度この川に落ちたら無事じゃすまないだろう。

どれだけ強く蛇口を捻ったって、ここまで酷い音は流れない。三十分前まで降り続いていた雨で増水、轟音を響かせる川の流れは、人一人くらいなら容易に運んでしまう。

橋を渡って、左に曲がって、次の角を真つ直ぐ、だったか――？

俺の記憶が正しければ、商店街らしき並木道はその辺りだった。編入試験に合格する程度の学力と記憶力はある。問題ない。

現状はまだイエローシグナル。しかし良心的な判断を下すとつまり、注意して渡れば、現実には優しい。水に濡れて少しだけ重いそいつを抱え直すと、同じく重い足音――水音を引き摺りながら、夕暮れを真正面に迎えながら歩いた。

もうじき日が沈む。雨は数十分前に止んだが、町は未だに雨の匂いに包まれていた。住宅街から程近いこの河川敷も、今は不思議な寂寥感が漂っている。

商店街に行けば人もいるだろう。夕飯前くらいだろうから、今なら主婦でこつた返しているはずだ。

或いは人恋しさ。足を速めてみるのだった。

出会いはその瞬間。俯く俺の前から、背筋に走る電気のような感覚を伴う綺麗な声が聞こえた。感情の起伏が大きいのだろう、激しさを孕むそれは、次第に近づいてくる。ああよかった、人がいた、なんて安堵を感じながら上げた顔に、その女の子のものと思しき靴がめり込むのだった。

プロローグ（後書き）

よろしく願います。

1話

めざめて中の人

「伊藤環です。よろしく」

無難といえば無難だが、クラスで目立つには全く足りない自己紹介だ。でも、転校初日からそう目立とうとは思えないし、願うのは、せめて穏やかな学生生活が送れるように、という一点のみある。

なんて言ってるそばから、

「あ！ あなた……！」

見知らぬ少女に指差されるから堪ったものじゃない。廊下側一番後ろの席で、立ち上がって俺を睨む彼女は、それかなりの美少女だっていうんだから始末が悪い。少し軋む木の床と彼女の視線が、少しだけ不快だった。

「……何か？」

「何かじゃないわ！ 私の猫を！」

「猫……ああ、あいつか」

先日川で溺れてたから助けてやった、あの猫だ。おかげでずぶ濡れになるわ誰かに襲われるわけで、碌なことがなかった。気がついた時にはいなくなっていて上手く飼い主の元に帰れたか心配だったの

だが、どうやらこの女の子がその飼い主らしい。大きなリボンのついた黒いロングヘアの、気の強そうな吊り目がちのお嬢様だ。伶俐なのは輪郭、それでいて聡明な顔立ちをしている。

「この誘拐犯！」

「……先生、俺の席どこっすか？」

「あ？ ああ、あの子の隣だ」

指差す先に、誘拐犯呼ばわりのお嬢様とはベクトルの違う、大人しい感じの美少女。木製の机の上で手を組んで、困ったように笑っている。こっちは短めの茶髪だけど、校則で禁止されてたはずだ。可愛い子ばかりでいいクラスだけど、もう少し気性の穏やかな子だったらもつと嬉しかった。

「ちよつと、人を無視しないでくださる？」

「相手してる暇ない。人の話、聞きそうにないし」

「聞くわよ。誘拐犯にも言い分はあるでしょうしね」

俺の言い分を聞く気があるのなら、状況判断能力くらいはあつてくれると嬉しい。今クラスの誰がこの展開についていけるか、程度はわかって欲しいんだけど。

そも、いくら鈍くてもわかる。この声は俺が気を失う前に聞いた声、つまり俺の顔面に思い切りとび蹴り入れてくれた女に違いない。

正直、こいつとは関わりたくない。睨まれるいわれも、ない。

「川で溺れてた。だから、泳いで助けてやった」

「嘘。あの子、泳げるもの」

だからそういうのは、話を聞くとは言わない。

「あんだけ増水した川、猫の力じゃ泳げないだろ」

「あの子ならやるわ。でもそうね、弱ったんでしょ。そこにあなたが」

「よろしく」

「あ、はいっ」

「無視しないで！」

燦々と降り注ぐ光の束を存分に取り込む窓際から一席、一番後ろ。

そんな光を粒ごとに吸い込んだような、なのに柔らかな茶髪の子は、
どうにかこの状況についていけているらしい。近づいて話しかけて
みれば、少しだけ拳動を遅らせながらもはつきりした答えが返って
きた。よかった、こっちの美少女は見た目通り大人しそうだ。少な
くともあのお嬢様よりは好感が持てる。好感というより、この子――
「ま、そうですね。貧相な者同士気が合うというものでしょう」
「貧相……」

「どこを見て言ってるの？」

「お前の胸だが」

少なくとも今この場所で貧相なものといえば、それくらいしか思
い浮かばなかった。大丈夫、貧乳の大好きなお兄さんだっているん
だから。それが俺かと言われればノーだが、彼女が俺と付き合うつ
もりなんてこれっぽっちもないだろう。問題ない。

憤慨した様子のお嬢様は、鼻息も荒く席についてしまった。呆れ
たいのは話を聞いてくれなかった俺の方だが、どうやらお嬢様の方
がそうなってしまったようだ。

言葉の通じない相手に言葉が通じないと言われた場合、どんなリア
クションをすればよかったんだっけ？　なんてことを、隣の美少女
に訊いてみるのだった。

「あ、え？　えと、えへへ……」

もちろんまともな答えなんて、返ってくるはずはなかったけど。

「名前、訊いていい？」

「はい、八千代雫です」

やちよしく、ね。あのお嬢様は貧相だと言ったが、少なくとも
名前を聞く分にはそんな感じはしない。ほら、よく言うだろ、名は
体を表す、って。

「伊藤環。お隣さん同士、よろしくお願いします」

「は、はいっ、大丈夫です」

何が、とは言えなかった

「なんだか伊藤さん、わたしと気が合いそうな感じがします」

「俺もそんな気がする。貧相同士」

「ひう……でも、嬉しいかもです」

半泣きになるくらい気にしてたのか、お嬢様の罵言。見た目も名前も貧相には見えないんだから、堂々としてればいいのに。でもこの大人しい人柄は、非常に可愛らしい。鬱陶しいほどでもなく、かといって主張しすぎるわけでもなく、理想的なまでに可愛いから、相当もてるんだろうな。このクラスで言えば、恐らくお嬢様と双壁を成しているんじゃないだろうか。

そんな二人と会話できた俺だが、果たして喜んでいいのか。

それから席に座つてすぐ、ちらちらと視線を感じた。八千代さんが、そのブラウンの瞳で俺を見つめていた。成程、その白い肌といひ明るい茶髪といい、どうやら身体の色素が普通より薄くなっているらしい。可愛いという印象とは別に、それらはどちらかといえば綺麗という言葉が相応しい。薄めに入れたコーヒーは琥珀のようで、そしてそれよりずっと美しい輝きを放っていた。結局その視線の意味は、見つからなかったけど。

担任が連絡事項を告げ終わり出て行くと、教室は喧騒に包まれることになった。もちろんその中心は、転校生である俺だ。

どこから来たの。この学校はどうだ。好きなものは。かつこいいよね、彼女いるの。番号教えて。

ああ、転校生の悲しい運命。友達を作るのに大事な儀式ではあるが、逆に「鬱陶しい」という致命的な側面を持っていたりもする。適当に返事をしておけば問題ない。少なくとも悪い印象は与えないはずだ。

「愛想の悪い方ですわね。環さん、だったかしら？」

モーゼが力行使したかのように、人波が二つに分かれた。嫌いなら黙つてくれればいいのに、また厄介な人が来た。腰に手を当てて、椅子に座る俺を威圧的に見下ろしてくる例のお嬢様。

「それでは友人ができなくてよ？」

「お前みたいに、人の中心に立とうとは思わないだけ」

「お前だなんて、いつの間に私達は親しくなったのかしら」

「名前知らないだけだろ？ 嫌ならさっさと名乗……名乗ってくだ
さい」

処世術、っていつていいのか。こういう輩にはとりあえず角を立てない方がいい。

「四条美鈴。別にお見知りおきしなくても結構よ」

隣に立つ男が、耳打ちで教えてくれた。

こいつ、真正のお嬢様らしい。生まれた家はこの町の名家で、蝶よ花よの温室培養、苦労というものを知らずに生きてきたとか。しかし――

気立てがよく誰にでも優しいだけでなく、その才媛と不断の努力、それを鼻に当てることのない温厚な人柄で人望も厚い、ってのは誰のことを指して言ってる？ 少なくともこの四条さんという人ではない。んだろうと思いたかったが、現実はそう甘くはないらしい。

つまりこの威圧的な態度は、俺限定で発動するらしい。俺限定、ではないか。俺と、八千代さん限定、というべきだ。

「そんなに憎いか、俺」

「生理的に受け付けませんわ。その……言っに難し、ですわね」

「理由もなく人を嫌うようなやつが、成功できるか？」

「いいの、別にあなたに嫌われても何とも思いませんから」

ならどうして近寄って来るんだよ。

どうせ、中心に立ちたいんだろうな。自己顕示欲が強い、ってこと。

「ともかく！ 雫さんともども、くれぐれも私の前に立たないでくださいな」

「わたし、そんなつもりないです……」

「俺もそんなつもりないですー。というかな……」

何よ、とでも言うように一瞥をくれる四条さんに気圧されたわけでもないが、一応口は濁しておいた。興味を失ったように去っていく四条さんが席についたのを皮切りに、教室内は再び喧騒に包まれ

た。

言いたいことがある。

というかな――

俺も、お前のことは生理的に受け付けないんだ。出会った時から、ずつとな。

帰るべき家は、そう大きくもない中流家庭。果たして親子二人で家庭とっていいのかは疑問が残るが、なかなかに温かい家族だ。父さんは、すごく優しい。

五十坪足らずの敷地に、申し訳程度の庭。その先に一枚板のドアがあり、開けた数メートル先にリビングが見える。仕事で忙しい父さんがこんな時間にいるはずもなく、リビングは不気味と言っているのに静まり返っていた。カーテンの隙間から差し込んだ夕陽が、テーブルの上の夕飯を照らしている。

「今日はハンバーグ、か。よくやってくれるなあ、あいつも」

俺がこの町に来てからずっとだ。といっても数日間ではあるが、毎日のように俺に代わって夕飯を作りに来てくれる。学生かと思ってたが、今日も作ってるということはそうじゃなかったのだろうか。大学生、か？ にしては幼い顔つきをしてる。

「ま、いいか」

とりあえず、一眠りしよう。精神的に疲れたんだ、あのお嬢様と一日同じ教室で勉強したら。いるだけで疲れるんだから、俺がどの程度お嬢様を受け付けないかわかってもらえるだろう。綺麗な花には棘があるというが、この場合棘じゃなくて足枷ということになるかな。あの日川で摘み取ってしまった瞬間から、もう逃げられない運命にあったんだろう。

未だに感じる重圧に耐えながら、俺は無意識の底へとダイブするのだった。

「学校はどうだった？」

「可愛い子が二人。そのうち一人とは、仲良くなれそうだったよ」
もう一人に関しては、黙秘を貫きたいと思う。

リビングの食卓に並べられたおかずは、世話焼きの隣人が作ってくれたものだ。材料だけ買っておけば、鍵を使って勝手に作ってくれる。もちろん簡単に鍵を渡すわけにはいかないから、信用に足る報奨を与えておいたのだ。要するに、ほぼ雇っている状態。

父さんはその柔らかな肉塊を頬張って満足そうな笑顔を浮かべている。確かに、美味しいと思う。箸で押し付けると、中からじゅわあつと肉汁が溢れ出てくるんだ。

「聖ちゃんの料理は絶品だね。母さんに勝るとも劣らない」

「母さんの料理、覚えてないんだけど」

「そうか……もう、十年以上前だからねえ」

ああ、その顔。息子の前でそういう顔、しないでくれよ。

感情を置き忘れたような、真っ白な表情だ。もう笑うことも、泣くことすらできなくなってしまうた。それほどまでに、深い悲しみなんだろう。

でも、逆に嬉しかったりもする。それだけ父さんと母さんが愛し合ってたってことなんだ。息子として、それだけは喜んであげなくちゃいけないんだと思う。だってそうだろう、父さんが今でも母さんを愛していること、それだけが、母さんがここにいたという証に他ならないんだから。

もしかしたら、あいつ——聖がここで料理をするたびに、父さんは今は亡き母さんを想うのかも知れない。でも、それはそれでいいんだ。

新しい幸せを見つけるべきだ。そんなセリフを、漫画やドラマでよく耳にする。でもこうやってそういう立場に立たされて思うのは、故人の意思や愛をなかつたことにするような愛は、作らないで欲しいってこと。或いは、ただの子供染みた我が儘だ。

父さんは、ずっと母さんだけを愛して欲しい。母さんの料理一つ覚えてない息子が言うのは、間違っているだろうか。

「環、上手くやるんだぞ」

「わかってる。友達をたくさん作れ、だろ」

「友達は、いいぞ。聞いてくれる、話してくれる人ってというのは、大人になっても欲しいんだ。僕は、そう思う」

含蓄のある言葉に聞こえる。母さんが死んだ時、悲しみの文を聞いてくれた友達がいらっしゃる。そんな時に友達同士で不和があつて相談されたらしい。立ち直らざるを得なかった。だから父さんはここにいます。

だから或いは俺がここにいても、父さんの友達のおかげなんだ。いくら生理的に受け付けなくても、俺はあのお嬢様——四条さんを拒めない。会つたびに、売り言葉買い言葉になるんだろうけど、きっと大丈夫だ。俺は俺に優しいから、多少汚くても処世術を使うことを知ってる。

要は口に出さなければいい。後で誰か——父さんでも聖でも、例えば八千代さんでもいい、愚痴つてしまえばいいんだ。

「転校生は大変だろ。囲まれたりしなかったか？」

「すげえ囲まれた。あんなの都市伝説かと思つてたのに」

「友達は、選ぶんだぞ」

親とは思えない発言に、思わず吹き出した。

「周りに溶け込んで、心の中で割り切るだけでいい。割り切つて残つた子だけ、友達になつてもらいなさい」

「普通、誰とでも仲良くしなさい、だろ？」

「それで失敗した人を、たくさん知ってる」

割り切ることができるだろうか。まだ“べき人”を選べるほど器用な眼を持つてるわけじゃない。だってそうだと、四条さんのことだって、選ぼうとしてるんだから。友達になるべき人。相談するべき人、されるべき人。愛し合うべき人。運命付けられたようなそんな人達に、俺は出会うことができるだろうか。

「環はこれからだよ。学校は、そういうのを勉強するところだ」

「勉強は？」

「大事だよ。ああいうのは内容より、学ぶ姿勢を学ぶものだけだね」
「そっか……ま、大丈夫だよ。今までだって、なんとかなつたし」
苦笑したのは、多分父さんと俺、同時。

食卓は以降、寂れたような沈黙に包まれていた。

翌朝の空は、その先の宙が見えてきそうな濃い蒼穹。カーテンを開けて一番に目にしたそれが、少しでも目に痛かった。

小さなパイプベッドから足を下ろして、湿ったフローリングを感じた。雨の降った翌日のこの独特の湿気は、夏の暑さと相俟って多少の息苦しさを感じる。川に落ちた時のような冷たさがない分救われてはいるんだろうが、やはり高温多湿というのは人間にとって有害だ。

夏のせいだろうか、少しでも気分が高揚してる。湿っぽい気分というよりは、少しでも鬱陶しくらいの、纏わりつくような高揚感だ。転校初日から十四時間、もうあの重圧はなくなっている。

四条さんに押し掛けられるか、八千代さんに癒されるか。まだ二者択一の域を出ないけど、これから増えていくんだろう。父さんの言うとおり、俺は、これからなんだ。

三步だけ進んで、辿り着いたクローゼット。取り出したのは一枚の開襟シャツと、黒くて糊の効いたズボン。これが昨日から通っている「逢坂高校」の制服、夏のものだ。一般的なものでゲームのように奇を衒うわけでもないが、しかしだからこそ真新しくも馴染みがいい。

パジャマを脱ぎ捨ててそれを着た後、机の上を見てため息。

「携帯と、自転車の鍵と、鞆……それだけ」
財布がない。

昨日気付いたが、疲れていたから放っておいたのだ。致命的な欠陥ではあるが、今日にでも交番に届け出してみようと思う。別に大したものが入ってない。クレジットカードを持つには早いし、学生証なんてものはなくその代わりの生徒手帳だ。残りのカード類は、こ

こに来る際全て折って捨ててしまった。盗まれて困るのは、僅かばかり入っていた野口さん数人だ。

携帯をポケットへしまい、自転車の鍵はパジャマを持つ手の反対で持って、部屋を後にする。名残惜しむような陽光が、廊下にまで続いていた。

リビングには二人。父さんと、聖だ。報奨というのは他でもない、このこと。朝の弱い聖に代わって、俺が朝飯を作るようになっていた。起きるだけ起きて隣の家に移動、後は待っていれば朝飯ができる。「なんて画期的なの」、聖は陶醉したように呟いていた。

そんなにもいいものでもないだろうに、聖は毎度のように笑顔で俺を迎えてくれる。

「お、おはよー……たまき、眠いから早くコーヒー」

「目、開けなよ」

「開かない、無理。学校行けないよー」

だらしがない、なんて呟きながらコーヒーメーカーに向かう俺は、甘いんだろうか。母親のような生活だけど、こういう賑やかさは嫌いじゃない。或いは手のかかる姉さんのような感覚だから、父さんも娘ができたように喜んでる。

「はい、コーヒー。熱いからしっかり冷ましてから飲みなよ」

「ありがとー」

にへら、なんて擬音がつきそうな笑顔を浮かべて、聖は白いコーヒーカップを両手で受け取った。そういう仕草が、学生には見えないくらいに可愛い。その童顔もあってか、初めて会ってからこの人が大学生などと思えたことがない。

実際、大学生かどうかも知らないんだけど。

「聖、何専攻してるの？」

「えあ？ ああ、うん……神学。神様とかそういうの」

「また珍しいものを」

「楽しいよ」

専攻してるってことは、多分大学生であってる。

神様、か。存在してるんなら俺に母さんを返してくれ、なんてことを何度も思った。でも結局、心の持ちようだよな。神様なんてのは、自分の中にしか存在しない、ってくらいがちょうどいいだろう

か。
「コーヒー、ありがと」

「うん。今日はスープだけど、コーンとコンソメとどっちがいい？」

「えー、うん、……コーンかな。おじ様は？」

「聖ちゃんと同じでいいよ」

父さんの笑顔に、聖は頬を緩ませる。もしかしてこいつが新しい母さんになるんじゃないか、なんて思ってから、一人で吹き出してみた。

冗談じゃない。

結局俺が母性を求めてるかと問われたら、イエスとしか答えられないのだ。もう十年以上前からずっと男だけの生活を続けてきたわけだから、足りないものが何かなんて、今更問うまでもない。

聖に母性はない。それだけ。

「環もさ、おじ様くらい大らかならもてそうなのに。というか、お姉さんが食べちゃう」

「冗談じゃない。だから必死に生きてるんだよ」

「可愛くないなあ。そういうところを直せって言ってるのよ」

「眠いなら寝てろ」

「うわー、これだよ。可愛いお隣さんには親切にしくちゃー」

朝からお世話してやってるのに、親切じゃないと仰るか。ギブアンドテイクではあるが、条件を提示したのは聖。立場はこっちの方が上のはずだ。本当はどっちが上だなんて言いたくはないが、こういう関係にある以上はつきりさせておく必要があるだろう。いつ不測の事態があるとも限らないんだから、ということ。

誰も望んでいない出来事だって、起こり得るから存在してる。母さんの死だって、その一つだ。或いは聖の学ぶ神様が望んだのかも知れない。

時間と共にコーンスープから湯気が立ち昇る。沸騰は、させてはいけない。

トーストから始まってスープ、サラダ——かぼちゃとさつまいもをマヨネーズと味噌で和えたものと、それから基本のハムエッグ。聖にはもう一杯になるけど、最後にコーヒーマンカをつけてみたら、今日の朝食の完成だ。特に難しくもない、無難なメニューだろう。テーブルに並べると、聖が目輝かせてくれた。こういう素直な反応をしてくれるから、簡単なメニューでも作り甲斐があるんだよね。

「いただきまーす」

「悪いね、環」

「いいよ。家族なんだから、聖みたいに遠慮なく食ってくれれば」余計な一言だったらしい。じろりと俺を一瞥して、聖はトーストを齧った。

穏やかな時間だ。朝の弱い聖からはおざなりな返答しかないけど、それでも三人が三人共笑ってる。ここに見えるのは、確かな家族の形。失くしてしまったものがまだここにあるようなそんな錯覚が、俺の心を撫でるように吹き抜けていく。その小波は荒立つことなく、ゆっくりと俺の奥で弾けて戻る。

そうやって巡り巡って、笑顔になるんだ。母性がなくても、聖は確かに女性だった。

そんな家庭の華である女性に見送られる登校というのは、思ったよりずっといいものだった。途中、駅前に続く道まで一緒に歩くことになっている。逢坂高校は駅前に行かず、先日の河原を通っていくことになる。俺は自転車を引きいて、聖はトートバッグを肩にかけて、それぞれぼうつとしながら他愛のない話を繰り返していた。

「環、友達はできた？」

「父さんにも言われたよ、それ。心配しなくても、ちゃんとやるって」

「そう？ やっぱりおじ様はいいこと言うわね」

転校先での息子の心配くらい、父親なら誰でもするだろう、なんてのは、恵まれた常識なんだろう。他人である女子大生にされるのは、間違いない贅沢なんだろうけどさ。

「それにあれよ、高校って黙ってても友達ができるからね」

「そうなの？」

「そうよ。私ってほら、大人しいタイプの女の子じゃない」

疑念を思い切り込めて半目で見えてやったら、腹を抓られた。どうやら俺の行動言動一つ一つ、聖の癪に障るらしい。

「自分からろくに話しかけなくてさー……結局集まったのは、人のことにずかずか踏み込んでくる無粋な輩ばかり」

「そしたらこうなったわけだ」

「どうしてこう、減らず口ばかり叩くかな、この子は」

減らず口もなにも、だって大人しい聖なんて想像できないじゃないか。だとしたらその交友関係が現在の人格を築いたわけで、聖は反面教師になってくれてるんだな。こうはなるな、と。

なんだかんだいって、別にいいんだ。明るくて社交的で、その上父さんの信用に足るくらい親切で（おせっかいともいえるけど）、その上ファッションの方にも気を遣える程度には擦れている。

淡いピンクのキャミソールの上、くすんだ薄いオレンジ——というより山吹色というべきか、半袖の、短いカーディガンのようなものを羽織ってる。ワインレッドのタイトスカートとキャミソールの境界線から、細いベルトが垂れ下がる。首からは短めのカラーストーンと長いシルバーネックレス、ぽってりと膨らんだ大きなハート型だ。ダークブラウンのブーツが肌を飾ると、その上に少しだけ見える脚が途端に締まって見えた。

大学生、って感じ。童顔なのを意識してるのか、せめて歳相応に見られようとしているらしい。昨日の朝はパジャマで家に来てそのまま帰ってしまったからわからなかったけど、こいつが大学生に見えたのは、少なくとも俺の目からは初めてだ。

「なーに？　じろじろ見て」

「いや、綺麗だなと」

「そんな、やだ。しょうじきものっ」

「……やっぱ子供っぽいかも」

へへ、と弾むような可愛い笑い声を響かせて、聖は二歩だけ俺の前に躍り出た。アップにした髪がふわっと揺れる。赤いバレッタが、金色の髪によく映えた。

「そうそう、そうやって褒めてあげるといいよ。女の子って、褒め言葉に弱いから」

振り返る聖の顔は、いつもの悪戯っぽさを少しだけ翳らせた、姉のようなものだった。

「ま、人によるけどね。でも大抵はそう、だから照れないで。向こうも照れるだろうけど、ごまかしちゃ駄目なんだから」

「肝に銘じときます」

「よろしい」

目を細めてもう一度笑み、聖は再び俺に並んだ。

俺の肩ほどしかないけど、俺よりずっと大きな人。大人になるって、こういうことなんだろう。そうやって悩むことが、俺くらいの歳になると多々ある。社会的、或いは精神的に自立することか。余裕を持つことか。子供を諭せるくらいの教養を持つことか。自分を殺せることか。どれだけ考えたって、答えなんて出てこない。

そういうことを気にしなくなるのが、大人になるってことなんだろうか。少なくとも、父さんや聖は「私は子供だ」なんて悩むことはないだろう。

「大学、どう？」

「楽しいよ。何でも自分の責任だから、大変といえば大変だけど」

「ふーん……」

ああ、そうか。責任だ。子供の行動には、そういう責任感が見えないんだ。これが多分、決定的な違い。

「環はね、素敵な子だよ」

「な、なんだよいきなり」

「お父さんのこと、好きでしょ？」

変な質問を、とも思っただけど、これに関してはごまかすわけにも嘘をつくわけにもいかない。これだけは、絶対に譲れないんだ。

「好きだよ。多分誰よりも」

「そうね。環のそういうところ、私は好きだな」

結局何が言いたいのかなんてわからなかったけど、聖はその細腕を俺の腕に絡めて、悪戯っぽく俺の顔を覗き込んだ。こういうのに慣れてない俺は、聖が相手だというのに下手に拳動を曇らせてしまつて、聖を爆笑の渦に巻き込むのだった。聖は言う――可愛い人。

手を振って別れた聖は、最後まで笑っていた。女の子を楽しませるスキルなんて持つてないけど、少なくともあいつは俺といっても苦痛じゃないらしい。

いざとなったら、本当に大らかになつて、あのお姉さんに食べられてしまおうか。なんて、橋のご真ん中で一人吹き出してみた。水かさとはとくに戻り、穏やかな流れを作っている。照り返る、刺し込むような光が瞳を抉り、また可笑しくなった。

「あの、伊藤さん？ 何か楽しいこと、あつたんですか？」

見られてた。肩を落として視線を遣ると、転校先で初めてできたお友達。

「八千代さん」

「はい、八千代ですっ。……嬉しそうでしたね？」

「嬉しいというか、楽しくて」

「思い出し笑いですね？」

肯定すると、爛漫な笑顔が返ってきた。いわく、わたしもよく思い出し笑い、するんですよー、だとか。確かに、そういうイメージはある。

「深くは聞きませんが、言っただじゃないですか」

「はい？」

「雫って呼んでください」

ああそうか、気が合いそうだからって理由で、かなり気安い仲に

なったんだ。女の子相手だから、どうも及び腰になる。

でも、

「条件があつたら？」

「あ……ごめんなさい、環くん」

「うん。おはよ、雫さん」

「おはようございます」

聖はこんな顔しない。照れ臭そうに笑って、雫さんは頭を掻いた。こういう初々しさも、女の子を飾るアクセサリーの一つなんだろう。だとしたら女の子という命は、とてもあざとくできてるんだな。それも年齢ごとに成長したり変化したりと、忙しくその魅力をスライドさせていくんだから、男としては堪ったものじゃない。

男は単純。確かにその通りだ。

「さっきの女の子、環くんの彼女さんですか？」

「いや、違う違う。ただのお隣さんだよ」

何を勘違いしてるんだ、なんて思ったけど確かに、「腕組んだりして……」そうそう、一方的ではあったけど。というかこの子は、

「雫さん、どこから見てたの？」

「わたしもこの町に住んでるんだから、通学路くらい同じになりますよ」

「後ろに、ずっといたの？」

「らぶらぶだったので、声かけられませんでした」

少しだけ頬を染めていうもんだから、今度こそ本気で肩を落とした。確かに勘違いされてもおかしくない状況だけど、嬉しそうな雫さんを見てたら、なんとなくではあるけど、落胆してしまった。雫さんを意識してるわけじゃ、ないんだけど。

一頻り笑んだ後、雫さんは俯いた。少しだけ、表情が翳ったと思う。

「それに、少し怖くて」

「怖い？」

聞き返しても、返事はなかった。もちろん学校での様子を見てれば

想像はつくけど、まだ決まったわけじゃない。昨日学校にいて、ずっと思ってた。こんなにも可愛くていい子なのに、どうしてなんだろう、って。

深く立ち入るべきだろうか、なんてことで悩むことがある。友達が一人でもいれば誰でも思うだろう。それが雫さんにするべきことか、雫さんはそれを望んでいるか。結局嫌われるのが怖いだけなんだけど、不思議と思うことがある。雫さんならきつと、俺にならきつと、いつか話してくれるだろう。だから大丈夫。

「環くんは、皆に囲まれてましたね」

「転校生だからね。ある意味宿命だろ」

「皆、好奇とか興味だけなんですよ」

「雫、さん……？」

陰の部分を見せてくれるということは、確かに尊いことだと思うけど、少し、怖い。

「好意なんて、毛の先ほども持っていないです」

「雫さん、どうしたの」

「……すみませんっ、わたし先に行きますっ」

最後に一度だけ笑って、雫さんはそのまま駆けていってしまった。その笑顔は、言いにくいけど、ただ困ってたんだろ。わからないって言ってるみたいだった。

2話

めざめて中の人

勉強で困ったことはないし、体育だつてそつなくこなしてきた。

編入試験の結果を校内の実力テストに照らし合わせると、意外と上位に位置しているらしい。だからといってどうというわけでもないけど、転校二日目にして頼られることになったのだ。

そんな中で飛びぬけていたのが、この男。

「なあ、一次関数ってなんだっけ？」

これで高校二年生だ。酷い、なんてレベルじゃないぞ。

名前は黒田英樹。この逢坂高校には、スポーツの推薦枠で入学したらしい。入学試験は面接と簡単なマーク試験だけ。要するに、運がよかったと。

多少鬱陶しいにしろ、頼られて悪い気はしない。俺はそんな黒田に、毎度懇切丁寧に、ノートとテキストまで使って解説してやった。頼られたんだから、後で頼っても黒田は何も言えないだろうなんて、これも一つの、汚い処世術だ。

このクラスのことといえば、後一つだけ気付いた。

四条さんの周りには常に人が溢れていて、逆に雫さんの周りは常に人の一人もいなかった。笑い声響く廊下側と、俯く彼女の悲しみに

だけが鎮座する窓側。今は俺がいるから、ここに人が集まってるだけなんだろう。

苛め、だろうか。そんなの被害者側の主観でしかないからどうとも言えないけど、これはそんな感じじゃなかった。「ただ避けてる」状態だ。理由は誰にも訊かない。雫さん以外に訊けば彼我の気を悪くするだろうし、雫さんに訊けば彼女を傷つけるだけだ。ただ観察だけしてれば、いつか何かがわかるはず。

楽観ではあるけど、それ以外に道なんてなかった。ゲームや漫画とは違うんだ、他人の領域に土足で踏み込む真似はしちゃいけない。弱気や臆病でもない、常識、マナーだ。

「なあ黒田」

「どうした相棒」

いつの間にか相棒扱いされてる。

「お前、好きなやついるか？」

「おお、そういう話は大好物だ。ちなみにおすすめは――」

「それは訊かんでもわかる」

黒田の視線を追えば、案の定。その先に大きなリボン、じゃなくて、四条さん。黒田――転校初日に耳打ちしてくれたこいつ、が言うことが正しいなら、四条さん以上の女の子はクラスにいない。

「そうじゃなくて、お前の好きなやつを訊いてるんだよ」

「ああ？ あー……特にいないかな」

「他人のことばかりかよ。このクラス、恋人持ちはどれくらい？」

「三十人中、十二人」

半分足らず、か。妥当といえば妥当だけど、この美形が多いクラスだと少ないという印象も受ける。何より大事なのが、

「しかしトップはフリーだ。いや、トップだからこそフリーなのか」

「皆が好き、なんだろうな」

「いい子だよな、美鈴ちゃん。お前、どんな罪を犯したわけ？」

罪も罰もない。だって彼女は俺のことが、生理的に受け付けないだけなんだから。生理現象に因果も何もあつたもんじゃない、いう

なら「嫌いだから嫌い」なだけ。理不尽ではあるが、欲望に忠実な部分だけはとも生き物らしい。

そして恐らく、雫ちゃんもだ。或いは、だからこそクラスで浮いてるのかも知れない。「この子が嫌いだから、この子は悪い子だ」なんて、子供染みた発想ではあると思うけど、それくらいしか思い当たらない。だって、容姿では四条さんに負けてないし、それに大人しくて取っ付きやすい。嫌われる要素がない。

ああわからない。このクラスは、少し異常だ。

「ま、なんにしろだ。四条さんを狙うのはやめとけよ」

「狙わない、つか狙えないだろ。俺だぞ？」

「ああ……そうだな。お気の毒に」

だとしたら俺も、雫さんと同じように……？

「後はそうだな、お前のお隣さんも」

「どうしてだよ？」

同じように？ いや、有り得ないと思った。今日だって、俺は既に数人に囲まれてた。他に理由があるとすれば、考えられるのは……本当に悪人だから。トイレだろうか、空席になっている雫さんの席を一瞥して、黒田は露骨に黒いため息を零した。一言「もつたないが」と始めて、続ける。

「あいつといると、不幸になるんだ」

「環さん？」

鞆に数学のテキストを詰めていると、頭上から声がかかった。座ったまま視線を上げると、声に倣ったような不機嫌な目が俺を捉えていた。

何。その一言だけを返事になると、彼女は思ったように眉を顰める。完璧な人間だからって、相手にまで完璧を求めないでくれ。まして嫌いな相手なんだから、それなりに気を遣って接してくれると嬉しい。

腕を組んで鼻で笑い、四条さんは薄紅を開いた。

「どうしてそこまで人を小馬鹿にできるのかしら？」

「してないし。何か用なら、早くしてくれないかな」

「……どういう教育を受けてるんだか」

大丈夫、耐えられる。父さんを馬鹿にしたら、きっと爆発しちゃうんだろうけど。

「まあいいわ。先生からあなたのことを頼まれたの。学校と部活の案内ね」

「ああ、そう。じゃ、よろしく」

「素直なこと。いいわ、ついてきて」

俺が帰り支度を済ませるのを待たず、四条さんは教室から出て行ってしまった。仕方ない。ため息一つ、鞆を置いたまま彼女を追う。後ろからついてきた視線はきつと雫さんのものだろうけど、気付かないふりをしておくことにした。もし彼女の抱く感情が嫉妬なら、直接話すのはタブーだ。自惚れかも知れないけど、多分彼女に一番近い人間というのは、転校して間もない俺なのだから。

四条さんは教室から出て十歩程度、三階へ続く階段の下で数人の女子と談笑していた。声をかけるわけにもいかず手持ち無沙汰になった俺は、教室の壁にもたれかかって目を閉じた。

「四条さん、転校生のこと嫌いなのか？」

本人の前でそういう話をしないでくれ。数メートル先にいるのに気付かないのか？

「嫌いじゃありませんわ。受け付けませんの」

「それって嫌いなんじゃないかな……彼、結構綺麗な顔してるよ？」

「顔の良し悪しじゃないでしょう。言うなら、S極とN極のようなものですわ」

はは、上手いこと言うじゃないか。そうなんだ、四条さんは俺の嫌う何か——磁場のようなものを展開していて、だから俺は彼女に近づくことができないんだ。馬が合わないなんてレベルじゃない。

リノリウムの床が、重苦しい音を奏でた。

「でも、八千代さんとは違うんだよね？」

「似てはいますけど。少なくとも彼女のようなものは感じません」

「八千代さん、ほんとおかしいもんね」

おかしいのはどっちだ。不幸になるなんて、どうせ自分の不運を人のせいにしてるだけだろ。怖いのは雫さんより、お前らの敵意だろうが。

思う。角を立てない生き方というのは、難しいものだ。

「あなた方は、環さんと仲良くしてあげてくださいな。私は、あの方とは……」

「うん、いいよ。私は最初からそのつもりだし」

「では私、転校生のお世話がありますので。行きましょう？」

視線だけで俺を向いて、四条さんはたおやかに笑んだ。

「い、いたの？ 四条さん、気付いたなら言つてよ」

気付いたなら言つてくれ、真にその通りだ。聞き耳立ててたことに少しだけの罪悪感を抱いて、それ以上の不快感を隠しながら、俺は笑って手を振った。女の子達は俺に倣った後すぐにその場を離れ、四条さんと俺だけが残された。

「誤解しないでくださいな。皆さんいい子達ですよ？」

「そうなんだろうな。俺もそう思うよ」

「意外に狸ですね。表情を作るのがお上手だわ」

「処世術だよ。少なくとも四条さん以外の人とは、争いたくないから」

目を見張って、四条さんは嘲るように笑った。

「私だつて争いは嫌いです。ただ……」

歪んだ笑みなのに、そのはずなのに、その顔は品性に溢れていた。まるで正しいことを言っているかのような、俺の方が間違ってるんじゃないかって思わせるような、優しい笑顔だ。

「ただ、醜いものというのは、余り見ていたいものでもないでしょう？」

言い返すことは叶わず、その代わりに彼女から憐憫の眼差しが返ってきた。侮蔑だけでなく憐れみまでくれるなんて、随分サービス

精神旺盛だな。そんなサービスはいらないから、友達にくれてやる
愛想の十分の一でいい、俺にもくれよ。

担任も厄介な人に案内を任せてくれた。ため息一つ、四条さんを
促して校内を回ることにした。

文化系の部活から回るということで、最初に入ったのは特別教室
棟。二年生が入っている教室棟から渡り廊下で繋がっていて、理科
室や音楽室などの特別教室がここに全て詰まっている。文化系の部
活のほとんどがここで活動しているらしい。四条さんは南を向いて、
窓の外を眺めた。

「私、ここで待ってます。全て見学し終わったら、声をかけてくだ
さいな」

「説明とか、してくれないのか？」

「必要、ありません？」

あるけど、

「ない、かな」

「……気も弱いよね」

「仕方ない。美人には及び腰になるもんだ」

「受け取っておきます」

最後に一度だけ俺を振り返って笑い、四条さんは今日も強かった
陽射しに目を細めた。彼女が太陽なら、雫さんは月、だろうか。
そうだ。雫さんはきつと、他者の光なしには輝けない、不器用な星
なんだろう。そうして一人、笑ってみた。ロマンチストでもないく
せ気取った比喻に、少しだけ寒気がしたんだ。寒気がしたんだ、も
しかしたら俺が光になれるかも知れないなんて、変な期待をしてし
まったから。

ため息が虚空に消えないうちに、四条さんが視界から消えてすぐの
教室に入った。美術室ってプレートが掛かってたから、美術部以外
には有り得ない。男女比の程は知らないけど、少なくとも廊下から
逃げる理由付けにはなる。

「どちら様？」

声をかけてきたのは、エプロンをした壮年の女性。皺が多く見受けられるけど、それが余計に温和な人格に見せている気がした。

「転校生の、伊藤環です。部活の見学に」

「ああ、あらあら。皆さん、大変」

と言う割には嬉しそうに、顧問らしきその女性は室内の生徒達――全て女生徒、に返答を求めた。もちろん女の子達はそんな先生の言葉には耳も貸さず、俺のことを窺いながら、少しだけはしゃいだ様子だ。男子部員がいない部活というのは表現の幅を狭めると聞いたことがあるから、多分そういうことなんだろう。

少しだけ戸惑って立ち竦んでいたら、先生が肩を持って壇上に上げてくれた。注目を浴びることに変わりないけど、形式的な分居心地はいい。

「じゃ、自己紹介を」

「あの、俺まだここに入部するわけじゃ……」

「いいじゃん、やっちゃえー」なんて、女の子の声を皮切りに、そうだそうだの嵐。

仕方ない、腹を括れ。大きく深呼吸して、微笑んでみた。

「二年三組に昨日転校してきた、伊藤環です。まだこの学校に不慣れなので、色々知っていただけだと思います」

軽い自己紹介だけど、クラスでしたよりずっと愛想を振りまいたつもりだ。自分のクラスはこれからずっと過ごすところだけど、こはそうじゃない。多少目立ってもいいし、逆にそれが心地良くもあるくらいだ。

評判は上々。拍手が沸き、皆が笑顔になってくれた。

「いい子ね。今は自主制作に取り組んでるから、好きな子のところに行くといいわ。見学が終わったら、声をかけて」

「すいません、ありがとうございます」

返答の代わりに笑顔をもらってから、俺は教室の隅に移動した。皆の視線が集まってるけど、その種類は多様だ。好奇、興味、期待、

嫌悪、女の子ばかりの場所に入る異分子なんだから、それくらいはあつて当たり前だと思ふ。戸惑いや気後れする部分もあるけど、せっかくなら皆の話は聞いていこう。

目をつけた子一人ひとりに、この部活のことを聞いた。大体の子の意見は一致していて、少し賑やか過ぎる嫌いがあるが、優しい顧問の下で楽しくやっているというのがほとんどだった。ただ、絵や彫刻、その他美術を本気でやっている子が少なく、だから作品展などに出たことがないそうだ。そしてここでも皆の意見は一致していて、それは諦めの言葉。

——「仕方ないよ」

しかしそうでない子もいる。でも自分を主張することもできず、結局周りに溶け込むような雰囲気になつてしまうそうだ。別に何とも思わない。大勢の意見が空気を作り、少数派はそれに飲み込まれてしまうのが、部活、或いは社会というものだ。指導者の立場である顧問の先生は優しくもあり、そして甘かった。

男である俺の入部は、空気を変えるいいきっかけになるかも知れない。俺を望んでいるのは意外にも、本気の連中だ。

金城早紀。バランスの整った顔つきをした、華奢な女の子。

「伊藤君、待つてるからね」
そう言ってくれた。

これだけ居心地のいい場所なら、候補に入れてもいいかも知れない。

結局美術部以降に目ぼしい部活は見つけられず、四条さんの待つ渡り廊下にまで戻ってくるようになった。

彼女は、別れた時から一步も動いた様子がなく、今もずっと窓の外に向けて目を細めている。正直なところ、立ち眩みがするくらいに美しい構図だった。どんな高名な画家だって、この絵をキャンバスに留めることなんてできないはずだ。

でも、胸に湧くこの違和感は、やはり拭えなかった。しばらく見

惚れた後、俺は彼女の肩を叩いた。

「触らないでっ！」

返ってきたのは、必死の形相と悲鳴にも似た拒絶の言葉、そして俺の腕を弾く彼女の腕だった。肩で息をする四条さんの顔は、嫌悪と戸惑いに満ちている。ああそうか、俺っていう存在は、無意識の階層にまで踏み込むほど深く、そして痛烈に彼女を蝕んでいるのか。見開いた目で荒い息を見送り、四条さんは少しだけ落ち着いたようだ。

「……すいません、取り乱しましたわ。次は、体育館に——」

「いや、もういいよ」

「——助かります」

初めて感謝なんてされたけど、それは結局俺が原因だ。肩を竦めて手をひらひらと振り、俺は渡り廊下を渡った。視線が追ってきたけど、雫さんのそれと同じように、なかったことにした。きっと、彼女だって戸惑っているはずだ。

せめて彼女の責務は、果たしたことにしておこう。体育会系の部活を行っていきそうなのは、体育館か運動場か——

もうすぐ夕日が沈む。茜色に染まった視界が、微かに藍色を散らしたような不安定さを醸していた。下校時間は少し前に過ぎ、今は通学路の途中、橋の欄干に腕を乗せて緩やかに流れる濁水を眺めていた。

雫さんの視線と、四条さんの視線、そしてその意味。いくらなんでも、「綺麗な女の子二人に目をつつけられてラッキー」なんて樂觀視ができるはずもなかった。柄にもない想像をしてみても、川に向けて笑い声を飛ばした。その少し土色に染まった水に俺の顔なんて映らないけど、きっと酷い顔をしてるんだろうと思う。

父さんの転勤について引っ越して、転校して、そして出会った二人の女の子。彼女達との間に感じる、少しだけの違和感。それを言葉に表すならきつと、共感や共鳴、つまりシンパシーというのが相

応しい。同じものを抱えているという、しかしそれなのに違和感だ。母さんは十二年前、俺が五歳の頃に交通事故で死んだ。楽しく温かいという以外に記憶は少ないが、貧しい家庭だった。それでも、楽しい旅行になるはずだったんだ。

五歳という年齢では、それを自覚するのは難しかったんだろう。結局俺は、今まで生きてきて、母さんの為に涙を流したことが、一度もないのだ。それが悲しい。それが悔しい。それからだろう、父さんを救いたいと思い始めたのは。父さんのことが好きだから、ずっと一緒に生きてきたから、どうしても割り切れない悲しみがあることを知ってる。時折それは表情になって現れ、俺に母さんの存在を教えてくれる。

四条さんには悲壮感がない。雫さんには少しだけ。

でもあの時、あの視線には、二人共にそれがあつたんだ。それも、抱えきれないほどに大きなものだった。或いは俺も。だから俺の周りは、同類だらけなんだ。四条さんや雫さん、金城さんなんかも加えていいかも知れない。

沈みゆく太陽だというのに、それはまだ強さを誇ってる。夏らしい湿った風が、一度だけ頬を撫でて、そして気付いた。ああ、風に混じるこの香り。

「いたんだ、雫さん」

「はい、いました」

「いつから？」

「環くんが、泣き始めた頃からですね」

恥ずかしいことを、みつともない、なんて苦笑して、上体を起こして雫さんに向き直った。微かに笑んだ優しい顔が、小さく傾いて俺を向いていた。こんな顔ができるのに、こんな顔で、誰をどうやって不幸にするんだよ。苦い気持ちが溢れて少しだけ顔を顰めたけど、雫さんは気付かなかったようだった。

「今帰り？」

「はい。わたし、うちでは宿題とかする気になれないんですよ」

「ああ、わかる気がする。絶対漫画とか気が散るもんね」

今度はコロコロと可愛い笑い声を響かせて、彼女はそれを肯定した。この笑い声は、すごく、落ち着く。

「それに、家は静かすぎるから」

少しだけ翳った表情を隠すように、笑顔を変えた。苦い笑顔だ。

「だから、賑やかな方が嬉しいです」

「……そっか。でも雫さんの静かな家、興味あるな」

多分これで正解。もしかしたら彼女は一人でいることに慣れているのかも知れないけど、きっとそれでも消せないものはあるはずだ。例えばうちは母さんのことを消せない。けど母さんは悲しみ以上に温もりを与えてくれる。雫さんは、どうなの？ だから多分、正解。

「招待しますよ。狭い家だけど……」

「はは……雫さんと距離が縮まるじゃん、物理的に」

「……はいっ。今からどきどきしちゃいますねっ」

ほら、雫さんだつて触れ合いを求めてるんだ。人を不幸にするだなんて噂を流布されて、反対に不幸になってるのは雫さん本人じゃないか。どうして誰も、気付いてやれないんだ。

同情なんて高尚なものじゃない。ただの憐憫だ。でも、そのどこが悪い？ そしてそれ以上に、俺は彼女に惹かれてるから好意が欲しいという、打算もある。

「帰りましょっか」

「そだね。女の子と下校なんて、かなり久しぶり」

「環くん、もてそうなの」

伸びた影は、この町に鋭く差し込んでくる夕陽のおかげで、とても長いものになっている。道の先までずっと暗くて、俺達の頭は酷く不揃いで、そして遙か遠くにあった。

可愛い人だし、楽しい人だ。やっぱり俺は、この人に会えてよかったんだと思う。話も気も合うし、俺はたった二日でこの人に酷く惹かれていた。一緒にいたいという願望より、俺達と一緒にいられるという確信といった方が正しいんじゃないか。そのくらい、一緒に

にしていることに対して感じるものが大きかった。

幸せじゃないか。少なくとも俺はこの人と一緒にいて、不幸になんてなっていない。

「着いちゃいましたね」

「俺の家の方が、近かったんだ」

俺の家の前、立ち止まった雫さんの顔は、やっぱり微笑んでいる。

「素敵なお家ですね。温かい感じがします」

「二人しかいないけど、そうだね」

「……すいません」

手を振って流して、そしてその手をそのまま雫さんの顔に遣った。少し大胆だったかなと思っただけど、雫さんは少し身体を竦めただけでそれを咎めることはしなかった。処女雪のような美しさと儚さ、押し込んでもすぐに戻ってくる弾力や強さも持つてる。綺麗な肌、綺麗な肉、そしてどこまでも白かった。

ずっと触っていたい、そう思うのが当たり前のような肌だ。

「素敵な手……温かくて、大きくて、まるで——」

わたしの為にあるみたい。

陶醉した顔で呟いた雫さんは、次には顔を赤くして一歩下がってしまった。恥ずかしいセリフに、こっちまで赤面してしまいそうだ。

「あ、あのわたし、その……」

「ありがと。雫さんの為にだったら、嬉しいと思う」

だったらこっちも、少しくらい恥ずかしくていいじゃないか。

「あ……はいっ」

恋人でもないけど、まだ親友というには浅い情だけど、この人は俺にとっても近いものを持つてると思うんだ。だからきっと、このくらい許される。明日にはカップル誕生してるかも、なんて内心苦笑して、雫さんから出てきた手を握った。それがどんな握手だかは知らないけど、頼みたいに心地良い手だった。

「また明日っ」

財布のこと忘れてた、なんてことを思い出すのは、夜、床に就い

てからだった。

翌日、担任から入部届けを受け取った。迷うこともなくその場で記入して、すぐに先生に渡してしまった。初心者ではあるけど、歓迎してくれるって言うてたし、部活くらいやってないと学校生活も霞んでしまうだろう。それに、女の子に囲まれて悪い気分になる男はそういない。雫さんのことは気にかかるけど、いつも一緒にいるわけにはいかないんだ。仕方ない。

授業中、それなのに雫さんの様子を何度も窺ってしまった。やましいことは何もないのに、どうしても彼女に責められてる気がしたんだ。授業は難しくなかったけど、内容は頭に入ってこなかった。

俺を囲む人は減り、その代わり四条さんを囲む人が多くなった。そうして、四条さんの廊下側と雫さんの窓側で、教室の雰囲気は完全に二分化してしまった。どうやらこのクラスの人間達は、本格的に雫さんの近くに寄りたくはないらしい。無視だけというなら可愛げもあるが、こうまで避けられているのを見ると寒気すら覚えた。徹底したものだと思う。

俺は、わかっていたのに、雫さんを救えなかった。改めて見たこの露骨な処遇に、俺は耐えられそうになかった。大勢に吞まれていたい。そう、自分が可愛かったんだ。

四条さんと雫さんの間、教室の真ん中で、俺に寄ってきてくれる女の子や黒田なんかと話すのが、無難だった。

「男友達いないと、やっぱり寂しいの？」

「どうかな。黒田が濃いから、別にいいんじゃない？」

「なんか酷いこと言われてる気がするぞ」

「やだ、黒田君、事実酷いものもないじゃん」

女の子のからかう声に、大袈裟に怒ってみせる黒田。騒ぎ賑やかになる鍵になるのは、大抵の場合黒田。バイタリティがあるというのは、立派な才能だ。

「ま、伊藤みたいなイケメンさんは女に囲まれてる方がらしいな」

「なんだよそれ。というか僻みにしか聞こえんぞ」

「わかるけどさー、イケメンって何時代の言葉よ？」

「伊藤君もマキも酷すぎ。黒田君、泣き入ってるよ？」

誰とでも打ち解けられるチャンスがあるというのは。転校生の特権だ。人となりを掴む、掴まれる前に自分を売り込んでしまえば、誰の仲間にもなれる。例外はあるが、敵対していなければ問題ないということが多い。もちろん俺の場合、その例外が敵対してるんだから厄介なところではあるけど。

でもま、彼女だって嫌ってるわけじゃない。受け付けないだけ。

「しかし伊藤のおかげで俺まで女子に囲まれてる。こんな幸せはないぞ」

「がつつく男は嫌われるぞ。さり気ない男らしさを見せてやるんだ」
「なに、マジか。ならどうして今まで俺に彼女がいない？」

周りの女子に意見を求めると、

「さり気なくもないし、男らしくもないからじゃない？」

「まあ、だろうね」

簡素な答えだ。非常にわかりやすくいいじゃないか。打ちひしがれる黒田の肩を叩き、一言かけてやった。諦めろ、とだけ。

「でも男子の一番と女子の一番がくっつかないの、残念だなー」

「女子ってそういうの好きだよな。別に誰が誰と好き合おうが構わんだろ」

「わかんないかな、男には。でも四条さん、もったいない」

「俺こそ、彼女はもったいないって。分相応が一番」

例えば、って見るのは、やっぱり窓から一つ離れた席のあの子だ。容姿、器量という面じゃ四条さんに釣り合うくらいだから高嶺の花なんだろうけど、彼女は気安い。きつと相応不相応に関わらず、俺には彼女がちょうどいいんだろう。

でも、やっぱり彼女は彼女だ。俺の視線に気付いたマキという女の子は、露骨に眉を顰めた。

「うそ、あの子狙ってるの？ やめときなよ」

「どうして？ 可愛い子じゃん」

「黒田君から聞いたんでしょ？」

不幸になるって？ 人と仲良くしたくらいで不幸になるんだったら、この世界なんて成り立ってないはずだ。今彼女を避けてる俺が言っている言葉なのかはわからないけど、俺だけは彼女の敵になるわけにいかない。

「教えてあげよっか？」

マキさんが語り出したのは、彼女に関わって「不幸」になった人達のこと。彼女の知る部分、つまり高校に入ってからのことだけで五人を超えているという話だ。

一人目は事故。当時雫さんと仲の良かった女の子が、彼女と一緒に通学路を歩いていた時のことだ。信号は青、見通しもいい普通の十字路で、理由もわからないまま突っ込んできた車に轢かれ、二人共が重傷。しかし雫さんだけ先に退院してから、二人の交流はなくなっていたそうだ。

二人目は傷害事件。雫さんの友人の家で遊んでいたところ、強盗らしき男が無理矢理押し入り、雫さんを人質に取った。金目の物を出せとの要求に従って母のジュエルボックスを渡した友人の首に、犯人の包丁が“誤って”突き刺さったのだ。

三人目、病気。通院していた雫さんと友達になってから、元々弱かった身体の容態が急変。そのまま苦しみ続け、帰らぬ人に。

四人目、五人目は自殺。動機は不明、今も捜査は続いているらしい。

それらの事件は全て、雫さんに原因があるようには思えない。ただ――

「怖くない？ これ、偶然に思える？」

言い返せない。

――ただ、偶然には思えなかった。いくらなんでも、高校に入ってからと少しでこれだけの事件に巻き込まれるなんて、有り得ない。出来過ぎ、にしても出来過ぎだ。

「だからね、あの子はやめときな」

「……ごめん、席に戻る」

痛々しい目で、俺の友達は席に戻る俺を見送った。その眼が雄弁に語ってた。「関わるつもりか」って。

シヨックだった。もしかしたら本当に雫さんが不幸を運ぶ使者のように思えたから。そして何よりシヨックだったのが、それを肯定してしまう自分自身だ。だからとは言わないが、せめて俺が不幸になるまでは、彼女の傍にしようと思った。確かに怖いけど、それ以外に「自分を救う」方法が見つからなかった。このまま雫さんを避け続けていれば、きっと俺は自分に失望して、「不幸」になるだろう。それだけは確かだ。

だからせめて、彼女の前では笑っていようと思う。

「雫さん、何してるの？」

「あ……環くん。えと、えへ、お勉強です」

困ったように笑って、教科書を顔の前に持ってきた。両手で持った教科書で顔は半分隠れてるけど、見なくてもわかる。桜色の頬と可愛い仕草に、今までの陰鬱とした気分は晴れ、変わりに笑顔が浮かんできた。

そうだ、こうして話してれば悩むことなんてない。朝一番に雫さんに挨拶して、話をして、授業が終わったらすぐにまた雫さんに話しかけて、ずっとずっとだ。

「あの、わたしの顔、何かついてる？」

「いや、なんでもない。何の勉強してるの？」

もしかしたら役に立てるかも知れない。

「お勉強っていつても、教科書読んで自分なりに解釈するだけです。現代文の」

「ああ、そうなんだ。文学少女なわけ？」

「そんな、違いますよう。教科書くらいしか、読まないし」

そもそも教科書すら読まない俺よりは、ずっとマシだ。現代文なんてセンスによるところが大きいんだから、勉強しても意味がない

という考えが強い。俺の場合、そのセンスが模範解答と偶然一致してるだけで、雫さんみたいに色んな解釈を持つ人もいるんだな。確かに、それも立派なセンスだ。

好感が持てるじゃん。照れた顔も保護欲をそそる。

「環くんは、得意な科目はなに？」

「全体的にやるよ。平均より少し上くらいかな」

「すごいです。わたし、典型的な文系人間だから……」

笑顔が似合う、というより、よく笑った。一人で俯いてる時はあんなに悲しそうなのに、俺と少し話すだけで、こんなにも可憐な笑顔を咲かせてくれる。

「じゃあ」

「はい？」

首を傾げる雫さんが可愛くて、少しだけ笑い声のまま提案した。

きつとこの気持ちも、受け取ってくれるはずだ。転校生っていう立場が幸いしたんだろう。遠ざけてた友達じゃないから、勇気を出して話してくれてるんだと思う。

「勉強、教えるよ」

返事なんて、聞くまでもなかった。

3話

めざめて中の人

入部届けを出した当日だけど、早速部活に顔を出すことになった。碌に絵を描いたこともない俺だけど、この美術部は楽しむのが目的らしいし、なにより嫌いじゃないというのは大きいだろう。いずれ楽しみに変えればいい。

「あ、伊藤君来たよー。皆、挨拶ー！」

もう七割以上の子が揃っていたらしく、その挨拶はとても大きなものだった。歓迎の声色が多数を占める中、一部女子はまだ警戒してる。男が一人なら仕方ないことだし、こんな中に入ろうと思った自分がまだ不思議に思える。

十五人の女の子の真ん中に、一人の男。違和感はあるけど、いつか馴染むといい。

「来てくれたんだ、伊藤君」

「ああ、金城さん。ここ以外に楽しそうなところ、なかったから」

乱雑に、それでも全員がデッサンのモデルを見えるように並べられた椅子。隅に座った俺の隣に移動してきたのは、油彩が本職の金城早紀さん。コンクールに個人で応募する、この部内でも本気で美術をやっている女の子の一人だ。

「部活単位でギャラリー借りた方が、色んな人の目に留まるの」

「わかるような、気がする」

「色んな子がいてくれた方がいいんだ。だから男の子の入部は、嬉しかった」

喜色を満面に貼り付けて、金城さんは目を細めた。クロツキー帳を抱きしめた胸が少しだけたわんだのを見て無意味に目を逸らしてしまふ自分に、嫌気が差す。彼女には悪いけど、この女の子だけの空間を意識しないのは不可能だ。

でも、金城さんは気にした様子もない。許す許さない以前に、盲目的になつてゐたみたいだ。今までこの雰囲気によつて押し付けられてきた活動に、それだけ辟易してきたんだろ。それに俺だって、こうして皆が作り出す作品や空気に、惹かれるものがないわけがないんだから。

「一緒に頑張ろうね。伊藤君は何するの？」

「何、というと？」

「有名どころで水彩、油彩、彫刻、それから漫画なんかもあるよ？」

「漫画まで美術なんだ。そーだなあ……」

馴染みがあるのはもちろん水彩、小学校や中学で飽きるほど使ってきた。でも油彩のあのリアルティも惹かれるものがあるし、彫刻は形がある分わかりやすい。漫画なんかはストーリーが浮かばないし、最初に却下できるけど……

しまったな、本気になれなくても、少なくとも何がしたいくらいは決めてくるべきだった。でも今ここで彼女に返事をするなら、やっぱり無難に、

「水彩、がいいかな」

「そうだね、馴染みがあるし、あたしも色々教えてあげれる」

「水彩もやるの？」

「油彩は初心者には早いからね。水彩もやってた」

「じゃ、ご教授願います」

頭を軽く下げた俺を笑って、金城さんは笑いながら言ってくれた。

「ビシビシいくよ。あたしについてこないでいいから、楽しくやろうね」

金城さんに勧められたのは見学より、皆と一緒にデッサンに参加することだった。デッサンは何をするにも基本になるから、誰でも丁寧に長く深くやっておくべきだ、らしい。逆らう理由も見つからず、備品であるクロッキー帳と2Bの鉛筆を受け取り、金城さんの隣でモデルを見詰めてみた。

よくこういう美術系の漫画やドラマで描いてる、フルーツ。リンゴやバナナは、形が掴みやすく流線型なので、陰影も捉えやすくなってるらしい。とはいっても初心者には「デッサン」は敷居が高く聞こえてしまうのが本音。俺にそういう臆病な面があるのが意外ではあったけど、少し描いては隣を窺うことになってしまった。

真剣に取り組む金城さんは、それでも嫌な顔一つすることはなかった。いい子という以上に、俺が真剣に取り組むことを最初から望んでいたからだろう。

「伊藤君は一つ一つを見過ぎかな？ デッサンは、何がおかしいか、何が目立つかを捉えるのが大事なの。だからまず全体を見て、目に付くものを大きく描いてみたらいいよ」

「全部リアルに描くんじゃないの？」

「そうとばかりも言えないよ。まずは絵というより、簡略化した『

図』を描くの。細かく描画するのは、一番最後」

「なるほどね……」

鉛筆を視界の中でモデルの真ん中に立てて、少しだけ画家気分に浸ってみた。行動の意味もわからずにやってたら成果はないんだろうけど、少なくともこれで「個」を意識することはなくなるはずだ。「そうそう、正解。パースを掴むのと、構図を決めるのにそれする人が時々いるんだ」

「それっぽく見えるかな、ってただだよ」

口元に手を寄せて笑い、金城さんがからかうような調子で「頑張れ、伊藤画伯」なんて言うから気恥ずかしくなってしまった。照れ

隠しという以上の意味もなく鉛筆を走らせ、そしてすぐに消してしまっただった。

俺が全体を大まかに描き終える頃には、部員のほとんどがデッサンを終えてしまっていた。几帳面、丁寧というにもおこがましい俺の絵より、部員達のそれには明らかな芸術が見える。慣れ、要するに経験だろうか。

友達同士で相談しあい、顧問の先生に見せると、皆は次に俺の元にやって来た。

「うわー……へたくそー」

「ほんとだ、酷いねこれ」

「ほつといてよ」

俺の手元を覗き込む女の子の髪が肩にかかって、妙な気恥ずかしさを感じた。それから俺の絵に対する本物の羞恥が半分。

「ホントお願い、見ないで」

「沈むな沈むな、最初は私もこんなもんだったつて。それに……俺の隣を意味深に見遣つてから、彼女達は顔を合わせて笑う。」

「それに早紀だけに独り占めさせるわけにいかないでしょ」

「そうそう、この学校にいい男なんて滅多にいないんだから」

「ちよつと皆、私はそんなつもりじゃ……」

とつくにデッサンを終えて俺にアドバイスをくれていた金城さんは、少しだけ桜色に染まった顔を小さく伏せて抗議した。もちろんそんな抗議が通るはずもなく、金城さんの意見はなかったことにするように俺の意見を求めるのだ。もちろん描画のことでなく、金城さんと一緒に活動したことに對する、だ。

からかったら、彼女はどう反応してくれるだろう。そして俺は皆のノリと好奇心に打ち勝つことができなかった。

「金城さんの真剣な目、ドキドキしちゃった」

「ちよ、伊藤君、そんな……」

「早紀、抜け駆けは酷いよー」

「私は伊藤君に慣れてもらいたくつて。伊藤君、だよな？」

今度は耳まで紅潮させて、必死に弁解してる。男に慣れてないらしく、その反応は実に初々しかった。

「可愛い子ばかりだからさ、絵よりそっちに意識いくよね」

なんてことを大声で発言するから、美術室はらしくないほどに賑わったのだった。

この日の部活は、俺の為にデッサンに始終して、そして金城さんはずっと俺の元にいた。戸惑いはあったけど、それ以上に彼女の気持ち痛みほど伝わってくる。彼女は真剣に望んでいるんだろう、皆の、描くのはあくまで話の種という気持ちだが、少しでも絵に戻してくれることを。

続く真夏日に集中はできなかったけど、構図を変えてなんとか二枚ほど描き終える頃には、すっかり日が傾いていた。

雫さんはいつも学校に残って勉強しているらしい。初めての部活を終えて帰ろうとした俺を待っていたみたいに、彼女は校門に身体を預けていた。

「あ、環くんっ。奇遇ですねっ」

「今日も勉強？」

「はい。今日は英語を頑張りました」

握り拳を二つ、胸の前で作ってみせた。微笑ましくて思わず吹き出した俺を、雫さんは不審そうに見てから、そして同じように笑う。「ほんとは、待ってたんです。少し待ったら、環くんの部活も終わるかなー、って」

「愛いやつ。なんだったら、入部すればいいのに」

「……駄目ですよ」

理由を問うと、雫さんは俯いてしまった。昨日と同じ夕陽は、それなのに彼女の顔を照らしてはくれなかった。

「わたしは、友達を作ったらいけないんです」

「それこそ理由が知りたいし、だったら俺は何？」

「ごめんなさい。環くんには悪いけど、私も怖かったんです」

一人でいることが。

臆病になるのが悪いことなんていわないし、まして謝る必要なんてどこにもない。俺だって、一人になつたらなんて思うと震えが止まらないくらいだ。そこに常にあの人の影があるから、俺は頑張つていられる。父さんや母さんの影、今なら美術部の皆、そして――

「わたし、疫病神なんです。不幸を運ぶんです」

「そんなことない。俺は君といると楽しいし、幸せ」

「矛盾してますよね。皆を不幸になんてしたくないのに、わたし、環くんを不幸にしようとしてるんです」

幸せになりたいという気持ちと友達になりたいという想いの、どこが矛盾してるんだ？ 少なくともなんて言えないくらい、俺は雫さんと一緒にいることを望んでる。

口に出す代わりに、鞆を放り出した。湿気の代わりに、雫を抱きしめた。

「ほら、ドキドキしてるだろ？ 幸せなんだ」

「服の上からじゃ、聞こえませんかよう」

「そりゃそっか……」

苦笑して、口を開いた。尚早かな、なんて思わなかったし、なにより俺は焦ってたんだろう。彼女のことは正直に言うと怖かったけど、それ以上に幸せにしたいって願ってた。

「言つていい？」

「……どうぞ」

「会つて三日だから、少し早いかも」

「早く言つて欲しいです」

「じゃあ言うよ。」

その言葉は、雫の涙腺をいとも簡単に決壊させてしまった。出会つて三日、俺だけの快挙だ。

雫、お前はまさか、この小さなキスまで不幸なんて言わないよな？

その日、父さんが仕事で大きなミスをして帰ってきた。雫を責め

ないように気をつけないと、なんて思った自分を、少しだけ嫌いになった。

雫の家は、予想していたよりずっと小さなものだったけど、それよりずっと、寂しく静まっていた。彼女が言うには、両親は既に他界して長いらしい。それだけの不幸に見舞われれば、確かに自分が不幸を運ぶなんて誤解が植わっていてもおかしくない。

大丈夫。その分俺が幸せになればいいだけなんだから、実に簡単なものだ。

「お茶入れるね。座って待ってて」

「砂糖は少なめでお願い」

「うん。そこら辺の本なら読んでいいから」

部屋を出て行った雫の後から聞こえたのは、ドアの閉まる小さな音。階段を下りる音を見送ってから、雫の言う通りに本棚を漁った。白い壁紙に白いカーペット、白いベッド、白いテーブル、白い本棚やクローゼット、タンス。全てが白くて、雫の部屋に抱いた最初の感想は、彼女には悪いけど「病室みたい」だった。摩くカーテンが唯一桜色に染まっっていて、俺の来訪に少し照れてるみたいだ。

部屋を意識しないように無造作に取り出した本を、開いて目を落とした。

取り立てて変わったところもない童話。幸せを運ぶ鳥が、行く先々で笑顔を作る話だった。

どうしてだろう、嬉しくなった。彼女はまだ諦めてるわけじゃない、皆と一緒に幸せになりたいって思ってるんだ。そう思ったから彼女が意識してこれを買ったわけでもあるまいに、まさかただの童話に救われることになるとは思わなかった。

幸せを運ぶ鳥は、しかし最後に辿り着いた家で拒まれてしまった。その家には不幸を運ぶ鳥が既に住んでいて、彼が入る隙間なんてなかったらしい。その家のその後は描かれず、その代わりに幸せを運ぶ鳥の気持ちが克明に描かれていた。羽根を置いてきたから、きつ

と彼らは幸せになるはずだ、と。

腑に落ちない、というか。確かに子供向けではあるけど、これは余りにも出来過ぎているじゃないか。

ドアがゆっくりと開かれるのと、俺が本を仕舞うのは、ほぼ同時だった。

「お待たせ、環くん。クッキーあったから、持ってきたよ」

「ん、ありがと。ま、座りなさい」

座布団をテーブルの脇に敷いてやったら、雫は笑いながら座った。

「わたしの家だよ、ここ」とからかうような、明るい笑顔だ。

「雫、お邪魔してます」

「なあに？ 今頃そんなこと」

「いや、言ってなかったから」

目の奥で笑んで、その淡い茶色を潤ませてくれた。

「はい、ようこそ、環くん」

俺達が付き合い始めてから、早くも一週間が経とうとしていた。今日は日曜日、学校も休息に入っている。取り立てて変わったことはないけれど、俺達は上手く「恋人」をしていると思う。唇だって、何度が重ねた。

学校、クラスでも周知の事実だ。もちろん歓迎はされなかったけど、概ね反対されたわけでもない。苛めなんてものも予想してたけど、雫に関しては安全としか言えなかった。雫に関わりたくない一心で、皆は非難すらすることはなかったのだ。それは或いは、苛めよりも苛烈なのかも知れないけど。

「ラッキーだよ」って、雫は困ったように笑っていた。馬鹿だな、雫。そういうの、不幸中の幸いっていうんだよ。それは決して、幸せなんかじゃない。

「環くん、クッキー美味しい？」

「ああ、うん。ちよっと甘いけど」

「苦いコーヒーにはちょうどいいよ。それにそれ、わたしが昨日作ったんだ」

「なら、一番美味しいな」

雫は本当によく笑った。迷いのない、爛漫な笑顔だ。

「なら、ってなあに？ 取ってつけたみたい」

「いや、愛情が……」

「環くん、そういうこと平気で言えるんだね」

少しだけ妬いてるみたいで可笑しくて、可愛かった。

「雫だけにな。他はもう、今はいいや」

「そっかそっか。じゃ、わたしも」

「お前は幸せになるんだよ。いやいや、一緒にだな」

「そう、だね。それがいいよ」

そう、雫だけじゃなくて、俺が幸せにならないと意味がない。それが多分、雫を救ってやれる唯一だと思うから。照れ臭そうに笑った雫が、頭を掻いてクツキーを頬張った。小さく膨れた頬がリスみたいで、俺は意味もなく微笑んでしまうのだった。

なかなか勉強は始まらない。元々雫の家に来たのは勉強する為だったけど、恋人の家だという事実はそう簡単には頭から離れてくれなかった。テキストとノートは開いてあるけど、俺達の手からはいつまで経ってもカップとクツキーが消えることはない。笑い声は、部屋に木霊し続ける。

こういうの、幸せっていうんじゃないかな。だとしたら俺達、もう大丈夫なんじゃないかな。細めた目に映る雫が、たおやかに微笑む。

「雫、昼飯、どっか出かけようか」

「えー。わたし、作ろうと思ってたのに」

「デート、したことないだろ？」

顎に手を当ててしばらく悩むと、雫は不承不承頷いた。

「うん。じゃ、行こう」

「決まり。ついでにこの町、案内してよ」

「そうだね。環くん、まだ慣れてないよね」

そうさ、ずっと雫の傍にいたんだから。学校で会うと、俺は部活

で雫は居残り、帰ったら父さんとずっと話していた。初めての休日、昨日は雫に用があったらしく、することもなくて家で怠惰な生活を送っていた。

あの日猫を拾って以来、一度も町へ出かけていない。若者の行きそうな飲食店も服飾店も知らないし、商店街だってまだ全てを把握し切れてるわけじゃない。そういうのは先輩である雫に訊けば、一番近道だ。

「じゃ、お昼は街に出ようね。それまでは……ね」

「勉強会は中止だな」

「……ん」

雫は、後ろから抱かれるのが好きみたいだった。一度、誰もいない教室で膝に乗せてやったら、甚く喜んでくれた。ベッドを背もたれにして後ろからお腹を抱えてやると、雫は少しだけ色情に染まったため息を漏らす。

時間を忘れるくらい、甘美な時間。ただ言葉を交わすだけで、満たされた気がしていた。

「不思議。どうして今まで、環くんと出会えなかったんだろうね」

「俺も、今すっげえ……なんだろ、胸が一杯になってる」

茶色の髪が目の前で揺れ、首だけで振り向いた雫の臉が、微かに濡れた。

部屋着のトレーナーから外行きの服に着替えた雫は、小さな白いポーチを持って跳ねるように俺の腕に纏わりついた。ピンク色したハイネックのノースリーブシャツに、半袖の白いフードパーカー。淡いブラウンのスカートがきつと幹で、今の雫は「桜」を思わせた。春は過ぎたけど、彼女の温かさによく合った。

繁華街、地元では「街」と呼ばれるそこは、その名よりずっと寂れている印象を受けた。以前住んでいた町のそれはもっと高層ビルが建ち並んでいたが、ここは精々デパートが一件程度だ。それより、ここには「電飾」というものが余り見られない。低いビルばかりで、

そこは正しくコンクリートジャングル。色がなかった。

だからこそ、この一本の桜が際立って映える。濡れた髪が軽やかに揺れ、しかしその花弁は散ることはなかった。

「環くん、ファミレスでいい？」

「どこでもいいけど、雫のおすすめは？」

「わたし、お金持っていないから……美味しいお店は、よく知らないの」

「俺がおご……ってそういや」

首を傾げる雫の手を取ったまま、少しだけ脂汗が流れた。雫、氣付いちやったかな。

そうだ。俺、財布落としたままずっと放置してた。探そうとしてもいどころか、交番に届け出ることすらしてないじゃんか。確かに今まで困ったことはないけど、これから女の子と付き合おうっていうのに無一文じゃまずいだろう。

奢る、なんて口にしなくてよかったけど、このままだと雫から施しを受けることになる。

「なあ雫、交番みたいなのって、どこにあるんだ？」

「交番？ それなら駅の隣にあるけど。どうしたの？」

「行こう。今すぐ行こう」

「え、え？」

駅なら知ってる。この町には新幹線で来たし、実のところこの繁華街だつて一度横切ってるんだ。その時は疲れて何も見なかったけど、一応道順程度は覚えてる。

困惑する雫の左手を引いて、迷いなく歩いていく。人通りは、やはり休日の繁華街だけあって相当なものだ。少なくともすれ違う人と道を譲り合う程度に混雑しているし、何より耳につく喧騒は余りに大きい。煩い取るか、それとも心地良いと取るかは、きつと気分次第なんだろうけど、雫と一緒に大抵のことは許せた。

デパートの程近く、駅の隣にこぢんまりとした建物。南派出所と称されたそれは、とてもじゃないけど人を歓迎してるようには見え

なかった。

「な、なんだか入りにくいね」

「雫はここで待ってる。俺、入ってくるから」

「ええ、一人にしないでよお」

袖を引っ張りながら泣きそうな顔で言うもんだから、俺が断れるはずもなかった。雫の手を引いて、そのガラス張りの引き戸をゆっくりと開く。

視線を浴びせたのは、二人の制服警官。一様に訝しげな表情だ。

「何かありました？」

「ちよつと前に、財布落としちゃって」

簡潔な用件なのに、彼らは揃いも揃って面倒そうな顔を作ってみせる。俺だってお前らを頼るのは不本意なんだけど、こっちは顔に出しちゃ駄目だって？

ため息一つ、中年の警官は奥の部屋に引っ込んでいった。恐らく、奥の方に遺失物が保管してあるんだろう。そう大きくもない町だけど、繁華街の中心にあれば落し物だってたくさんあるはずだ。確かに、面倒かも知れないけど。

「環くん環くん、お財布なかったの？」

「ああ、転校初日に四条さんが突っかかってきたろ？」

「うん。猫がどうか、って」

「川で溺れてたのを助けたんだ。その時に、だと思っただけど」

雫は一瞬だけ諦めたような顔をした後、憮然とする俺の表情を見て頂垂れてしまった。確かに川に落ちた財布が返って来るとも思えないけど、そこは彼女として応援してくれるべきじゃないかな、なんて表情を、俺は改めようと思わない。

俺が雫の挙動を窺ってるうちに、警官達は二人がかりで遺失物の中から財布を選び出してくれたらしい。

「この中になれば、諦めてもらうしか」

「探してみます」

とはいっても精々十数個。ぱつと見てわかったのは、残酷な現実。

「環くん？」

「ありませんでした。届いたら……」

「書類に名前を」

差し出されたボールペンと小さな紙。遺失届と銘打たれたそれに、名前や住所などを書き込んでいく。はつきり言ってしまうが、「見つかるかな」という希望より、「駄目だろうな」という諦観の方が圧倒的に大きい。一応、藁に縋ってみただけだ。

交番から出た俺達を歓迎したのは、入る前より強くなった鋭い陽射しと、纏わりつく湿気。

「暑いね」

「言っな、雫。お前はちっちゃいから、届く頃には陽射しも弱くなってるだろ？」

「無茶言わないでよお……ほら、肌がチリチリするよ」

「そんなものは見てもわかりません。ただ言えることは、白いじゃんか、くらいだ」

そういえば出かける前に何かクリームのようなものを塗っていたような気がする。多分だけど、UVカットクリームってやつだろう。女の子っていうのは、魅力的である分面倒が多い。差し引きでどちらが上だと言えない俺は、果たして性差に疎いのだろうか。

不思議そうに自分と俺の腕を見比べる雫は、良くも悪くもコケテイッシュだ。笑うと、表情はそのままに俺を見上げた。こういう仕事も、女性ならではだ。

「環くん、楽しそう」

「雫は楽しくないの？」

「た、楽しい！ 楽しくないわけ、ないもん」

雫の縋った腕に、少しの汗が滲む。気持ち悪くないのかな、なんて思ったけど、それを口に出すのは野暮だろう。半袖のシャツのボタンを、意味もなく弄ってみた。

「じゃあそうだね、今日はわたしが奢ってあげる」

「ほんと、マジすいません」

「あはは、いいいいよ。女の子だって、お金払うのは嫌いじゃないもん」

「俺は嫌いだけど」

「それならわたしの為にお財布なんて捜してくれないでしょ？」

ああ、痛いところをつくな、雫は。正確に言えば「女の為」じゃなくて「恋人の為」だから、多少の我が侬というところも大きい。彼女の笑顔が見たい、っていう我が侬だ。

でも雫、お金持っていないって言ったじゃんか。

「ま、ご馳走になります」

「そうそう、素直にね。お姉さん、奮発しちゃう」

「調子に乗るな」

額を指で弾くと、ポーチを持った手で押さえながら涙目で俺を睨んだ。「何するの」、なんて声が聞こえてきそうだ。頭を撫でて機嫌をとってやると、雫は納得いかないように、だけど素直に頬を緩めてみせた。可愛い。

笑顔をそのままに雫が指差す先に、小さなレストラン。その規模の割に、そこはファミリーストランを名乗っているそうだ。

「生意気なファミレスだな。家族が何組入れるんだ？」

「んー。十組くらいかな。でもここ、安いから」

「奮発するんじゃないかったのか？」

「お金、ないからね。というか……」

俺の腕を引っ張りながら一歩前を歩いた雫から零れたのは、苦い笑い。

「うちのお金は、あんまり無駄遣いしたくないから」

表情は見えなかったけど、簡単に想像できた。たった一週間だけで、雫のことは誰よりもよく知ってるっていう自信がある。

だから何も言わずに、立ち止まる雫の横に並んでやった。何を望んでるかがわかるわけじゃないけど、雫が俺のことを頼りにしてるってことくらいはわかる。いつまでも雫の後ろにいたら進まないし、こうすると、雫の表情が窺える。

軽やかな笑顔だった。それだけで俺は、救われた気分になる。

「入ろっか、環くん」

「まじごちになります」

中は、ファミレスというにはシックな造りになっていた。木を基調にして、天井には三枚羽の扇風機がゆっくりと回っている。大きな窓からはたくさんの光を取り入れ、自然の照明はしかし緩やかに優しい空気を作った。

案内された禁煙席。四人掛けの椅子に、向かい合って座った。すぐに出了れた、氷水の入ったコップを両手で持って、雫は豪快なため息を零す。

「はー、涼しー。ほら環くん、かんぱーい」

「かんぱい」

グラスを打ち合わせ、中身の水を一気に飲み干すと、冷房と重なうて身体を芯から冷やしてくれる。腹にたまる心地良さは、味のな水だからこそだろう。コップを置いたテーブルの上に落ちた雫が、木のテーブルを大きく見せるレンズのように光った。

「はい、メニュー。あんまり高いの頼んじゃだめだよ」

「んー。いつ雫とキスするかわかんないし、あつさりとしたのがいいよな」

「ちよ、環くん！ そんな、こんなところで言わないでよお」

いや、俺も恥ずかしいけどね。

「もう一歩先、進んでみる？」

「先、って……ば、ばかつ」

その紅潮は、怒り故にかはたまた羞恥故にか、或いは期待してるのかも知れないけど。恥ずかしいセリフも、たまには言ってみるもんだな、なんて思ってみるのだ。どうせ昼時の喧騒に隠れて、他人の介入なんて許さないんだから。

実は、こういうところに来たことが余りない。母さんが生きてる頃は貧乏で金銭的な余裕がなかったし、その後は父さんの多忙で時間的な余裕がなくなつた。そしてそれ以上に、多分精神的な余裕が

できていなかったんだと思う。だから、父さんを連れて「ファミリ
ーレストラン」なんて名前がついたところには、来れなかった。

新鮮でいいものだ。明るく笑う家族、囁きあう恋人、そんな周りを
穏やかな目で見回す老人。ここは、酷く温かい。

「環、くん？」

「ん。どした？」

「……なんでもない。食べるの、決まった？」

メニュー見てなかった、なんて反省の色を見せつつ雫に訊き返す
と、迷いのない返答があった。

「じゃあ俺もそれでいいや」

「食べたいもの食べていいよ？ ファミレスで金銭が足りないなん
て、ないし」

ピンクのがま口を取り出してかちかちと開閉しながら、雫は気遣
わしげに俺の瞳を覗き込んできた。その琥珀色に少し誘惑されたよ
うな気がして、頬が熱い。潤んだそれは、男なら誰だって摩くだろ
うから、きっと俺は俺以外を見せようとは思わないんだと思う。

視線の一つまで独占したくなる。初めての恋人は、麻薬のように
俺を陥れている。今もずっと、現在進行形で。

結局頼んだメニューは同じもの。ナポリタンスパゲッティと、フ
リードリンクだけだ。足りないだろう、と雫は何度も訊いてきたけ
ど、どうしてか俺は小食だ。多分昔の名残だろう、基本的には貧乏
性なのだ。

談笑を交えながら数分も経つと、パスタはすぐに出てきた。湯気
が昇る皿の中は仄かに橙が混じった綺麗な赤。独特のその色は、ト
マト色、とても言うのだろう。

「美味しそう」

「だな。俺、飲み物のお代わり持ってくる。何飲む？」

「環くんと同じでいいよ。すぐ戻ってきてね」

「なんだ、寂しいのか？」

「ちっ、違うもん。お料理、冷めちゃうから」

まだ男に慣れてないんだな。可愛い割に今までもてた試しがないって言うし、俺のファーストキスはそのまま雫のファーストキスになっただけ。

ドリンクサーバーでメロンソーダを二つ注いで、氷を放り込んだ。合成色とは思えない、毒々しい緑色。メロンとは思えない独特の甘み、安っぽさ。こういうチープなのが、意外と美味しかったりするから曲者だ。

「なんだ、待ってたのか」

「だって、一人じゃ美味しくないもん」

隣の席を一瞥してから座って、雫に礼を言っておいた。目が合ったから多分、

「伊藤君……と、」

仕切りが陰になって見えなかったんだろう、話しかけてきた子は雫を見て露骨に顔を顰めた。雫がそんな風に申し訳なさそうな顔作る必要、ないのに。

「マキ、どうかした？」

「ううん、別に。二人って、ほんとに付き合ってたんだ」

「疑ってたの？ 雫、何とか言ってやれよ」

「え、と、えと、わたし、好き……」

人見知り、ではないよな。彼女は本当に自分が悪いんだと思って、遠慮してるんだ。それでも俺のこと好きだって言ってくれたのは、素直に嬉しい。

マキは数秒悩んだ後、友達を呼んで俺達の席に移ってきた。雫がいるから近づきたくないが、やはり興味はあったらしい。転校生を三日で落とした女が疫病神だっていうんだから、彼らにとっては絶好のゴシップなのだろう。

「それで、二人はどこまで？」

「マキ、ストレートすぎ」

「いや、いいよ。雫、言ってやれ」

「ええ？ うん、と……キス、はしました」

それだけで騒ぐマキとナオは、きつと雫のことが嫌いなわけじゃないんだろ。正直なところ、俺と同じ。怖いんだ。でもその恐怖より幸せがずっと大きいから、俺は雫の傍で耐えられる。傍にいただけで幸せっていうのは、きつと「ユーフォリア」っていうんだろ。

この二人とは、できるだけ雫に喋らせてやろう。話せばきつと、雫が無害だってわかるはずだ。

「あの、マキ、さん」

「何？」

険のある態度に萎縮する雫は、それでも頑張った。

「環くんは、女の子にもてるんですか？」

「そりゃね、これだけ顔が良ければ。まあ顔だけ見れば、釣り合ってるんだろっね」

「そんな、わたしは……」

今日の雫は、よく照れる。歯の浮くようなセリフだったり素直な褒め言葉だったりするけど、雫はそれに“裏”を感じようとしない。良く言えば素直。逆には愚直だ。

「四条さんもわかんないなー、こんなイイ男が駄目なんて」

「俺だってわかんないよ。でもま、害がなければ関係ないでしょ」

「そういう問題じゃないんだな。イイ男とイイ女が付き合う、ってのが面白いんじゃない」

それ、心外だな。

「雫、イイ女だけど」

「まあ、」雫を一瞥したナオは、マキを窺ってから言う。「そうかもね」

マキは「面白くない」を表情で示してるけど、雫のことを蔑ろにするのは許せない。だけどナオがマキと雫の両方を気遣ってるのもわかるから、露骨に嫌悪を表すわけにもいかなかった。雫とナオは立場が中途半端で立ち回りにくいし、俺とマキは両極端で機嫌が悪い。

雫が悪いんじゃない。二人共理性ではわかってるはずなんだ。ただ、噂が真実だからこそ、雫に近寄ることができない。

だったら、俺が上手く立ち回るしかないじゃないか。雫という人間、雫という可憐は、知らぬままに放って置かれるには余りに惜しい。そうなたらきつと俺は独占欲を顕著にして不機嫌になるんだろうけど、彼女の周りには四条さんと同じように、人が溢れていておかしくはないんだ。

沈黙は静寂になり、俺達の一席を包む。周りの喧騒と空気の差異、微かに届いた陽光が壁のように俺達を囲んで、逃げ出せそうにもなかった。俯く雫が、痛々しい。

「雫、食べていいぞ」

「うん……いただきます」

フォークとスプーンを取った手は、微かに震えている。

「マキさあ、ナオとどこで知り合ったの？」

「ナオ？ えつと、確か入学式の日……どうだっけな」

「私、中学からは逢坂に一人で来たから、友達いなくて。で、最初がマキなの」

何も知らない人と友達になれるなら、雫がそれでもいいはずじゃないか。

俺だつてわかる。人間、最初は人の悪い部分に目が向くようになつてゐるんだ。それは決して悪いことではないけど、そこで目を閉ざしてしまふのは余りに愚かしい。着眼点は、評判や噂などの表層より、もっと人の奥底にあるべきだ。

「マキ、人懐っこいから」

「そっかな。まあ、人見知りはあるまいしないけど」

「私のこと、何でも訊いてきたじゃない」

「そうだっけー？ でもさ、訊かなきゃわかんないし」

ほら、チャンス。

「マキ、わかってんじゃない。なら少しでいいから雫のこと知ってやつてくれよ」

言葉に詰まったマキと、彼女に見えないように俺に目配せするナオ。雫は何も言わない。その代わりに、宙で止まったフオークが雫を主張していた。

皆が雫を怖がるのとは別の意味で、雫は皆を怖がってるんだ。誰だって自分が可愛いはずなのに、雫は皆の為に自分から遠ざかる。我が侘かも知れないけど、怖がるのならせめて雫を知ってからにして欲しい。

俯いて黙るナオと、まだ少し不審——或いは不安な色を残すマキ。大丈夫だ、彼女達はあと一押しで雫に近づいてくれる。ナオは恐らく最初から雫を知ろうとしてくれてるし、マキはナオの言う通り人懐っこい。ナオが一つ自己主張してくれば、この二人は何かなる。

そうすれば、俺は幸せになれる。だってそうだろ、雫の幸せは俺の幸せに直結してるんだから。

「八千代さんは、いつからこんな風だったの？」

口を開いたのは、意外にもマキだった。答えにくい質問だろうに、雫は俯きながらも小さな声を響かせた。

そしてその答えは余りにも、

「——生まれた頃から、です」

憐れ過ぎた。信じ難い、というよりは有り得ないだろう。生まれた時から、雫の周りには不幸が溢れていて、だから避けられてたってのか。

開いた口が塞がらない、というのはこういうのを言うのだろう。

マキもナオも、そして俺も、表情一つ動かすことができなくなっていた。頬杖ついたマキは目を見開いて、背筋を伸ばしたナオはその背中が固まったように張っていて、そして俺は、乾いた笑いが止められなかった。

「生まれた頃って、嘘だろ？」

「ほんと、だよ。わたしだけ病院追い出されたって、お母さんに聞いた」

病院内にたくさん並んだベビーベッドが、短期間で三つも空いてしまった。雫の隣が二人、事故に遭い、そしてそれが理由で雫が追い出されたらしい。

「幼稚園は年長まで、小学校は二年生まで、中学校なんて一年もたなかった。新しい友達ができるたびに何かあって、わたしはずっと一人きり」

「雫……」

初めて聞いた、雫の過去。歳を経るごとに、雫の不幸は強まっていった。最初は軽い——例えば怪我が多かった程度だったのに、現在に至っては死すら有り得る。

正直に言おう。話を聞いて、俺は雫に対する恐怖を強めた。否定するのは簡単だけど、それはある意味では絶対的なものだといえた。死を是といえるほど俺は人生を諦めてないし、何より父さんに心配をかけたくなかった。雫は、確かに怖いよ。

最後に雫は俯いて、フォークを置いた。

「だから、わたしが怖いの、当たり前です。皆の気持ちは、痛いほどわかります」

「だったらどうして、伊藤君に近づくの？」

「マキ！」

「黙ってて、ナオ。いいじゃん、いい機会だよ」

雫の話を聞くのは、最初で最後だ。マキはそう言ってるんだと思う。

そして雫の話は実に単純なものだった。以前言っていたことをそのまま、しかし悲壮な覚悟をもって声にしただけなのだ。余りに切実な意思は願いでもあって、まるで雫の意識を離れたかのように空気を揺らした。

雫も怖かったんだ。一人でいること、誰も理解してくれないこと、何より自分が誰かを傷つけることが。

「でも仕方ないじゃないですか。わたしだって好きで不幸を呼んでるわけじゃないし、皆を避けてるわけじゃないんです。わたし何も

悪いことしてないのに、皆がわたしを悪者にするんですよ。想像できますか？ 皆がわたしを見る目が、どんなものか」

確かに空恐ろしいものだった。クラスメイトが雫を見る時の目は、人を見るというよりは、むしろ猛毒のさそりでも恐れているかのようなものだ。

「想像できますか？ 一人で俯きながら、何もできずに周りで起こる不幸を見ることしかできないの」

雫の意志とは無関係に、厄災は訪れる。雫に近づけば確率が格段に上がるだけで、本来は少しの関係を持つだけでそれはやってくるものだ。

下唇を噛んだ雫の表情は、悔しいわけでも悲しいわけでもない、ただ純粹に恐怖を示していた。ナオやマキの顔が見れずに、雫は代わりに二人の注文したピザに視線を移し、テーブルの下に拳を隠した。

日の光がコップから照り返り、雫と俺の間で踊っている。じわりと浮かぶ汗が周囲の湿気と混じり、沈黙という空気を身体に貼り付けた。べたべたと、鬱陶しい。

「……八千代さん、泣かないで」

嗚咽すら忘れた雫の目の前に、隣に座るナオから差し出された手。可愛いピンクの水玉模様のハンカチが、落ちた涙を吸い込んだ。

ナオは大人しい人柄から、誰かについていることが多い。大抵の場合それはマキだから、今日だって雫に会った時は驚いただろう。或いは近づくチャンスを得て「頑張ろう」とか思ってくれたのかも知れないけど、マキがいる限りそれはないと思ってた。

ナオも、強かった。マキとも、そして雫とも違う強さだけど、しっかりと芯——自分とも言えるものを持つてるんだ。

「ひっ、う……わたし、疫病神で……」

否定はしないでおいた。マキやナオにそれを聞かせる為でもあったし、或いは俺も心から否定することができなかった。

嗚咽を零しながらハンカチを受け取った雫は、そのまま鼻をかん

だ。意外な行動と派手な音で、さすがに俺もマキも、そしてナオも引き攣った笑いが隠せなかったけど、雫の涙が止まるならそれもいいと思えた。びろーんと伸びた鼻水を見て、雫は耳まで真っ赤だ。

「ひう……ごめんなさい……洗って返します」

「いいよ、ほら、返して」

「でも」

「いいの。八千代さん、これ洗うの大変なんだよ」

「……そうなんですか？」

ナオの説明はよくわからなかったけど、どうやら雫は納得したらしい。専用の洗剤が必要とかで、雫の家にはそれがない。

涙はまだ少し頬に残って、消沈する雫の顔は酷いものだ。でも、雫らしい顔だと思う。

「あの……わたし、ごめんなさい」

「何が？ 八千代さん、悪いことしてないじゃない」

「ほんととは、泣いちゃ駄目なのに。怖いの、わたしじゃなくて皆なのに」

「馬鹿だなあ」

「マキ、さん？」

ようやく口を開いたマキは、今まで見た彼女の笑顔の中で、一番優しくかった。それは少し挑戦的なものだけど、ナオと同じようにちゃんと雫を見ていた。

「こんな泣き虫、怖いわけないじゃん」

「そうだよ。怯えて泣くような女の子、怖がる人いないよ」

笑う二人に、雫は一度だけ嗚咽した。次にまた、笑う為だ。

「そうですね。わたし泣き虫だから、怖くないですよ」

朝からそうだったけど、この日の湿度はとても高かった。だから涙も、少し汚い鼻水も、雫の顔からなかなか離れようとしなかった。ハンカチで拭っても、なかなか取れそうにない。

この日の湿度は九十パーセントを超えたそう。二日以上続いた真夏日が、警報を鳴らし続けていたはずなのに、俺達は一人たりと

も気付くことはできなかった。いや、気付ける方が異常だとは思っただけ。

集団食中毒。被害者は、町内にあるファミレスの客のうち、昼時のものだった。

4話

めざめて中の人

聖がここに来るようになってしばらく経つ。雫より付き合いの長い彼女は、比較的俺の人となりを掴んでいるらしかった。雫以上、父さん以上に俺のことをわかってくれる人はいないけど、聖はそれとは少し違う印象を持っているらしい。

頑として口を開くことはなかったけど、信じてもらえるならそれでいい。聖は何も言わずに笑っていてくれるし、だらしない顔で俺の作る朝飯を頬張ってくれる。

素敵な子。それはどういう意味なんだろう。

「環、環……スクランブルエッグちょうだい」

「あいよ。味付けは？」

「醤油でえ、少し砂糖を混ぜるの」

相当眠いのか、舌足らずだ。素敵な子の目の前でこんなだらけた表情見せて、幻滅するぞ。なんて思ったが、それもまた今更みたいな話だ。

しかし醤油砂糖でスクランブルエッグとは、また通好みな。今までに味覚においてのマイノリティは色々見てきたが、これもまた珍しい

い。まあ、このくらいは序の口だと思えるようなものも、数多く見てきたけどさ。

「おにぎりに砂糖とか、なんかの冗談としか思えん」

「何か言ったか？」

「なんでもないよ、父さん」

新聞を読みながら聖に構うことも忘れない、理想の中年。清潔感もある彼が、どうしてそんな味覚を持っているのだろう。ご飯を普通に食べる時は、何もつけないのに。

黙って料理をしていると、自然とリビングの二人の会話に耳が傾いた。聖は、眠いながらもいつになく真剣な様子だ。

「おじ様、環を……」

「どうしたんだい？」

「環を、私に預けてください」

「……環は譲れないなあ、さすがに。僕の大事な息子だ」

嬉しかった。苦勞をかけてるだろうに、そんな色を見せずに俺のことを大事だって言うてくれた。それ以上に、聖のあんまりな冗談に笑いを堪えるのに必死だったけど。

「いえいえ、そういうことじゃなくて」

「聖ちゃん、どうしたんだい？」

聖が一度だけ目を擦ったのは、陽射しが眩しいからだろうか。

「理由を教えろって言われても困るんですけど、週に二、三度でいいからウチに来るようにして欲しいんです」

「環、どうだい？」

「構わないけど」

「助かるよー。ほら、皆幸せになりたいもんね」

俺が聖の部屋に行くのと、どんな関係があるのだろう。俺がここにいると、皆は幸せになれないっていうのだろうか。……確かに俺は、父さんの足を引っ張ってばかりだけど、父さんを救えるのは俺だけだっていう自信もあるんだ。

少し、心が軋んだ。

それにちよつと気後れした。聖はアパートに一人暮らしだから、雫から見ると浮気にならないかな、なんて思うから。そんな俺の心情を察したみたいに、聖は意地悪く笑った。

「だいじょぶだって、雫ちゃんにはちゃんと説明するから」

「そう？　なら、いいけど」

「あーあ、妬いちゃうなあ。私も環みたいな子、欲しいなあ」

「探せば？　俺みたいなのくらい、どこにでもいるだろ」

「どうかな。いないと思うけど」

そう珍しい人格を有してるわけでもなし、特別なものなんて何ももってない。敢えて言うなら、少し男友達が少ない程度だ。

「環の自由だよ。聖ちゃん、すまないけど祝福してやってね」

「わかってますよ。好きっていつても、異性を意識してるわけじゃないですし」

「姉ちゃん？」

「そう、それ。いいわあ、いい響きだわあ。もっと呼んでくれたら、お姉さんサーブスしちゃう」

姉というには威厳とか諸々が足りないけど、確かに「頼れる女」というには十分だろう。

肩甲骨辺りまで伸ばした金色の髪が、さらりと揺れた。軽そうな髪だ。いつもはアップにしておいてよくわからないが、こうして解くと一層童顔が際立った。頼れる女というシーンに立ち会ったことは数えるほどというのもあり、見れば見るほど、

「妹、っぽいな」

「な、何てことを！　私はもう大学二年生、環よりも三つも上だよ！」

「童顔、だし」

「うわ、人が気にしてることズバツと言いやがった。おじ様、この子ひねてます！」

苦笑いしたくなるのは、父さんよりも俺の方だった。

「む……今日の晩御飯、きゅうりの酢漬けだけにするぞ」

「聖、もつと大人になれよ」

そもそも脅しになってないこと、気付いてないのだろうか。聖が作らなきゃ俺が作るし、俺達が忙しければ雫を頼る。雫だって俺の彼女なんだから、父さんのことも歓迎してくれるはずだ。何より、雫のことを紹介しておきたい。

俺に口論で勝つのが無理と察したのか、それとも単純な理由なのか、聖は口先を父さんに向けた。

「おじ様、きゅうりの酢漬け食べます？」

「僕もそれだけっていうのは遠慮したいなあ」

「違いますよう。ほら、実家の方からいっぱい送られたので。一人で片付けるには多いですし、何よりあの音が……一人で食べると侘しいですよ」

漬物を齧った時のあの小気味のいい音が侘しいというのには同意しにくい、聖も寂しいんだ。少し意外だけど、当然のことだろうとも思った。

俺には到底信じられそうにない。一人暮らしをしたいなんて願う若者は、どれだけ家族がありがたいものかわからないのだろうか。純粹に幸せを願ってくれるのも、いつも傍にいてくれるのも、それはいつだって家族だけなんだ。

雫にはもういない。だから、俺は幸せになって、彼女に家族を教えてあげなくちゃいけない。

「父さん、今度俺の彼女紹介するよ」

「なんだい、急に。雫とかいう子だったかな？」

「そう。家に一人だから、今度晩飯でもご馳走してやろうと思って「賛成」。私も一度は会っておきたいし。ね、おじ様？」

少し悩んだ後、父さんは緩やかに笑ってくれた。父さんが俺の恋を祝福してくれない、わけがない。

「でも環の初めての恋人か……少し、複雑だな」

少しだけ渋い顔は、きつと親離れしていく俺を思ってたものだろう。俺にはその気持ちは理解できないんだろうけど、少なくとも一

言葉をかけるくらいはできる。そもそもそれ以前に、俺の方が親離れできそうにないんだ。

「父さん、子離れなんてしないでくれよ？」

「そんなこと、僕にはできそうにないよ」

「はいはい。私も加えてー」

笑顔で主張する聖を加えて、食事は和やかに進んだ。家族のあるべき形、本来見えるべくもない空気。母さんの影が見え隠れするその中で、少しだけ涙が零れた。聖も父さんも、そんな俺に気付かなかったように話を繋げてくれるのだ。

雫も加えたら、もつと温かくなるだろう。涙の染みこんだ頬を、軽く緩ませてみた。

マキとナオが欠席し始めてから、既に三日が経とうとしていた。

噂——あの日ファミレスと一緒に食事をしていたことはクラス中に広まっていて、雫の周りからは一層人気がなくなった。「またあいつか」、そんな言葉が聞こえたようだった。

雫と話すのは俺だけ。以前は一人の例外を除いて誰もいなかったらしいから、或いは改善されたといってもいいんだけど、それは余りに憐れだった。しかし意外なのが、そのたった一人の例外だ。

「雫さん、また沈んでらっしゃるのね」

「あ……四条、さん」

四条美鈴。俺の印象では、俺や雫の一番の敵だった女だ。いや、その印象自体に間違いはないが、気に入らないからこそ、だろうか。受け付けないからこそ気にかけて、それを正そうとする。

「いつものように黙ってくださればいいのに、そうやって暗い空気を作られると迷惑ですわ」

口は減らないけど、雫の悲しみは少しだけ隠れた。

「環さんがいれば或いは、なんて思っていましたか……不甲斐ないのね」

「努力はしてる。それになあ？」

「う、うん。環くんいてくれて、わたし嬉しい」

「だってよ？ まあ雫の気持ちがわかるとは言わないけど、聞いてやるくらいはな」

四条さんは、少しだけ笑ったみたいだった。それがどんな意味を持っていたのかはわからないけど、侮蔑や憐憫のような類のもではなかったと思う。

「食中毒、でしたわね。あなたが沈む必要、あつて？」

「でも、せっかく楽しくお話してたのに、わたしのせいで」

違う、という言葉は声にならなかった。俺も、このクラスの大多数と同じなんだ、そう思ったら自分に嫌気が差した。俺だって雫のことは信じてるし、雫のせいで一連の事件が起きてるなんて思ったことはない。でも、全ての事件が雫の周りで起きていることに嘘や偽りはないのだ。或いはそれは、信頼なんて高尚なものではないのかも知れないけど。

嫉妬した。だって誰よりも雫の潔白を確信してたのは、俺じゃなかったんだから。それを事も無げにやってのけた彼女を、激しく嫉んだ。

「ため息を禁じえませんか……あなたがウイルスを仕込んだ、とでも言いたいのか？」

「ち、違いますよう……でも」

「でも何もないでしょう。それが事実の全てです」

そう、それだけが事実なのだ。真実は多々あれど、確定された「事実」はこの一点に尽きる。それだけを信じていられる四条さんは、やはりすごいのだろう。

「とにかく、教室の空気くらい読んでくださいな。皆さん、楽しく話してるの」

「ご、ごめんなさい……」

「まったく、世話の焼ける」

言うべきことが済んだのか、四条さんはたくさんのクラスメイトが待つ自分の席へと帰っていく。その背中に雫は、「ありがとう」

と呟いた。

「誰があなたの為だなんて言いまして！？ 勘違いしないでくださいな！」

地獄耳め。それは世間一般で言う「ツン」ではなく、本当に素直な気持ちだというんだから性質が悪い。心底不愉快そうな視線を、俺と雫に浴びせ掛けてきた。

でもまあ、正直なところ、俺達の空気は和んでいた。俺達の間距離というのは、悲しみに暮れていても誰かが浄化すべき空気だったんだろ。不幸を呼ぶのだとしたら、俺達は余計に暗く沈んでるわけにはいかない。

「雫、よかったなあ」

「うん。四条さんだけ、わたしのこと怖くないって」

微かに笑んだ雫は、その茶色い視線を俺に向けた。少しだけ責めてるような気がしたのは、きっと俺の中に負い目があるからなんだろう。「本当はわたしのこと怖いんでしょ？」なんて、雫に問われた気がしたから。

「環くん、そっちに行っていていい？」

「え、ここで？」

「ここで。できないかな？」

冗談でもないらしい、真摯な眼差し。机を一つ挟んで、雫は微笑む。

また問われてる、「わたしが怖くないならできるでしょ？」って。ここで雫を拒んだら、雫以上に俺が立ち直れなくなってしまうそうだ。首肯すると、雫は嬉しそうに立ち上がって、廊下側に身体を向けて座る俺の膝に乗り、首だけで俺を振り向いた。明るいブラウンが、きらりと光る。

「お腹、抱いて」

「どうした？ 随分甘えるなあ」

「どうしてかな？ 今日暑いのにな」

食中毒は、続いた真夏日と当日の湿気が原因だ。この町のことは

知らないが、一般的に警報が出されるには、前二日が真夏日であることと、八十パーセント以上の湿度が必要になってくる。

「環くんの腕、たくましくて気持ちいいなあ」

「そうか？ 俺の腕、細い方だと思うけど」

「細いけど、締まってるよ。そうだね、たくましいっていうより、頼りがいがあるかな」

そう笑ってくれたから、クラスメイトからの視線も気にならなくなった。こうやって二人だけの世界に入り込んでしまうことを、バカップル、なんていうんだろうか。腕に当たる雫の腹が柔らかくて、細い腰は今にも折れてしまいそうなほどだ。

「雫、頼らない」

「お肉がないから……ごめんね、おっぱい小さくて」

「うん……別にそんなこと気にしてないけど」

というかこれで小さかったら、四条さんが不憫で仕方ないじゃないか。

「環くんの腕で持ち上がってるよ」

「うん、持ち上げてる。抵抗しないね」

「ちょっと、気持ちいい。大きくないから、邪魔じゃないんだけど」
「はあ、いいなあ、これ」

女性の象徴であると同時に、母性の象徴でもある。劣情とかそういうの抜きにして、制服の上からでも、触っていると落ち着くんだけだ。腹に添えた腕で軽く持ち上げてるだけだし、周りからも触ってるようにには見えないだろう、多分。

前を向いた雫の耳は真っ赤で、それでも微笑んでるのがわかって、彼女は本当にいい子だってわかる。照れながら俺の為に我慢してくれてるけど、それをやめる気は起こらなかった。

飢えてる。今まで彼女がいた試しがないから気付かなかったけど、俺は自分が思ってる以上に「女性」や「母性」に飢えていた。聖との食事や、今この状況に「色情」より「安堵」を感じてるのが何よりの証拠だ。

雫は、ちゃんと幸せをくれてる。マキやナオには悪いけど、少なくとも俺は食中毒になんかなくてないし、雫の優しさをこうやって感じてる。

「雫？」

「どうしたの？ 環くん、声が震えてる」

「家族って、いいなあ」

この時、本当にそう思った。もちろん雫に家族がいないことも覚えてる。

「——そうだね。家族は、いいよね」

「今日、うちに来てくれないかな？ 今日からずっと、かな」

震える声は、多分不安。家族に拒まれる不安、恐怖、俺も雫も痛いほどよく知ってるから、一緒にいることすら怖くなってしまっただ。

しばらく考えた雫は、もう一度瞳だけで俺を見た。笑ってた。

美術部にはしっかりと顔を出してる。ここは雫やクラスのことから離れている、ある種学校とは別の空間だ。雫と一緒にいる時とは違う安堵感、多分これは気安さだろう。

——そう呼ぶよう言われた、早紀が俺の指導に当たり、出来上がりを皆で批評してくれた。遠慮や言葉を選ぶことをしないけど、部活という場においてそんなのは必要のないことだ。或いは皆の意識が「本気」に向いてきた証拠ともいえた。

既に自主制作が始まり、各自作品に取り組んでいる。早紀は油彩でこの町を描いているようだった。俺はというと――

「まだ決まらない？」

「まあ、うん。早紀はどうやって決めたの？」

「私は、ギャラリーに出すならこの町の景色って決めてたから」

「思い入れでも？」

「そっいうんじゃないけど、この町が好きだからかな」

俺は、自分の住むか否かに関わらず、町に対して「好き嫌い」な

ど抱いたことはないし、まして思い入れなど皆無だった。この町に来てからたった一週間と少し、しかしここでは色々ありすぎた。

「人物画ってさ、難しいの？」

「どうだろう。どれでもそうなんだけど、人物画は特にデッサンがしっかりしてれば、って類の絵だからね」

「あー……でもまあ、描きたいっていうとこれくらいだし」

だから描くものは決まって、既に頭の中には完成した絵画が描かれていた。描きたいもの、と思って無意識に浮かんだものが、この人だった。

「決めた？」

「うん。多分理解されるような絵じゃないと思うけど」

「それはいいよ。描きたいもの描けば、私達がフォローするから」

「それは暗に俺が下手だと言ってるな？」

うっ、なんて呻いた早紀は、正直に謝ってしまった。まだ絵に慣れるほどの期間ここにいるわけじゃないし、上手く描けないで当たり前。「上手く描く」というより「上手く描けるようになる」くらいの気持ちでいればいい、と早紀に聞いた。

早紀を含むこの部員だって、元々絵が上手い人ばかりじゃなかった。努力や才能、色々なものを積み重ねて――

「皆、上手いよな」

「そうだね。楽しくやってきたけど、作品数は相当やってきたから」

――ここまでできた。だから、俺だけ劣ってるなんて思ってる場合じゃない。

それに俺には、早紀がいた。

「じゃ、色々教えてね」

「任せて。でも基本的なことしか教えられないから、本当にわからないことがあったら先生に訊いてね」

「わかった。でも、早紀って頼りになるよな」

今まで何十回と質問してきたけど、答えに躓いたことがなかったと思う。経験から入った俺とは違い、相応の知識も持っていてここに

る、本当に「本気」の美術部員だ。

照れたように笑い、早紀は「まあね」と冗談交じりに呟いた。自主制作に入り自由になった部員達はそんな俺達の会話に興味を示し、周りに寄ってくるのだった。

「残念だねえ早紀、好きな人に恋人がいて」

「ち、違うよつ。私はただ……」

「ああやだやだ、熱いわあ。ほら早紀、こんなに熱くなってる」

なんか卑猥なセリフに聞こえるけど、頬に手を添えただけ。しかし卑猥に聞こえたからこそ、俺の頬まで熱くなっているのだ。大分慣れてきたとはいえまだ少し怖い、女子だけの部活っていうのは普段からこういうノリなんだろうか。

早紀の首に後ろから纏わりついた女の子が、横目で俺を見た。

「どこまで本気？」

「さあ。早紀次第じゃないかな？」

「うわー、この子女慣れしてる。早紀、こういう男はやめときな」

「だから違うって！」

顔を紅潮させて必死に弁解する早紀が可愛いのは認めるが、自覚のない早紀はそれが原因でからかわれてるっていうことに気付かないんだろう。自分の容姿に自覚や頓着がないというところだけ、雫と似たタイプだと思う。それが理由か、早紀を見てるのか雫を見てるのかわからなくなつて、それが妙に微笑ましくて、思わず頬が緩んだ。

「おー、なんか達観した笑みを浮かべてらっしゃる。早紀、何か悟つたみたいだよ」

「う、うん。環君、すごい優しい顔してる」

「本気で惚れた？」

「やだもつ、違うって言ってるのに……環君？」

呼ばれて気付く、早紀の視線。少し潤んだそれは雫とは違う熱を帯びてて、慌てて首を振った。それでも「環君」なんて呼ばれると、否が応にも重なるんだ。

「……早紀、可愛い」

その呟きは、俺の耳の奥で鳴るよりずっと大きく、美術室に響いたらしい。部室が、黄色い音に染まった。

「やだあー、真顔で何言っちゃってんのこの人ー!」

「早紀真つ赤! 私今、浮気の現場を見ちゃってまーす!」

先生がまだ来てないのが災いして、騒ぎは収まりそうもなかった。諦めてため息をつくとき、さっきよりずっと顔を赤くした早紀が、さっきよりずっと潤んだ目で俺を見ていた。目が合うと騒ぎが大きくなり、照れて俯く早紀をフォローする俺に部員がまた騒ぐ、早紀にとって最悪の循環だ。

揶揄はもちろん俺にも及んだ。かいた恥が大きすぎて、今更照れなんてありやしない。開き直って早紀を盛大に持ち上げ、そしてその悪循環を余計に悪化させるのだった。

早紀は言つ。

「環君なら、私を預けてもいいんだろっね」

夕暮れの通学路を一人で歩く。ケアが必要だと思われた雫は一人で帰ると聞かず、仕方なく折れて一人になった。雫を一人にしたくないという以前に、俺が一人になりたくないというのもあつたけど、それも仕方ない。

それに今日は用事がある。後ろ暗いわけでもないけど、さすがに一人暮らしの女性の家に上がることを、恋人に説明するのは面倒だ。そうするなら、当人である女性、聖に直接説明してもらった方が遥かに効率的だった。聖もそうしたいと言ってたし、雫も俺の言葉だけじゃ信じてくれないかも知れない。

厄介なものだ。どれだけ信頼できる恋人でも、浮気の弁明というのはとても難しい。

沈み行く太陽に焼かれて道路に焦げた身体も、大分長くなっていった。暗くなるにはあと数十分もあれば十分だろう、俺は足を速める。見慣れるというには短い期間だけど、もう新鮮さは感じない。我

が家の隣にあるアパートは、二階建ての小さなものだ。上る階段のふもと、木でできた看板には「御門荘」と、くすんだ文字が浮かんでいる。横目で見た「高橋」の文字を記憶に留めて、目の前のドアをノックした。木製らしい、軽やかな音だ。

「はい。……どなたー？」

「環だけど。開けてくれないかな」

「ああ、はいはい」

軽い金属音の後にゆっくりと開いたドアは、想像以上に薄いものだった。成程、防犯に気を遣うようになるわけだ。

「ごめんね。一応私も女の子だから」

「うん。……女の子、だよな」

「どういう意味よ？」

「いやまあ、うん。女の子だよな」

深い意味はないけど、聖はその浅い意味をすっかり理解したようだ。睨む顔に、しかし迫力などない。

「で、用って？」

「まあまあ、まずはお夕飯にしようじゃないの。話はそれから」

「いいけどさ、あんまり引き止めないでよ？」

頷いた聖はキッチンに留まると、その奥にある八畳ほどの空間を指差した。どうやらワンルームのようだ。それに従って部屋に入り、テーブルの前に腰を下ろしてその上の辞書らしき本を手に取った。

手持ち無沙汰になるからといって、これを手に取ったのは失敗だっただろうか。恐らく俺の周りにはわかる人はいないであろう、神学書だ。案の定、開いてみても見知らぬ単語ばかりで、その内容の半分も理解できそうにない。

「うーむ……なんとなく、わかるようなものも」

「日本書紀とか古事記を基にした近代神学書だよ。妖怪とか神様とか、色々載ってる」

「んなこと言われてもなあ」

首を傾げながら目で追う目次には、神様らしき名前が多く載って

いた。

「あ、何か知ってるかも。いじゃ、なみ？」

「それ有名じゃない。伊邪那美、イザナミだよ」

「ああ、なんか聞いたことある」

「黄泉国に住む、イザナギの配偶女神。火の神を産んで、火傷して死んだことで黄泉に行ったって話」

要するに、閻魔様みたいなもんか？ よくはわからないけど、「黄泉」というからには死や死後を司ってるんじゃないだろうか。

推測だけでモノを言うのがどれだけ意味のないことかわかってはいるが、わからないことだらけだとそうならざるを得ない。そも、神学を専攻してる聖が持つ専門書を見て、素人である俺が理解できるはずもない。神格化なんて馴染みのない言葉を言われて、いまいちピンとこないのが何よりの証拠だ。

「面白いよー、日本神話。これがまた、神様って癖に意外にドロドロしてるのね」

「なんだっけ……確か、ギリシア神話とかすごいって聞いたよ」

「そうそう。近親相姦のオンパレード、現実にあつたら引くね」

作り出した人間に作り出されたのが、神様だ。ある種のパラドックスを抱えた存在だから、何かしら超越したものも持っているのだろう。なんて、こんな考え方がまず素人なんだろうけど。

「でもさ、神学っていったら普通キリスト教じゃない？ 日本神話なら、仏学とか」

「ま、変わった大学であることは承知してます。ここはね、世界中の神様のことが学べるんだよ」

広域を学ぶのは、大学の本分じゃないだろう。なんてのは、多分勝手な意見。

学びたいものを学ぶのが、大学だ。だから、好きでここにいる聖はきつと、大学生として在るべき姿なのだ。

「環、ドレッシングは和風と洋風どっちがいい？」

「聖と同じでいい。何、サラダ？」

笑いながら頷いた聖を見てから、神学書をテーブルに戻した。傍らのノートは、俺の知らない語句で一杯だ。

「今日は鯛のムニエルなんだ。環が初めてウチに来た記念に、奮発してみたよ」

「へー、美味そう。聖って小さい割に色々できるよな」

「可愛くないぞー。年下は年下らしく振舞えよー」

見た目はどう繕っても聖が下だろうに、いやだからこそ可愛いのか。サイハイソックスとショートパンツの間に輝く生脚が非常に健康的だが――扇情的でないのが、聖らしい。

「私ももう少し身長があればなー」

「いくつ？」

「五十。嫌になるほど小さいもん、くっそう」

思っていたより大きいじゃないか。やはり顔が原因で実際より小さく見えていたらしく、主観というのは恐ろしいものだと思った。

「しかしロリ顔高身長、つてのもいいね」

「ロリ顔言っな、むかつく。お子様は大人しく漫画でも読んでろってんだ」

フライパン片手に吐き捨てると、聖はフライ返しを躍らせた。

ため息と苦笑を同時に漏らして、聖の言う通りに本棚を漁った。

女の子の本棚を見るのはこれで二度目だが、その子の秘密を暴いているようで、気分は決してよくはない。聖の癖に、妙に大人びた漫画ばかり買いやがって。漫画に大人びたも何も、ないんだろっけどさ。

少女漫画ばかりで手を出す気になれなかった、という結論に達するのに五分という時間は長過ぎたようだ。テーブルの上には、次第に料理が並び始めていた。

「どうよ、私の選球眼」

「少なくとも俺が読めるような漫画は一冊もなかった」

「私、女の子だからね」

「ああ、ほんと、女の子だよな。……心から」

「せめて身体だけにしてくれないかな？ 私も一応傷付くよ？」

からかいが過ぎたようだ、聖は膨れっ面で俺を睨む。

そんな聖と、俺の目の前に並んだ料理は、鯛のムニエル、コールスローサラダ、ハッシュドポテト、トマトスープにご飯。この歳でここまでできれば見事なものだ。

「ありがと。美味しそう」

「でしょでしょ？ いやー、料理食べさせる男の子っていないからさ、環は貴重だわあ」

照れたように笑う聖の料理は、初めて食べてからしばらくが経つ。いつも苦勞をかけるな、という感謝と同時に、これからも作り続けて欲しいという希望もあった。父子家庭という環境にあって、聖は――母性というものこそないにしろ、本当に母のような存在に近かった。

これだけ手の込んだ料理を、笑いながら作ってくれる。ありがたかった。

「いただきます」

「召し上がれ。こういう時は可愛いんだから」

そんな母性を滲ませる笑顔を見せてくれたから少しだけ照れ臭くて、トマトスープを啜った。俺の顔も、こんなに赤くなってるんだろつか。笑い声が真正面から響いてきた。

「美味しい？」

「美味しい。聖、今日はなんか気合入ってるね」

「言っただしょ、奮発したって」

オリーブオイルとバターの香りが高いムニエルは、身も柔らかくて食べやすい。

「もしかして普段手え抜いてる？」

「別にそんなことないけど。今日は張り切っちゃったからね」

「恋人でもない男の為に、よく頑張るよね」

「いいじゃない、美味しいんだから。今日の夕飯は我ながら最高の出来だわ」

自己陶醉も甚だしい得意げな笑顔を浮かべて、聖はサラダを頬張った。感情表現豊かな聖のその表情は、憎たらしいというよりは、ずっと可愛らしかった。

たった二人でも賑やかな食卓になる。「聖」というツールを加えるだけで、信じられないくらい場が和むから、それはある種の才能なんだろう。場を仲介する力は、コミュニティの中であって何より重視される能力だ。

「聖、実際男にもてるだろ？」

「どうか。だとしたら、妬いてくれる？」

「妬かないよ。俺、恋人いるし」

「だよねえ。じゃ、もてない。恋人絶賛募集中」

「じゃ、ってなんだよ。俺と聖の恋人は関係ないだろ？」

ふんつ、と鼻息を荒くした聖は、少しだけ不機嫌そうだ。俺のことを好きってわけでもあるまいに、女の子の感情というのは掴みづらい。

「でも友達が多いのよ。友達止まりが理想なのかなあ？ 私、魅力ない？」

「聖は可愛いと思うよ。ただまあ——」

「なに？ なに？」

「気安すぎるかな、と」

がくつと項垂れた聖には、やはり心当たりがあるらしい。何より、出会って間もない男をこうして部屋に招いてるのが何よりの証拠だ。それが魅力でもあるだけに、女の子としてはかなり「惜しい」んじゃないだろうか。

恋人、というよりは妹、という方が相応しい。年下の俺からじゃ予想の域を出ないけど、恐らく聖の同級生から見たらそういう感想が浮かんでくるだろうと思う。

「理想の彼女を演じる自信はあるんだよ？」

「俺は、変に気取るより普段の聖が好きだけだなあ」

「あらまあ、そういうセリフを素面で吐いちゃうなんて……この女

殺しっ」

どうしてこう、俺が吐くセリフは女の子にからかわれるんだろう。早紀に言う時もそうだけど、思ったことをそのまま口にするのがよくないのだろうか。

笑顔でムニエルをむしった聖は、その箸で皿を鳴らした。

「ちゃんと女の子褒めてるみたいだね。喜んでくれたんじゃない？」

「喜んだ、っつーかものすごい照れてたけど。顔真っ赤にしてさ」

「初々しいわねー。可愛い子だね、いい子だね」

「まあ、いい子であることに異論はないけどね」

多少肩に力が入ってる、なんて思うこともなくはない。もう少し力を抜いた方がいいんじゃないか、俺に絵を教える時や自主制作に打ち込む姿を見てみると、そう思う。何かを覆そうという意思が、見え隠れしてるんだろう。

「私も可愛い子欲しいなあ。私、環のお姉ちゃんみたいだし、雫ちゃん、妹にならないかな」

「あれ、知ってるの？」

「彼女、有名人だからね。この町の人の半数は知ってると思うよ」
数秒考えて、すぐにピンと来た。

「悪い意味で、だよな？」

「あ、環も知ってるんだ。そりゃ、あれじゃいい噂は流れないよね」
当然だった。町の事件を知るのは学生だけでなく、町の住民である可能性が高いに決まっている。その全ての事件に雫が関わっていたのなら、雫を知る人間がどれだけでも不思議はないのだ。

しかし聖は、雫を怖がっているわけでも嫌っているわけでもないらしい。それだけは安心した。

「私も見たことあるもん、ちょっと偶然ね。可愛いよね、雫ちゃん」

「ああ、うん。あの茶色の目がすげえ綺麗でさ」

「へー。よく見たことないから知らないけど、髪、茶色かったよね、色薄いのかな？」

「多分ね。聖の金髪も結構綺麗だけど、どうなの？」

バレッタを外して流れている髪の毛を指でくると弄った聖は、どうやら毛先を気にしているらしい。確かによく見れば、傷んでいる様子も見受けられた。

「なんとなく懂れて染めてるけど、黒髪のままの方がよかったって思うこともあるなあ」

「聖、金髪が大人っぽい、なんてことないからな？」

「わかってるわよー。でもさでもさ、私黒髪だとすごく子供っぽくてさ」

色が黒くても、髪型を変えて見せればどうにでも見えるだろうに。例えば外行きの髪型——アップにしてバレッタで留めれば、顔の割には大人っぽく見える。

形から入る、を否定するつもりはない。それは個性と呼べるものではないが、だからこそ普遍的に価値観を統一させることもできる要するに、子供を大人らしく見せることだって、服装や髪型如何で可能になるということだ。もちろん、生まれ持ったタレントによるところが大きいのは、言うまでもないんだけど。

髪を手放した聖が、ほぐした鯛を口に放り込む。少し膨れた頬が可愛らしい。

「美味しいご飯食べれば、特に気になることもないけどね」

「単純だなあ。気にすることないのに、金髪似合ってるし」

「そ、そうかな？」

照れてる聖は可愛いし、ロリ顔金髪っていうのも中なかなか乙なものだ。なんて、聖に言ったら怒られるんだろうけど。

「ま、何事もその人に合ったものが一番よね」

「そうそう。サイハイソックスとショートパンツの間が非常に健康的だよ」

「えっちねえ。ま、美肌には自信があるけどね。ほれほれ」

テーブルの横に脚を伸ばして、俺に見せ付けてきた。どうにも、これはこれで扇情的という気もしてくるから厄介なものだ。雫のどこかアンバランスな魅力もそうだけど、女って不思議だなあ。聖が

大人に見える時、というのはそういう時だ。

「手、止まってるよ。せつかく作ったんだから、食べて食べて」

「ああ、うん。いただきます」

「召し上がれえ」

だらしなく笑った聖の脚が、テーブルの下に格納されたのを少し残念に思った自分を窘めた後、内心で雫に謝っておいた。雫以外の女に靡くことがあつてはいけない、なんてことはないんだろうけど、雫は意外に嫉妬深そうだ。

夕食はそんな感じで始終和やかに進み、食べ終わった聖と俺は並んで畳に寝転がっていた。この暑さの中、畳の冷たさが心地いい。

「あー、食べた。美味しかったね、環？」

「うん。聖の料理にも慣れてきたけど、多分一番美味しかった」

「だよねえ。おじ様に食べさせられなかったのが惜しいわ」

「聖、父さんのこと好きなの？」

「はえ？ …… ああうん、好きよ。かつこいいよね、性格もいいし、俺は父さん似らしく、よくそう言われる。ただ、性格の方が似ても似つかない為、好かれるのは大抵「穏やかな大人の男性」である父さんだ。

「でもねえ、環みたいな子が、私には合ってるみたいなのね」

「そうなのかな。聖って大人の男に惚れそうなイメージがあるんだけど」

「なんだ、恋とかそういう話？ だったら断然環よ。可愛いし」

でも流石に、「可愛い」と言われることは余りない。俺は照れ隠しに、話題を変えてみるのだった。

「で、用って何だったの？」

「焦らないでよう、もっと話してたいのに」

「だ、だって聖、いつまで経っても本題に入りそうにないし」

「仕方ないな……」

気だるそうに立ち上がった聖が俺に向かって差し出した手を取って、俺は勢いよく立ち上がった。小さな手が可愛くて、本当ならい

つまでだつて触っていたかったけど、それは仕方ない。

「じゃ、環。あそこに立って」部屋の隅を指差した聖は続ける。「踏ん張って」

「踏ん張る？ 何するの？」

「いいからいいから、聖を信じて」

楽しげに笑う聖を信じていいのかどうかは五分五分だけど、拒む理由もない。仕方なく指差された地点に立ち、畳に根を張った。踏ん張る意味がどこにあるかわからない分、少し怖いという気持ちもある。

「じゃ、いくよー」

まるで体操選手がそうするように手を挙げた聖は、息を一つ吐いて落ち着き、そして何故か走り出す。俺から数メートル、気付いた頃にはもうすぐ目の前にいた。

「とうっ！」

跳んだっ！？

と思つたら、次の瞬間には聖の両足が俺の胸辺りに炸裂していた。俺を蹴り飛ばした反動で高々と宙を舞った聖は、ものの見事に着地を決める。

「ど、ドロップキック……？」

踏ん張つてたのと、聖が軽いので、どうにか立つたまま堪えた俺だったが、それ故に痛みは大きなものだった。呼吸がままならなほどの痛みに、出した言葉が上手く震えなかった。

高笑いをする聖が信じられず、呆然と見ていた。いきなり何をする、とか、そもそもなんでドロップキック、とか、色々思うところはあるけど。

「聖、てめえ、なかなかいい運動神経してるじゃないか……」

求めたい理由は多々あれど、出てきた言葉はそれ一つ。我ながら甚大な混乱だ。

「いやーあつはは。これもなかなか気持ちいいねー。私、スっ気あるのかも」

くふふ、なんて怪しい笑いを浮かべた聖は気が済んだのか、笑顔を引つ込めた後に氣遣わしげに俺を見た。今更、とか思わないんだろうか。

怒ってはいないけど、わけがわからない。何より俺が怒られる理由はなかったし、それがなければ蹴られる理由もありはしない。何かしら理由があるとは信じたいが、聖の申し訳なさそうな顔を見ると問いただす気にはなれなかった。

近隣住民への迷惑は、きつと畳が吸い取ってくれたはずだ。

「ごめんねえ、環。仕方ないんだよ」

「いや……色々訊きたいことはあるけど、一つだけ」

「うん、なあに？」

「これが聖の用なの？」

勢いよく頷いた聖が、やはり信じられなかった。

「ちゃんと説明してくれるの？」

「後でね。しばらく通ってくれたら、わかると思うよ」

しばらくの間こんな目に遭えと、そんな酷な。もちろんそんな被虐嗜好のない俺は、聖に拒否の旨を伝えた。そんな進言が棄却されることもわかっていて、だ。案の定聖は、「通ってくれなきゃ、ご飯作ってあげない」なんて、子供染みた脅迫を使うのだった。脅しにはならないと思ってたけど、改めて言われると、これが意外に堪えた。

仕方ない、わかった。返事をする、聖は嬉しそうに笑い、もう一度だけ謝るのだった。

もちろん俺が黙ってこんな仕打ちを受けるいわれはない。次回は是非とも盛大に抵抗してやろう、なんて腹積もりを、聖に悟られないように浮かべるのだ。

「用は済んだから、遊ば？」

「聖、意外と大物だな」

「まっかせて！ さ、何して遊ばーかなー」

タンスを漁る聖の後ろで、ため息一つ。

栗のことで気分が重くなってたから、ちよつどいいのかも知れない。聖といると、心が休まっているのを肌で感じる。テーブルの横に座り、聖の背中に一言。もちろん、彼女に聞こえないように。「恋人いないの、わかる気がする」

5話

めざめて中の人

こうして聖の部屋に通うことが習慣化し、――週に三日ではあるが、当たり前になってきた。そして毎度、蹴る蹴られないの攻防が繰り広げられる。勝率は、初回を除けば百パーセント、所詮聖は口りっ娘だ。

理由はわからないものの、それがあるのなら仕方ない。蹴ることに意味があるというなら受けるのが筋なんだろうけど、それじゃあ俺の気が済むはずもない。二週目にして早くも手段を選ばなくなってきた聖の足をかわすのに多少の苦労はあるが、元々運動神経は悪い方じゃないし、悔しそうな聖を見ると、理由もなくいい気分になった。

しかし、聖の部屋に通うのにも問題が出始めてきた。学校にも部活にも慣れ、もうすぐ六月も下旬に入ろうとしていた頃だ。

「先生、本当ですか？」

「ええ、本当よ。金城さん、頑張ってくれるわね？」

「は、はい！ もちろんです！」

喜色を越えて半ば呆然とした早紀が、憤ったように立ち上がった。少し力の入り過ぎか、なんて思ったが、先生からの報告を考えれば

それも当たり前だ。

逢坂高校美術部単独で、ギャラリーに出展できる。早紀が誰よりも熱望していたことが、遂に現実になった。今までの実績がないだけに、先生のしたことはある種奇跡的とも言える快挙だ。先生に向けて何度も頭を下げる早紀を、部員全てが微笑ましく見守っていた。早紀の隣に座る俺は、彼女の制服を引いて座らせると、小さく笑いかけた。

「落ち着きなつて。よかつたじゃん」

「うん、うん！ まだ信じられないもん……やった、すごいよ。手が震えてる」

早紀の腕は素人目に見ても結構なものだし、よほど機会に恵まれなかったんだろう。瞳を潤ませる彼女は、今までで一番美しいと思った。

「皆さん、展示は来月です。各自制作に打ち込み、作品を揃えるように」

声を揃えて返事をする部員が今、一つになったと実感した。続く先生のセリフに対する覚悟も、同時に固める。

「全部員が一つずつ……十六作以上揃えられない場合は、中止ですからね」

先生は、それだけ言って教室の隅に移動してしまった。皮切りに制作に取り掛かるもの、雑談に興じるもの、様々だ。

そんな中、早紀の周りには三人ほどの部員が集まっていた。いずれも、早紀が「本気」だと知っていた連中だ。興奮冷めやらぬ早紀を宥めるもの、更に激励するもの、三者三様だが、いずれも早紀の涙を祝福していた。

「早紀、頑張ろうね」

「うん。皆も、絶対いい作品作る」

「忙しくなりそうだねえ。それに――」

一人の女の子の視線が、俺に向いた。たじろいってしまったのは、心当たりがあるからだ。

「ド素人もいるしねえ」

「うつ……お、俺だつて頑張ればそれなりに見られるものが」
「できそう？ そりゃよかつたなあ」

皮肉に歪んだ笑顔が屈辱的だが、何も反論できないのが悲しいところだ。事実、俺の腕というのは、ようやくデッサンが人並み程度——或いは少しくらいは上手にできるようになったくらいなのだ。展示に堪えられるだけの作品ができるか、心配だった。

それでもやらないわけにはいかない。

「やってやるつて。俺一人妥協するわけにいかんでしょ」

「まあ、最初よりは大分マシだしね。早紀が付いてれば……」

早紀を見てみると、少し心を手放しているようだった。

「……なんとかなりそう？」

「……どうだろう」

情けない話ではあるが、早紀がすっかりしてくれなくちゃ、そう上手くやる自信はない。そろそろ彼女も自主制作の方に専念したいのもわかるけど、新入部員の世話も忘れないで欲しいところだ。

「早紀、伊藤君困ってるよ」

「へ……あつ、ごめんなさい。うん、ちゃんと教えてあげるよ」

「よろしく願います」

頭を下げると、笑いながら応じてくれた。彼女がいれば百人力、何とかなる気がするから不思議なものだ。

笑顔で俺達を見守る先輩から、声がかかる。

「じゃあ、二人でジェッソとワニス買ってきてね」

脱力した俺達は、もちろんの笑顔でそれを承諾するのだった。

一週間ほど前から少しずつ、父さんの帰りが遅くなってきた。以前は遅くても八時には帰ってきて一緒に夕食を摂っていたのに、最近は聖と二人だけの席になっている。もちろん寂しいし心配だったけど、そんな弱音を父さんに見せるわけにはいかなかった。

聖の部屋で摂る夕食は、明るかった。しかし、いつもの温かさが

なく、それが何よりも辛い。俺が誰よりも切望してるのが父さんだ
って、心から思い知らされた。

そんな俺はきつと、「ファザコン」なんだろうけど、聖の目はい
つも優しかった。

雫の家には、聖の部屋に通わない日、部活の後——もちろんいつ
も通りに居残りをしている雫と共に必ず行くことにしている。父さ
んのこともあったが、雫のことを放っておけるわけもなかった。

今日は偶然父さんの帰りが早く、俺はここぞとばかりに雫を家に
招いた。嬉しそうに、しかし緊張を全面に押し出した雫が可愛く、
そして温かく、愛しかった。まだあの事件について立ち直ったわけ
じゃないし、解決したわけでもないけど、だからこそ楽しい気分にな
って欲しいじゃないか。

玄関を押し開けると、雫の緊張はピークに達したらしい。

「た、たた環くん、どうしよう、どうしよう、手が震えるよう」

「そんな、結婚の挨拶に来たわけじゃないんだし。いい人だよ、父
さんは」

「でも、でも……わたし、どこか変じゃない？」

「挙動不審なところ以外は大丈夫だぞ」

へう、なんて意味のない呻き声を上げて、雫は遂に黙ってしまっ
た。恋人の親に会うっていうのは、そんなに緊張するのだろうか。
俺にはもうできないことだから、よくわからない。

「ただいまー！」

「おかえりー。ご飯もうすぐだから、リビングにいてねー」

俺の声に返ってきたのは、女の声。言うまでもなく聖のものだ。
緊張よりそれが気になったのか、雫は俺の袖を引っ張った。

「た、環くん、一人っ子じゃなかった？」

「ああ、説明してなかったっけ。晩飯はあいつに作りに来てもらっ
てるんだ」

「ふーん……」

含みのある呟きに少しドキツとしたけど、別に後ろ暗いことがあ

るわけじゃない。遂に説明する時が来た、というだけだ。いつだったか、雫が聖の顔を見た時の印象は、そういうものじゃなかったと思うけど。

「ただいま、聖。父さんは？」

「今駅前だって。テーブルでゆっくり待ってて」

キツチンに立つ聖は、ピンクのエプロン姿。雫は、悔しそうにそれを眺めていた。聖は笑う。

「いらっしやい、雫ちゃん？」

「え、あ、えと……お、お邪魔します」

予想外に優しい聖の声に、雫は完全に萎縮してしまったようだ。縮こまって頭を下げる雫は、しかし可愛い。

「あの、わたしの名前……」

「ああ——」

意味深な視線を俺に向ける聖。意味深というより、意地悪い笑顔だ。

「環から、嫌ってほど聞かされてるの。あなたとの、お惚気」

「ば、馬鹿、そんなに話してないだろ？」

「環くん、ほんと？ だったらわたし、嬉しいな」

「ほんとよ、ほんと。環ってば、仮にもこーんな可愛い女の子の前だっていうのに、飽きるほど他の女の話するんだもん、妬いちゃうわ」

くすくすと笑う聖の印象がよっぽどよかったのか、雫の態度は少しだけ打ち解けたみたいだ。雫の他人嫌い——嫌いでなく、拒絶は筋金入りだからな、聖の人懐っこさも相当なものだ。

食卓に向かい合って座った俺と雫の前に、聖がお茶を置いてくれた。お盆を胸に抱いて、聖は微笑む。

「ゆっくりしていつてね、雫ちゃん。——まあ、私の家じゃないけどね」

「聖は馴染みすぎだよな。雫に役割取られないように精々頑張ってくれよ？」

「もう、相変わらず可愛くないわ。ねえ、雫ちゃん？」

突然振られる話についていけない雫の不器用さが、少しだけ悲しい。

「ふえ、えと、環くん、可愛いというか、かつこよくて……」

「あらあら、あなたも私に惚気るの？ 独り身はこんなに辛いのに」
「よよよ、なんて泣き声が聞こえてきそうな泣き方は初めて見たけど、聖っていう女の表情は、バリエーション豊かだな。それに素直に謝ってしまうところが雫らしい。」

「いい子ね、雫ちゃん。環に聞いたまま」

「ええと、わたし……」

「いいから晩飯作ってくれよ。父さん帰ってくるじゃん」

「がつつかないの。女の子の前で、みっともないわよ？」

何と言っているのか、今日の聖は本当に「お母さん」みたいだ。雫の戸惑いもわかる気はするけど、聖の変貌ぶりには驚かされた。温かいものを感じる包容力が言葉の端々から溢れているし、その笑顔には慈愛すら感じられる。

俺は、女の愛というものをまだよく知らない。特に、年上の女性から受ける、「母性愛」に関しては無知もいいところだ。知らないものに対して少し臆病になるのは認めるし、それに反して感じる未知に対する期待感も否定はしない。

聖は今、お隣さんでなく姉でもない、一人の母だった。

「環くん、どうしたの？ 急に黙って」

「ああ、雫……聖がさ、いつもみたいな元気系じゃないから」

「聖さん、っていうんだね」

そっぴいえは紹介してなかった。うっかりしていた自分を叱り、キッチンに立つ聖の後姿を指差した。

「高橋聖。隣のアパートに住んでる大学生で、俺が朝飯作る代わりにこうして晩飯を作ってもらってるんだ」

「へえ。じゃあ、家族みたいなものなんだね」

「そう、だな。母さんとか姉っていうには、少し頼りないけど」

「聞こえてるよー、環ー」

肩を竦めると、雫は笑った。

雫も俺と同じように家族を知らない。俺と同じように、ではないか。俺以上に、父性も母性も知らずに生きてきた。俺がそうだから、というわけでもないけど、飢えているはず。片親ですら——普段意識することはないが、こうなのだから、両親不在では余計にそうなるはずだ。

キッチンを見詰める雫の目には、憧憬。何を見ているのだろう。

「雫、あいつ年上に見える？」

少し濡れた空気を払拭する為に小声で発した話題は、聖にとっての最大の弱点だ。

「ふえ？ ええと、何て言っているのか」

「正直に言ってみて。絶対言わないから」

キッチンと俺を巡視して、雫は恐る恐る口にした。

「少し、年下だと思ってた」

「だってさー。聖、雫がお前のこと年下だってー」

「ちょ、環くん、約束違うよー！」

振り返った聖の顔は、晴れやかな笑顔。俺から見ると可愛いが、雫には何が見えているのだろう、身体を小さくして怯えていた。

「雫ちゃん？」

「は、はひっ」

裏返った声が、雫の精神状態を端的に示している。確かに今の声は、冷たかったと思う。

「私が一番嫌いなもの、知ってるかな？」

「……えと、多分年齢を間違われることかな、と」
正解。

「環、奪ってやる」

「ふええ、や、やですよ……」

本気の声に聞こえたから、聖という女は掴みづらい。本気と捉えるから、雫という女は非常に掴みやすい。両極端な二人だけど、ど

こか似たところがあるのは気のせいじゃないはずだ。

「まったくもう、冗談は止めてよね。ただでさえ大学で言われ続けているのに」

「仕方ないだろ、聖の場合」

「口の減らない子ね、環は。雫ちゃん取っちゃうぞ」

「百合か。素晴らしい」

ため息をついた聖は、再び俺達に背を向けて料理に専念し始めた。雫と笑い合ってからお茶を一口飲んで、聖とは違ったため息を一つ。

雫の緊張もほぐれたみたいで、微かに笑んでいる。父さんが帰ったらまた緊張しだすんだろうけど、今はこの家に落ち着いて欲しかった。いずれこの家が、雫の家になったら、なんて思ってた苦笑い。

「雫、そろそろ父さん帰ってくるよ」

「うん、だいじょぶ。えと、でもあんまり話せないかも知れない」

「いいよ。どうせ何回も会うことになるんだから」

「うん……そう、だね」

雫の苦笑いは、父さんの「ただいま」に掻き消された。廊下から漏れ出た影が、蛍光灯の白を少しだけ侵した。

「おかえり、父さん」

「ああ、ただいま、環。そちらが？」

「は、はいっ。や、やや八千代雫と申す者です！」

態度どころか言葉や身体まで硬くする雫に、キッチンの聖と笑い合ってみた。父さんも柔らかく微笑んでいるけど、俺達とは違う、見守るような笑顔だ。

「よろしく、八千代さん。僕は隣っていうんだ」

「あ、はいっ。レンさん、ですね……わたしのことは、是非雫とお呼びくださいっ」

笑いながら頷いた父さんが、聖に視線を遣った。予定調和のように出てきた晩御飯は、いつもより少し豪勢なイタリアンだ。シーフードパスタ——ナポリタンに、ややシンプルなピッツァ、ミネストローネスープ。サラダはシーザー。

俺と雫、聖と父さんと並んだ食卓。皆で笑いながら手を合わせて、揃った「いただきます」の声が始まった。

「雫ちゃん、色々聞かせてくれないかな？」

「え、と？」

「学校での環のこと。僕も全部を把握してるわけじゃないから」

少しまずいかなとは思ったけど、大丈夫だろう。学校での雫の様子を説明するわけじゃ、ないんだから。

「環くん、は、ずっとわたしの傍にいてくれます。楽しそうに笑ってますよ」

「そうかい？ よかった」

翳った雫の表情に、父さんは気付かない。

「美術部に入ってるんですけど、そこでのことはわたしもよく知らないんです。ただ、もうすぐ作品展があるみたいですよ」

「へえ」

感嘆の声と共に俺を見た父さんの目は、少しだけ意外そうだ。俺が今までそういう大きなイベントに際して、父さんに報告しなかったことはなかったから。それを成長ととるか親離れととるかは父さんの自由だけど、俺が父さんを蔑ろにしてるわけじゃないってことだけは信じて欲しい。

「環は、少し不器用だからね。傍についてくれる人が必要なんだ」

「は、はいっ。お任せくださいっ」

「面白い子だ。或いは聖ちゃんに、なんて思ってたけど、雫ちゃんもいいね」

「おじ様、他の女の子の名前出しちゃ駄目ですよ。雫ちゃん、睨んです」

楽しそうに笑う聖と父さんに、雫は萎縮する。まして雫という人間だし、初めて上がった他人の家なんてこんなものだろう。そう大っぴらに笑ったり騒いだり、できるわけがない。

「どう、雫ちゃん？ 美味しい？」

「あ、はい。とても……美味しいです」

「よかった。妹に作る感じで、私も張り切っちゃった」

雫もどちらかといえば実年齢より下に見えるから、聖も姉に見えなくはない。そしてそれより、今日の聖は穏やかな大人の女性を思わせる。

雫も、俺が遊びに行くとき料理を作りたがる。誰かの為に作るというのは、想像以上に楽しく、嬉しいものだ。キッチンが自分の場所であるかのような錯覚は心地良いし、食材が化けていくのも目に楽しい。

テーブルの温かい料理達の湯気が、目の前の聖を少しだけ隠した。聖さん、この家が好きなんですね」

「そうだねえ。私、世話焼きでね、最初は引越したばかりで慣れない人達にー、って思ってたけど、予想以上にいい人達だったから」

「そうか？ それだけでよくここまでできるよな」

いい人、と言われてもいまいちピンとこない。

「見えるから、私」

「見える？ 何が」

「何だろうね？ 面白いよ、環も雫ちゃんも」

見える。具体的なようで抽象的な単語だ。見る、という行為は思った以上に広義で、そして欺瞞に満ちている。だから、正確にモノを見極める力というのを持つ人は、極端に少ない。

「それにね、テレビのいない家族って、貴重だと思うよ」

「環も僕も、話すのが好きだからね。それにこの借家には、まだテレビがないんだ」

借家ではあるが、それなりの自由は許されている。とはいえテレビというものを買うような金は、俺達家族には「余分」だった。このリビングには、食卓や食器棚などの最低限の家具しか置いていない。見回した雫は、意外そうにため息をついた。

「わたしの家より、家具が少ないかもです」

「何か不思議かい？」

「いえ、わたしの家、わたし一人ですから」

「悪かったね……うちでよければ、いつでも遊びに来てね」

「あ、はい……」

傷の舐め合い、とは少し違う。それでも、同じ境遇にいる者としてのシンパシーがある。例えば四条さんのような人には、一生かかっても理解できはしないだろう。

フォークが食器を叩く音は、話し声と混ざり合ってリビングを駆け回る。小さな音だけど、だからこそ耳に優しい。父さんのテナー、聖と雫のソプラノ、食器のパーカッション達は不揃いな合唱だけど、目を閉じると瞼の裏が温もりに満ちてくる。

「雫ちゃん、環はちゃんと支えられているかな？」

「……はい。たくさんものを、貰ってます」

確信に満ちた雫の顔が、開いた目に映った。テーブルの下で手を繋いで、二人は視線を前に向けた。微笑みがあつて、握った手に熱が籠った。

「でもね、二人共」

「だけど聖だけは、そんな俺達を複雑な視線で見守っていた。」

「二人が二人でいる限り、避けられないものがある。それをどう捉えるかが、貴方達の幸せを決めるの」

酷く曖昧な言葉で、俺達を窘めた。幸せは簡単に掴めるものじゃない、因果と相応の覚悟と、時に見返りすら、必要になることがある。それを忘れるな、と。

戸惑いもあつたけど、俺達の前に壁が多いのは承知の上だ。その原因を雫にしてしまう自分に嫌悪があつたけど、それが雫となら乗り切れると思う。例え不幸が続こうとも、俺は——俺は？

繋いだ手を一度だけ強く握り直して、ゆっくりと解いた。糸を引いた温もりの残滓が少しだけ心残りだったけど、今はそれでいい。

「雫、家族になれるといいなあ」

「……うん。絶対、なろうね」

見詰め合う二人を、目の前の二人は呆れたように見守っていた。
晩飯を食べ終わると、雫を連れて自室に入った。雫はこの部屋に入るのは初めてだから、しきりに周りを見回している。珍しいものもない——若干物が少ないが、適度に片付いた八畳間だ。

「感想は？」

「えと、ね？ 笑わない？」

「さあ。感想によるけど」

「意地悪……あのね、ここ——」

俺に遣った視線を再度部屋の隅に戻し、雫は思い切り息を吸った。
「すぐくね、環くんの匂いで満ちてるの。とっても落ち着くよ」

「それはまた……女の子らしい感想というか。お前、恥ずかしいこと言ってるぞ」

「わ、わかってるよお。でも、ほんとだもん」

少し膨れて、雫はベッドの端に腰掛けた。ベッドは、しかし俺が座った時よりずっと静かに撓み、軋むことも無かった。隣に座る俺の手を、雫はしっかりと握った。

「雫ってさ、手握ったり、触れ合うの好きだよな」

「環くんは嫌い？」

「いいや、好きだよ。ま、今のところ雫限定だけどね」

「ふふ。光荣」

口元に右手、淑やかな笑みだ。時折見せる大人びた表情は、決して歳相応とは言えないものに思える。きっと、今までの境遇がその人格を成してきたのだろう。

「雫、辛い？」

「うつん、辛くない。きっとマキさんもナオさんも、わたしのこと許してくれないだろうけど——」

「うつん」

「皆に見捨てられても、環くんがいれば大丈夫な気がするんだ」

「そっか。なら、大丈夫だ」

最後まで雫を愛する自信があるかどうかは、今の俺にはわからない

い。雫に多少の恐怖を感じてるのがその証拠になるし、そんな自信が形を成すことなんて、大抵の場合ないのだ。それでも、今、雫を安心させてやりたい。

偽善に二元的な善悪などありはしない。曖昧な境界線がそれだ。

部屋の中が温かく見えているから、間違っではないはず。

「雫」

一度だけ、雫を見詰めてからキスをした。

「一緒になるうか」

「……うん」

温もりに包まれていたい。雫の作り出す空気と、心と、身体の温もりの、その全てを感じていたい。

家族への一歩。この日俺達は——大きな痛みを伴ったけど、芯まで繋がった。

泊まっていく雫の為に聖もそうすることになり、この日は引越してきてから最高の一日になったと思う。或いは、これ以上なんて有り得ないんじゃないか、そのくらいの幸せだった。

父さんも笑ってくれた。娘のようだって、言ってくれた。

その日は最高の一日だった。或いは、これ以上はないと思えるくらいに、だ。

マキとナオが二週間に渡り欠席していたのは、多少の後遺症が心配されていたからだ。その心配は露と消えたけど、その心に宿った不安は相当なものだったろう。

七月に入り夏休みが近づくと、生徒達は皆、浮き足立っているように感じる。それは解放感であつたり、期待感であつたり、もしかしたら大量の宿題に対する不安感かも知れない。しかしいずれであらうとも、皆が笑っていた。

マキもナオも、例外でなかった。登校するや否や、友達の下で笑いながら入院生活の愚痴を零していた。

雫のところには、来なかった。諦めたように笑う雫が、痛々しい。

「心配？ だいじょぶだよ、わたし」

「わかってる。でも、謝るなよ」

「うん、でも……癖みたいなものだからなあ、謝るの」

「悪癖は直せ」

「はい」

窓際の俺の席は、真夏の陽射しを取り入れて存分に輝いている。

隣の席に座る雫の色薄い髪は、それよりもずっと美しく神々しいのに、どうしてその綺麗な顔を暗く沈ませているのだろう。勿体無いと、心底思った。

「聖が言ってたじゃん。捉え方次第で、俺達のが決まるって」

「わかってるけど。人ってさ、何でも悪い方に捉える方が簡単でしょ」

ポジティブになるよりずっと、ネガティブに生きる方が——どちらが正しいかは別にして、簡単だ。でも、どちらにしても余剰は必要ない。

「癪だけど、四条さんの言う通り。ウィルスを仕込んでないお前に罪はない」

「あは、癪なんだ。聞こえてたら、四条さん、怒るよ」

「聞こえてるわよ」

「ひゃううっ！」

後ろから声を掛けられた雫は、その声にか、それとも声の持ち主にか、声を身体ごと竦ませた。その驚く声は、教室中に響き渡るような、大きな声だ。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。大げさね」

「だ、だって、わたし達に声掛けられる人いないから」

「自虐的ですね。それでは、新規開拓なんてできそうにありませんわよ？」

友人の新規開拓か。マキやナオと街で会った時は、或いは、思っただけ、今回も運が悪かった。そう、運が悪いだけ、巡り合わせの問題だ。次第にでいい、「自分を許す」練習を積んでいかないと

いけない。例えマキとナオが雫を罵ろうが、悪いのはあくまで運――
―或いは食品管理を怠ったファミレス側なのだ。

何が気に入らないのか、四条さんは座る雫を見下ろしたまま腕を組んでいる。睨むような、強い視線だ。窓からの光を吸い込んで輝くその瞳が、雫の不安を煽る。

「な、何か用ですか？」

「……雫さんは、ご自分が不幸になったことはあつて？」

興味はあつた。今まで聞いた話に、“雫自身が”不幸になった事例は数度しか聞いたことがない。「これ」と言えるものがないのだ。雫は一度だけ瞼を下ろし、その色を閉ざした。

「……はい、一度だけ」

肯定だつた。それは懐古というには余りに悲哀に満ちた顔だけ、どうしてか笑つてた。苦笑、とでもいえば正しいのだろうか。

「もう、割り切つたんだと思つてました。でも――」

雫は四条さんから視線を外し、俺に向けた。憧れ、希望、ある種の確信、色々な感情が見え隠れする、それなのにいつもと変わらない茶色だ。

「そうでもなかったみたいですね」

「あら。環さんと関係があつて？」

「そう、なのかな。もう、環くんしか頼れない、だろうから」

ああ、そうか。雫が俺に求めてるものを、ようやく理解した。

四条さんにそれがわかつたかどうかは知らないけど、望んでいた答えは得られたようだ。背後を振り返ると、そこには二人の女生徒の姿があつた。

「やあ、八千代さん」

「こんにちは」

「マキさん、ナオさん……」

マキとナオが、少しだけぎこちない笑顔で雫に手を振つた。何に對して何を感じているのかはわからないけど、雫に近づいてくれた。それがどんな用事であろうと、それは雫にとって大きな一歩になる

はずだ。

続く沈黙に不安を隠せない雫だけど、俺はここで出て行くべきじゃない。出しゃばりが許されるのは、雫が俺のことを必要としてくれている時だけだ。

わかつてる。四条さんだって、何も言わず見守ってるじゃないか。

「あの、八千代さん」

「は、はいっ。何か、なんでしょうかつ」

ナオの呼びかけに応える雫の声が余りに切羽詰って、マキは小さく笑った。雫はそれに気付かなかったけど、俺とマキだけの秘密にしておこう。

「ごめんね。八千代さんのこと、怖かった」

「あ……はい。そう、ですね。わたしも、今度は怖かった……」

「うん……すごく、不安だった」

「わたしも」

重なる言葉は正しく重なっているけど、その種類は大きく違っていた。だって、ナオの表情と雫の態度はまるで正反対だ。雫の背中を窺う俺にはその表情は見えないけど、俯いて、小さい背中を震わせてる。

「やつと、一步踏み出せると思ったんです。でも、やっぱりわたしどれだけの勇気が必要だったろう、雫は顔を上げた。そして言葉を失う。

「ナオ、さん」

「やっぱり、何かな？」

ナオは笑ってたから。さっきのような硬さも苦味もない、穏やかな笑顔だ。

「怖かったけど、少し考えたらすぐわかったよ。ね？」

「ん。やっぱり八千代さん、不幸なんて運ばない」

マキも、雫に笑ってた。雫は不幸を運ぶものでなく、ただ運が極端に悪いだけで、それを不幸と取るかは結局被害者次第なのだ。確かにその事件で亡くなった人の、その遺族の無念は決して晴れるも

のではないだろうけど、「雫が悪い」と責める人はいなかった。皆、怖いだけなんだ。

「だってねえ？ お腹痛いだけだもん」

「うんうん。後、少し緩くなっちゃったけど」

思わず吹き出しそうになったけど、そこは堪えた。緩くなったって、あれだよな？

「だから、ね。ごめん、今まで」

「ごめんなさい」

二人揃って頭下げるから、雫は萎縮してしまった。ずるいな、二人共、それじゃ雫は反論なんてできるわけないぞ。案の定、雫は手をわたたと振りながらそれを許した。「それ」が何を指すかなんて、付き合いの短い俺にはきつと理解できはしないんだろう。

「まだ少し怖いけど……今は平気」

「うん。仲介頼んだのは、それもごめんね」

「仲介……」

雫の視線の先に、不機嫌そうな四条さん。

「なんですの？」

「い、いえ、なんでも」

四条さんも、彼女なりにクラスのことを案じているんだろう。決して雫のことを案じているんじゃないだろうけど、それはそれでいい。四条さんに好かれたいとも思わないし、こちらでも好かれようなんて思っていない。慣れというのは意外に恐ろしいもので、ある程度の時間の経過で大抵のことは気にならなくなってしまう。

ただ、四条さんという人間には、いつまで経っても慣れそうになかった。

「それより八千代さん」

「あ、はいっ。ナオ、さん」

「私達、大丈夫かな？」

「あ、え？」

ため息一つ、マキは雫に向けて手を差し出した。その意を量りか

ねたのか、雫はおろおろと狼狽して、その手を取ることもできなくなっていた。

「雫、握ってやりやいいんだ」

「あ……うん」

俺が口出しするのは反則だろうか、なんて思ったけど、雫もそれを望んでたはずだ。

マキやナオと、友達になれるってこと。

「私も。よろしくね、八千代さん」

「お願い、します」

マキの次はナオの手を取って、雫は呆然としながら俺に振り向いた。その目は潤みきっていて、だからその色は綺麗に輝いている。

噂が流れ始めてから今まで誰も雫に近づいてこなかった。今、初めて雫に人が歩み寄り、そして「友達」になろうとしている。彼女達の意味で、彼女達の願いで、それは四条さんという助けを要したけど、何よりも尊いことだと思う。

椅子を離れて俺の胸に飛び込んできた雫を受け止めて、その髪を優しく梳いてやった。まだ二人はいるのに、感極まってしまったんだな。

「よかったな、雫」

「うん、うん……ありがとね、環くん」

「何言ってるんだ」

彼女達の意味を導いたのは、俺じゃない。

「全部、お前の力だよ。俺は、少し背中を押しただけ」

いい場面でなんだけど、「何もしてない」と言うのは癪だった。俺だって、あの日ファミレスでは、雫の為に頑張って二人を説得したつもりだったんだ。

自分から弱さを見せるのは、弱さじゃない。そういうことだ。

「熱いねえ、二人共」

「複雑だったけど、お似合いだね」

マキとナオの声に照れるかと思ったら、雫はより深く俺の胸に潜

つてしまった。「もつと撫でて」、なんて言葉が聞こえてきそうだ。呆れた目で、それでも微笑みながらそれを見守る二人に笑み返して、雫の髪を再び撫で付けた。

そんな空気を切り裂く、確かな声。不機嫌に染まっている。

「いい身分ね、ここがどこだか心得ていて？」

「四条さん、空気読んでよ」

「こちらのセリフです。学校が交際をする場ではないことくらい、小学生でも知っていてよ？」

そりやそうか、なんて納得できるはずもなかった。それが四条さんでなくマキやナオのセリフだったら納得できてしまいそうなほど、彼女の言葉には反感を覚えた。

異常だ。恩すらあるはずなのに、どうしてか彼女の言葉は受け入れられない。

「今までなかったことにしといて、今更邪魔だなんて、都合よすぎだろ」

「そういう問題でして？ 公共の場ですべきこととそうでないことの分別をつけると言ってるんです」

「そうか。四条さんの基準では、集団で人のこと見てみぬ振りをするのは、すべきことなんだな？」

「環くん、もういいよお。わたし、離れるから」

癪だ。確かに四条さんの言うことは気に入らないけど、雫の言う通り彼女を放すのが一番無難で、角が立たない。仕方ない、雫の背中から手を離すと、肩を押して雫を起こした。

「まったく、ああ言えばこう言う。空気というのは大衆が作るもの、くらいわかるでしょうに」

「俺達は大衆に含まれない？」

「そのくらい、わかるでしょう」

言い返そうとする意思と、俺のボキャブラリーが一致しなかった。悔しいけど、反論できるような要素もなかった。俺達がマイノリティに属していることくらい、彼女の言う通り、考えずとも理解でき

た。

鼻で息をついて、「これ以上ここにいたくない」とでも言うように、四条さんは自分の席へ戻っていった。「大衆」の待つ、明るい場所だ。

「八千代さんから見た四条さんって、こんな感じだったんだ」

「普段近くにいるからわかんなかったけど……」

ナオとマキが示し合わせたように顔を向けると、少しだけ眉を顰めた。

「なんか手のひら返すようだけど、感じ悪いね」

「ねー」

小声でそう、雫に同意を求めた。自分の席に戻っていた雫は困ったように笑い、それでも「そんなことない」と否定してみせた。あいう態度を許容してるわけでなく、ただ雫は四条さんを嫌悪することができない。

俺と同じように、雫は四条さんを受け入れられないと言っていたのを思い出す。それでも「怖くない」と言ってくれたのが、どうしても忘れられないそうだ。

「まあいいや。ねえ八千代さん」

「な、なんですか？」

「そっか。まず、その敬語なんとかしようよ」

マキの進言に困惑を隠せない雫の敬語は、もう理性の壁を越えたものだ。なんとかしようと思っただけでできるものじゃない。俺だって、恋人という立場じゃなきゃ敬語を使われていただろう。

「無理かあ」

「ごめんなさい」

双方共に残念だったらしく、ナオと雫が項垂れる。マキは、どうやら雫の反応を予想していたようだ。

気を取り直したように顔を上げた二人のタイミングが合っていて、思わず吹き出した。苦笑したマキが、照れるナオの肩を叩き、雫に向けて指を立てた。

「まずね、雫って呼んでいいかなって思ったの」

「あ、はい。どうぞ」

「うん。じゃあ——」

マキと頷き合ったナオは、笑顔で雫を見詰めた。しばしの沈黙の後、口にする。それはきつと、第一歩なのだと思う。

「雫」と、優しい声で。

6話

めざめて中の人

早紀の携帯の番号を入手したのは、随分前のことだ。家で自主制作をする時に何か困ったことがあれば訊いてくれ、ということでも、随分無防備に教えてくれた。

頼まれ事を一緒に片付けてしまおうということで、早紀に連絡を入れた。先日美術部の先輩に頼まれた、ジェッソとワニスの買い物だ。作品完成の期日は一ヶ月、の、一週間前。早いうちに買っておかないと部員全員に迷惑がかかるし、その結果早紀の作品がギャラリーからなくなってしまいかも知れない。

結果、雫と聖まで集まってしまった。携帯で電話しているところを、遊びに来ていた聖に見られ、その報告を聞いた雫が「わたしも行く」と頑固になってしまった、というわけだ。そうなれば、聖が行かない理由もない。

「ごめんな、早紀」

「ああ、うん。いいよ」

少しだけ表情を翳らせた早紀のその声を聞いても、許容された気にはなれない。

駅前で待ち合わせをしていた早紀は、俺が二人の女の子を連れてくるのを見て、露骨に顔を顰めていた。なにせ、二人共が可愛い。

不安を隠せない雫が早紀の前に立つと、どうしてか俺の方が不安になっってくる。

「は、初めまして。八千代雫です」

「よろしく、金城早紀です。八千代雫さん、ってことは……」

早紀の視線を受けて、俺は雫の肩を抱いた。細い肩は少し震えていて、どれだけの不安を感じているか窺わせる。

「うん、俺の恋人」

「そつ、か。可愛い子で、よかったね」

「まあ、ね。それよりほら、聖」

そんな俺達の遣り取りを珍しく静観していた聖を促す。微笑ましいものを見るような彼女の視線が、少し気に入らなかった。差し出された聖の手を、おずおずと取る早紀。

「よろしくね、早紀ちゃん。私、高橋聖っていうの」

「はあ、聖ちゃん、ですか」

「ひ、聖ちゃん——！」

「……何笑ってんのよ、環」

まさかとは思ってたけど、「ちゃん」をつけられるとは。笑うなっつて言う方が酷な話だ。

「な、なに？ 環君？」

「さ、早紀……」

笑いながら喋ると、腹が引き攣って上手く言葉が出てこない。何とか出てきた言葉は単純で、しかし早紀には大きな衝撃だったようだ。

「聖、三つも年上だぞ？」

「え、ええ？」

再度聖を見た早紀の視線は、疑念に変わる。訝しげな瞳が、次には俺を捉えた。騙されているとも思っているのか、少し不機嫌そうな色に染まっている。

「嘘でしょ。だって……」

「だって、何かな？」

「……だつて、どう見ても中学生」

今度の笑いは大きなものだった。駅前を歩く人々の視線がほとんどこっちを向くほどの大きな笑い声に、早紀はようやく事実を認識したようだ。そっぽを向いた雫の肩が震えているのがわかって、聖の肩も揺れる。その揺れの意味なんて、今更考えるまでもない。

「あーっ、もう！ 皆して酷いよ！」

「あああの、ごめんなさい！」

それから数分は笑い続けた。憤慨する聖と、萎縮する早紀と、それを笑う雫と俺で、人波の視線を一身に集めていた。意外な組み合わせになったけど、早紀も雫を知らないみたいだし、上手い人間関係が築けそうだ。

聖はすぐに機嫌を取り戻した。そこまで子供じゃないし、何よりここは、騒ぐには暑すぎる。用を済ませる前に、街を歩き回ろうということになった。

「美術部で環がお世話になってる、か。いいご身分ね、周りに美少女ばっかりで」

「それ、もしかして自分も含めてるか？」

「ふふん、当然。あれよ、容姿には多少自信はあるのよ？」

確かに自信を持っていいレベルではあるが、

「雫、どう思う？」

「え、ええ？ ええと……か、可愛いと思います」

メインストリートから一つ道を外れると、車道と呼べるような車道はなく、脇には多くの店舗が並んでいる。歩いていると絶え間なく人とすれ違い、少しだけ不安を覚えた。降り注ぐ陽光は「夏」と呼ぶに相応しいもので、今ここにある全てを容赦なく焼いていた。

「早紀がこの中で一番年上に見えるよな」

「そ、そう？」

「酷いよ環ー」

「酷い、環くん」

以前住んでいた場所に比べると、ここは繁華街とまでいかない、

商店街くらいがちょうどいいだろうと思わせる。それでも、賑わいという大きなファクターがあった。

「それにしてもこの暑い中、よく手なんか繋げるよね」

「これが不思議なものでな、暑いけど熱くないんだよ」

「私にやわかんないなあ。早紀ちゃん、繋ごうか？」

「遠慮します……」

古着屋や喫茶店、軽食などの店が目立つ。若者の歩きやすい街、といった感じだろうか。メインストリートがどちらかというと大人向きなので、ちょうどいいのだろう。聖もここをよく利用するらしい。

「じゃ、今日はお姉さんが皆にご馳走してあげようかな」

「太っ腹だね。いいぞ聖」

「太っ腹って言葉、私好きになれないんだよね。なんなの、太い腹って。失礼じゃない」

「ほら早紀、つつこむところだ」

「仲、良いよね」

「ほんと……」

「いやつつこめ。というか拗ねるな雫。爪を立てると痛いぞ」

気付けば、少し外観の古臭い、喫茶店らしき建物の前に来ていた。聞くに、聖行きつけのおすすめらしい。聖の舌は確かなものなので期待が持てるが、どうしてもこの古い見た目に一步引いてしまうところ是否定できない。焦げた茶色をした木製の壁は、今にも崩れそうなほど脆く見える。

「入ってみればわかる。中はいい感じだし、何より味が最高だから」

「ま、いいけどね。雫」

「う、うん……こういうとこ、初めてだよ」

「私もエスコートして欲しいなあー、ね、早紀ちゃん」

黙秘を貫いた早紀を最後尾に、同じく木製のドアをくぐる。金属の軋む音と共に流れた空気は、少し懐かしいコーヒーの香り。ノスタルジックな雰囲気は、確かに聖の言う通り「いい感じ」に違いな

い。古い外観の割に中はしっかりした造りで、エアコンもきちんと効いていた。丸いテーブルと低い椅子も、店舗と揃って丈夫な木造だ。

何より、その香りが優しかった。コーヒーは香りを楽しむ飲み物というだけに、確かに、聖も惚れておかしくはない。席についた俺達は、鞆を傍らの床に置いた。

「どう？　ここはね、友達も連れずに一人でお茶する時に来るんだ」「私達、ついて来ちゃってよかったですか？」

「まあね。環も色々頑張ってるみたいだし、ご褒美みたいなもんだよ」

「何だそれ？　頑張ってるっていうと、雫とか早紀の方がよっぽどだろ？」

慌てながら否定する二人を――俺を含めてかも知れないが、笑ひ、聖はメニューをテーブルに広げた。コーヒーだけで数十種揃えるそのメニューに少しだけ圧倒され、しかしこういうところで余り冒険する気も起こらなかったたので、エスプレッソに心を決める。

全員が決まったところでバイトらしきウェイトレスを呼ぶと、穏やかな返答と共にすぐテーブルの横に立ち、伝票を広げた。

「わ、わたしはカプチーノ」

「早紀は？」

「レギュラーで」

「俺、エスプレッソ」

年少者二人が注文を終えると、いよいよ常連である聖の出番だ。

ここの美味しいコーヒーも熟知してるはず。

「はいはい、私ウィンナーコーヒー！」

全員吹き出した。しかし店員さんは慣れたものらしく、恭しく頭を下げてキッチンの方に引っ込んでいった。

「なに笑ってるの、皆」

「だって、なあ？」

「うん」

早紀と顔を見合わせて、示し合わせたように聖に顔を向ける。

「似合いすぎ」「ですから」

雫も同じ気持ちらしく、未だに笑いを堪えて震えている。聖が注文した瞬間なんかは、俺も、聖の鼻の下にクリームがついたコケテイツシユな様子を想像したくらいだ。こう言ったらウィンナーコーヒーに失礼なんだろうけど、低年齢向けのコーヒーだと思っていた。「まあ、わからなくてもないけどねー。でもあれ、意外に美味しいのよ」

「味を疑ってるわけじゃないんだよ。聖が飲んでるのを想像して笑ったんだよ」

「余計失礼じゃない。まったく、人が何飲もうと勝手にしように」

「そりゃね。でも、あの大人しい雫でも笑ってたよ」

慌てる雫に笑いかける聖は、多分「怒ってない」とでも言いたいんだろ。そりゃ、そのくらいで怒られたら堪ったものじゃない。

そもそも、俺の周りには温厚な人間が多い。雫然り、早紀然りだ。

「で、今日は何買っただけ？」

「ジェッソとワニスです。美術用具」

「何それ？」

「ワニスは、ニスって言った方が馴染みますね」

確かに、入部したての頃はその二つ共の意味が全くわからなかった。今の説明と同じことを言われてようやく理解したくらいだから、それは的確なものだったろう。

「ふーん。で、ジェッソってのは？」

「地塗り剤です。基本的にはアクリルとか油彩に使われるんですけど、色を引き立てるんですよ」

一応水彩にも使われるらしいけど、俺はそれを使うつもりはなかった。専門的知識も何もないから偉そうなことは言えないけど、色を引き立てるということをしなくなかった。俺が描く人というのは、そういうものだ。

早紀による美術談義の序盤が終わる頃、ようやく人数分のコーヒ

ーが運ばれてきた。それぞれ用途に対して豆を分けているらしく、確かにその香りには微かな差異が見受けられる。

「いったきまーす」

一番元気なのが、一番年上というのは、微妙な気分だ。結局「いただきます」を口にしたのは聖一人で、残る三人は静かにカップに唇を添えた。

「わ、ほんとにおいしい」

「ほんと。驚いた」

得意気になる聖が少し気に入らないけど、確かにこのコーヒーは美味しかった。この濃さは若年層に受けが悪いだろうけど、それを承知で注文した俺の望む通りだったし、何よりその香り高さがマインスイメージを払拭する。コクのある酸味は、ミルクなどのマイルドな味を混ぜると化けるはずだ。

「聖、やるなあ」

「まあねー」

胸を張る聖の口元に、ウィンナーコーヒーの生クリーム。注文した時より大きな笑い声が、小さな店内に木霊した。

「へへ、私可愛い？」

「開き直るな。可愛いというか馬鹿っぽいよ」

紙のナプキンを使って口元を拭いた聖は、そのまま据付の砂糖をコーヒーに入れた。どうやら、生クリームが入っているにも関わらず苦かったようだ。そもそもウィンナーコーヒーというのは、生クリームの甘さとコーヒーの苦味とのギャップを楽しむものなのだ。それをこの聖という女は。

「最初からカフェラテでも頼んどけよ」

「やあよー。生クリームが好きなんだもん、仕方ないじゃない。苦味を楽しむのは、最初の一口だけで十分なの」

「ああ、わかっててやったんだ」

苦笑した俺に同調したのか、隣の雫も早紀も、似たような表情をしていた。大学生になれば格段に大人になるんだ、とか思ってたが、

それは責任とかそういう部分だけらしい。聖を見ているとよくわかる。肉体的な部分はほとんど変わらないし、精神年齢も低そうだ。

「それよりね、早紀ちゃん」

「はい？」

「環の絵、上手いの？」

「訊くな」

「誰も環に訊いてないじゃない。早紀ちゃんの、熟練者の意見を訊いてんのよ」

「そんな、熟練者なんて……」

プロ、というには少し足りないかも知れないけど、早紀は確かに熟練者というに相応しいものを持つてると思う。でも、俺の絵に関して訊いて欲しくないのは正直な気持ちだ。

「で、どうなの？」

「そうですね……荒削り、というにも早い感じです。まだ削り始め」

「あはは、まあたつた一月だもんね」

何事も経験。経験は時間によって成される。美術という分野において大切なのは基礎、というだけに、俺の経験不足は何より致命的だ。加えて言うなら、センスがあるわけでもない。

「でも、描きたいものがあるというのはいいと思います。そういう人って、意外と少ないんですよ」

「そっか。確かに……私もこれってものがないな」

「画力に関しては、普通、としか言えませんがね」

「随分あっさりと切り捨てるな、早紀」

「うん、事実だもん」

笑いながら俺の画力をあっさりと否定した早紀をそれとなく睨んで、コーヒーを口にした。エスプレッソの濃厚な苦味が広がると、口の中が成熟したような錯覚を覚える。苦味というのは人にとって大切なもので、何かを成長させようと思う時、それは何よりも重要になってくる。早紀の苦言然り、だ。

しかし苦いものは苦い。俺も聖と同じように、砂糖なんかを追加

してみるのだった。

「環くん、わたしのおうちは？」

そんなことを突然口にした雫は、何が言いたいのだろう。考えたものの、心当たりは一つしかなかった。自分の恋人に対して言うことじゃないかもしれないけど、下らない嫉妬だ。

「楽しいぞ。というか、雫は……」

「わ、わたしは？」

「柔らかい」

「や、やわら？」

彼女のお気に入り、俺の胸を背もたれにして本を読むことだ。

お腹を抱いてやると、少し唸ってから小さく笑う。

「ああ、すごく柔らかいぞ」

「柔らかい……」

けたけたと笑う聖は、既にその意味を理解しているのだろう。その隣で苦笑する早紀も、雫の思案を見守っている。

「コーヒーと共に腹に満ちる温もり。窓から入る陽射しは柔らかさを孕み、既に不快感などなくなっている。外と中との温度差。そして店内と体内の温度差。ここは、酷く調和が取れていた。」

「いい店だな、確かに」

「でしょ。飲んでわかって、飲んでてわかる」

会話が続き、コーヒーは減っていった。温もりだけが積もっていつて、最早「ここを動きたくない」とさえ思った。

会計は聖任せ。バイトはしていないらしいが、それなりの財があるらしい。心地のいい店内が名残惜しい気はあったが、聖を残して歪んだ景色の元へのドアを開いた。

「暑……雫、大丈夫か？」

「うん、平気。環くん、お茶あるよ？」

「あ、もらう」

雫がバッグから取り出したペットボトルを受け取ると、キャップを開けて一口含んだ。口に広がっていたコーヒーの香りを消すのは

惜しかったけど、今は冷たいものが欲しかったところだ。

「ありがと」

「わたしも飲もうっと」

「え、八千代さん……」

「な、なんですか？」

驚いたように呟いた早紀に、雫は酷く萎縮してしまう。やはり、今まで他人を避けて生きてきた雫に、他人と打ち解けるのは難しいだろうか。ペットボトルの口に下唇の端をつけて、雫は早紀を見詰めていた。お茶はまだ飲んでいない。

「間接、キス」

「ふえ？　へ、変ですか？」

「変じゃ、ないけど」

何度も唇同士を重ねているのに、今更間接的なキスで照れる方が難しい。早紀にとってそれは初めて目にする「恋人らしさ」だから仕方ないのかも知れないけど、そうやって驚かれるのは心外だ。もともと、早紀が男女関係に疎いのも、知っているけど。

お茶を飲んだ雫はそれをバッグに仕舞い直し、俺の左手を取った。確かに他の子達と遊びに来てるのにこうするのは空気が読めていない証拠だろうけど、この温もりは一度手にしてしまうと手放せなかった。これもまた、俺達の恋人らしさだ。

軋んだ音と共に冷たい空気が流れ出てくると、聖の明るい声が響いた。

「や、お待たせ。じゃ、そろそろ行こうか？」

「はい。一度メインストリートの方に戻ってもらっていいですか？」

俺も画材屋に行くのは初めてだ。期待が胸を占めると、思わず表情が緩んでいくのを感じ、それを悟られないように顔を伏せた。もちろん、背の低い雫からは丸見えだったろうけど。

「環くんは、何描くの？」

「え。別に」

「別につてなあに？　言えないの？」

「言えないっつーか……ま、ギャラリーに見に来な」

「チケツトは、もちろんくれるんだよね？」

頷くと、雫は嬉しそうに笑った。部員にチケツトが配られるかどうか知らないのは、内緒にしておこう。配られないというのであれば、雫には悪いけど、自分の金で来て欲しい。我が俸なんだろうけど、そうした方が「雫の足で来た」感覚が強い。

それに、早紀の作品を見るのに、俺のチケツトじゃ悪いだろう。まだデッサンが終わった段階だけど、あれは本当に見事なものだ。

「八千代さん、環君が何描くかわからない？」

「え、えと……まだこの街に慣れてないし、それにあんまり人も知らないから……あ」

「わかった？」

「そ、そんなはずないと思う」

なんだろう、顔を赤くして。早紀には雫が何を考えてるかわかったみたいだけど、彼女はそれを教えてくれるつもりはないらしい。握った雫の手に汗が滲み、俺の手を熱くした。

「しかしあつついな。聖、なんとかしてくれ」

「私にどうしろと？　なんだったら服脱いだら？」

「これ脱いだら裸じゃねえか。なんだ聖、見たいのか？」

「見たい」

これには、俺より先に雫が怒り出した。いくら家族みたいだからって、そこまでは駄目だ、らしい。呼吸するたびに肺を満たす熱気は、服を脱いだくらいじゃどうにもならない。脱ぐつもりなんて、最初からないのに。

冗談だと笑う聖の右隣、立ち止まった早紀の前を見ると、ビル同士の間小さな店舗が建っていた。

「なんか、場違いだね。ここ？」

「はい。入る、環君」

「ああ。なんかすげえ楽しみだな」

画材屋の中は、独特の匂いで満ちていた。絵具やシンナーなどの

香りが混ざり、しかしそれは不快でない程度に薄まっている。画材
といえは美術準備室にあるものや部員の持ち物程度しか見たことが
なかったけど、こうして専門店に置いてあるものを見ると、本当に
多種にわたることがわかった。

「私と環君で買う物見てくるんで、二人は適当に見ててください」

「わかった。じゃあ雫ちゃん、行こ」

聖と雫のロリっ娘コンビは、そのまま店の奥に歩いていった。名
残惜しげな雫の視線は、どうしても俺より早紀に向いていたと思
う。

「環君、何か見たいものある？」

「せっかくだし、水彩見たいかも」

「じゃ、ついてきて。水彩って言っても、絵具だけじゃないし、絵
具だけでも不透明と透明とあるから」

「小学校で使ってたの、あれは？」

「不透明。ガッシュって言うの」

早紀の視線の先には、絵具のコーナーがある。油彩やアクリル、
水彩、他にも墨なんかも置いてあるみたいだ。

「下書きは終わったの？」

「あと少し。なんというか、いまいち頭に浮かんだのがおぼろげで、
水彩をペンで下書きするという技法は、本来余り見られるものじ
ゃない。ただ、俺の場合初心者だから、輪郭を捉えずに水彩するの
は難しいだろう、との早紀からのアドバイスだ。」

「書き出せばわかるよ。モデルがいるなら、付き合ってもらえばい
いのに」

「モデルというか……上手く説明できないけど、付き合ってはもら
えない」

本当は、申し出ることさえできない。それは歯痒いことだけど、
俺の胸の中にだけ住んでいればそれでいいと思える。彼女は俺の中
で、あくまで幻として存在していた。

陳列棚に並べられた絵具は、とても覚えきれものじゃないほど

に彩り豊かだ。その中から、彼女に合った色彩を見つける。濃淡の境界が酷く曖昧で、彼女を「色」として認識するのはとても難しいけれど、それは俺にしか見えないものだ。

「個人の買物だけど、部費も使えるから、遠慮いらないよ」

「とうか……」

首を傾げる早紀の視線を受けて、またしても思い出したこと。

「財布、失くしたまんまだ」

「環君……無一文で街に出てたの？」

「面目ない。昼飯どうしようか」

「奢るよ。それじゃなきゃ、八千代さんが奢ってくれるでしょ」

確かに彼女も俺が財布を失くしたことを知っているけど、そう何度も零を頼るのも忍びない。金銭面に関して、男である俺が頼るのも気が引ける。如何ともし難いのは理解してるが、納得ばかりはできそうにもなかった。

「ま、とりあえず道具選ぶか」

「準備室に結構揃ってるから、相当変わったものじゃない限り買わないでいいよ」

そんな調子で店内を見回り、店を出る頃にはちょうどお昼時といった風情だった。

近くのデパートにあるファーストフードショップに入った俺達は、それぞれ軽めの昼食を注文し、テーブルを囲んでいた。

「重い荷物は男に任せ、そのくせ女ばかりのメンバー。気が楽なところの上ないね」

「すぐく……同意しづらいです……」

「単に環の男友達が少ないおかげ。偉いよ！」

「褒めてんのか、それは」

確かに友達と呼べるような男はいないけど、話さないわけじゃない。黒田なんか、零と付き合いだしてから結構な頻度で話しかけてくる。「不幸になる」と教えてくれたのはあいつなのに、どうしてか零を嫌悪しているようには見えなかった。

「でも環くん、ほんとに女の子に囲まれてる」

「仕方ないだろ、男があんまり寄ってこないんだから。部活は俺以外全員女だし」

「環くん、よくそんな部活に入れるよね」

当時は女の子に囲まれることが嬉しかったし、今はそれに安堵すら覚えている。女の子という性は、外面を取り繕って生きるものだ。「早紀、今まで男はいなかったのか？」

「いないね。私が入学してから、環君以外の男の子が部室に入っただけのことないもん」

徹底した排他主義、という言い過ぎだろうか。異分子にならないというのは誰にでもある感情で、そうすることで「出た杭」にならないようにしている。そういう意味で、俺はその時既に転校生という異分子だった、というわけだ。

もう慣れた。女の子ばかりの部室も、その後に向かう雫の家にも聖の部屋にも、そして、狭い交友関係にも。

可愛い女の子ばかりというのは、時に弊害も生み出す。今の状況がまさにそれだ。ナンパなんて、初めて見た。しかも、男がいる目の前で。

「迷惑。邪魔。煩い。臭い。醜い。帰って相応の女とよろしくやってればいいのに」

表情も変えず、顔も見ず、男達を罵る聖というのも、さすがに初めてだ。お高く留まって、なんてセリフには、何て返していいのかわからないほどの悲哀を感じる。こんな衆人觀衆で暴力沙汰は有り得ないし、どっちにしたって向こうが悪だ。

俺が口を挟むまでもなかった。聖の口先だけで、男達はすごすごと退散してしまったのだ。

「……なんだかなあ」

「絶滅危惧種だよな。ごめんな、聖」

「別にいいけど。ああいうの、得意だし」

「すごいです」

「いやあ、照れるから褒めないで、雫ちゃん」

雫は、始終俯いて縮こまっていた。男に守られるタイプと、自衛の手段を持つタイプ、そして男を守るタイプ。どれが好きだと分類するつもりはないけれど、雫が好きな俺は、きつと庇護欲が大きいのだろう。

「早紀、大丈夫か？」

「うん……ああいうのってさ、逆恨みとかが怖いじゃない」

「そんな時は、環が何とかしてくれるんでしょ？」

「まあ、頼りになるわけでもないけど、やってはみるよ」

殴る蹴るの喧嘩なんて生まれてこの方したことがないから、いざ本番になったとしても上手くやれるかわからない。角を立てない生き方をポリシーにしてきたから、争い事は元々苦手なんだ。もちろん、早紀や聖、そして雫を守る為なら、それを崩すにも吝かじゃない。

いざこざには無縁の生活を送ってきた。どう転んだって、そんなに面倒な人間関係にはならないだろうと思いつながら、交友関係を築いてきた。

「そろそろ、出ようか」

「そだね。環くん、私が奢るから、カラオケでも行こうよ」

「……そう、だな。まあ、たまにはパーッと遊ばないとな」

雫の申し出は少し意外だったけど、断る理由もなかった。雫が早紀や聖に少しでも近づこうとしてるのになって、嬉しくなったから。

街で遊んだ時間は、あっという間だった。カラオケ、ショッピング、気付けば日も落ちて、街には夜の帳が落ち始めたところだ。父さんはまだ帰っていないはずだけど、少し寒気がして、家に帰りたいくなった。

人気のない路地を、賑やかに歩く。嫌な予感といえば、最初からしていたんだ。早紀の言う通り、くだらない逆恨みだ。

デパートのファミレスで女性陣をナンパしてきた男が仲間を連れて、俺達の前に立ちふさがっていた。女性陣を後ろにやり、俺はそいつらを必死に睨みつけたけど、これだって小さな虚勢だ。相手を煽るだけの結果しか招かない。

前に出たのは、男達でなく、またしても聖だった。

「やめといた方が、いいと思う」

「ああ？ 今更、許すと思うか？」

「許す許さないじゃなくて、そっちの為に言ってるんだけど。分が悪いわ」

暗がりの工事現場に、下卑た笑いが木霊した。改めて見渡しみると、ここは作業中の現場だということに気付く。

「雫ちゃんと早紀ちゃんが揃うと、やっぱりまずいよねえ……環もいるし」

「おい聖、それどういう意味だよ？」

聖の言葉に疑問を抱いたのは、不良達より俺だった。雫も早紀も、何か武道をやっているわけでもない、むしろか弱いタイプの女の子だ。暴力沙汰になれば、勝てる道理など一分たりともあるわけがない。

首を傾げる俺達と、相変わらず笑う不良達。まだ大丈夫、まだ怒っちゃいない。

「ああ、ああ、まずいまずい。私もそろそろ限界近いよー」

次第に切羽詰っていく聖の声は、確かに本気だ。冗談でもなく、今こいつらは危機に晒されている。他でもない、雫と早紀によって。「あ……」

その時だ。小さな呻きと共に聖の身体から力が抜け、崩れ落ちてしまった。なす術もなく道路に落ちた聖の身体は、既に意識の手綱を手放し、そしてその意識すらも彼女の中から外れてしまっている様子だ。

少し自失してしまったが、慌てて助け起こしたら、瞼は硬く閉ざされ、あれだけ活発に動いていた唇も同様だった。

「……聖？ どうした？ おい、しつかりしろ！」

不良の存在も忘れ呼びかけたが、指の一つも動いていない。夜闇に晒された身体は、淡く輝いているように見えた。

「ちようどいいんじゃない？」

「騒ぎそうなやつがいなくなったし」

人が一人意識を失っているというのに、こいつらはそれを好機と取り、その下卑た笑みを止めようとしなかった。歩みを始めたその先は、俺だ。抵抗されると厄介なのは男、俺を最初に潰しておくのは当然の決断だろう。

わかつてはいるが、身体が動かない。誰かに押さえつけられているかのように、聖の身体を支えたまま彼らの動きを見つめていた。

「た、環くん……！」

「うるせえよッ！」

「ひ……」

雫の恐怖に満ちた声が、ようやく俺に現実を見せてくれた。たったの数歩だ。彼らのうちの一人が繰り出した脚をかわす術はなく、それによって聖から腕を外されてしまった。痛みや衝撃が襲ったのは数瞬後、やっと見えた現実には身体が対応した。まったく、我ながら遅すぎる。

たったの一発。まだ動ける。立ち上がった俺は、三人いるうちの一人の元へ走り、それに応じて出てきた腕をかわし、相手の鼻面に拳をぶつけた。しかしその程度でダウンしてくれるほど甘くないらしい、それから喧嘩とも呼べない、野蛮な殴り合いが始まった。

俺の攻撃は、たったの数発。そしてそれすらもすぐに終わった。多勢に無勢、三対一じゃ、勝ち目なんて最初からなかったんだ。

情けないけど、俺の心は「助けてくれ」で一色だ。俺が動けないのを確認して、雫や早紀が逃げないように向かった一人を、白んできた視界で確認した。

「やめ、ろ」

「うるせっぞ、ヘタレが」

独特のイントネーションが、癪に障るんだよ。

くそ、くそつ。動け。何度念じたところで、心と身体は直結するものじゃない。雫達に近づいた男を、二人の男の影から見守ることにできなかった。

そこで聞こえたのは、誰のものかもわからない、空気を劈く高い声。朦朧とした意識の中で聞いたそれは、意味を成さないただの音だったはずだ。それなのに次に響いた音は、その場の空気を凍らせた。重い金属がアスファルトに叩きつけられる、鈍く重く、圧倒的な爆音だ。

言葉が出ない。既に立ち上がることもできない俺だけじゃない、それを見届けた、この場にいる人間の全てが、その音の発生源を見詰めていた。

「ひ……うああああ！」

確認してすぐ、今度は醜い奇声が響いた。

野太い鉄骨が、雫達に向かった不良の爪先を潰していた。彼にとつてそれは運がよかったとしか言い様がないほど至近に落ちていて、そして彼以外を巻き込むことなく、そこに横たわっている。

悲嘆の声が路地を駆け巡る。「痛い、痛い」と悲惨なほどに震えて、さつきまでの威勢など欠片も見えなかった。

「だ、から……言っただのに……」

意識を取り戻したのか、聖が肘だけで起き上がって、爪先を潰された不良に憐憫の眼差しを向けていた。

「聖、無事か？」

「うん、もう大丈夫。環こそ、ボコボコじゃん」

「言ってる」

俺をたこ殴りにしていた二人は、仲間の悲惨な状況に、俺を殴ることも忘れていたようだった。雫や早紀を避けるように横たわった鉄骨とそれに潰された足、流れる血が、彼女達の瞳に涙を浮かべる。恐怖が哀れみか、それとも喜びか。

ガンッ。意識がそちらへ向いていたせいか、今度は誰も反応でき

なかった。再び鳴り響いた轟音から数秒、今回は俺を殴っていた不良のすぐ後ろだ。

「もう、消えた方がいいよ。ここにいれば、君ら、確実に死ぬ」

その声が届いたのか、二人だけは、情けない悲鳴と仲間の一人を置き土産に、すぐに大通りの方へ消えていった。彼らにそうさせるくらい、聖の言葉には真実味があったし、何よりこの状況で信じられない方がおかしかった。

聖の言葉は、これを指していたのだろうか。雫がいるから、こうなったのか。すぐに思い当たったのは、信じてしまうと自分が嫌になるような、そんな可能性だった。

「偶然でも人為でもないもの、か」

「……なんだよ、それ」

声を失くした雫や早紀の代わりだったろう、聖に問うていた。

悲鳴を上げ続ける足の潰れた男。立ち竦んで動かない早紀や雫。

上体だけを起こして鉄骨を見守る聖。明瞭にならない視界でそれらを見守る俺。確認するまでもなく、空気は十分に変わった。もう危険はない。

今は、雫達のメンタルをケアしてやらないといけない。そのはずなのに、痛みのせいではなく、俺はその“可能性”のせいで一步も動くことができなかった。

聖は呟く。「それが運命だ」と。

7話

めざめて中の人

雫達を守れなかった、なんて鬱積はさして長くは続かなかった。他ならない聖の言葉が気になったからだけど、本人に直接訊くことはできない。はぐらかされるという可能性が大きいし、何より話すべき時がくれば彼女から話してくれるはずだ。

学校にはすぐに復帰した。怪我の具合は一部を除いてそう酷くはなかったし、暴力沙汰が問題になることもなかった。ただ、工事現場での事故は大きく取り扱われ、ニュースにもなっている。朝にテレビを見た聖曰く、「ボルトの締め忘れ」らしい。

俺にとって何より幸いだったのが、雫や早紀の身体や心に傷が残らなかったこと。翌日の病院で会った彼女達の笑顔に、俺は何よりの安堵を感じたものだ。

逆に不幸だったことといえば、腕の骨がいかれてたこと、だろう。当時は必死で痛みすら覚えていなかったけど、病院で症状を告げられてから途端に痛くなったものだ。不思議と、自覚するまで何も感じていなかったのに。

「大丈夫か？ ボコボコじゃねえか」

「まあね。黒田さ、今から一週間で治せる応急処置とか知らない？」

「アホか。骨折が一週間で治ったら、ノーベル賞貰えるぞ」

「とりあえずお前がノーベル賞を誤解してることはわかった」

本当なら、一週間でも遅いくらいだ。俺がああ作品を出さなければ、最悪部員全員がギャラリーに出版できなくなってしまう。俺にとって、手が不自由なことよりもずっと、その方が問題だった。

マキやナオと話す雫を見て、ため息を一つ零す。

「誰か二つくらい作れるんじゃないの？」

「皆、そんな適当には作れないよ。期間一杯使って、最高の物を作ってたんだ」

早紀を含めて、本気で描いてる連中に、部員全員が少しずつ触発されている。それは間違いないいい傾向だから、俺の怪我なんかで勢いを折るわけにはいかなかった。

「俺がその場にいればなー。ぱぱっと、こつ、ね」

「なに、お前、喧嘩好きか？」

「まあね。というかお前らのケースだとき、正当防衛が成り立つたろ？」

「危ねーやつだな」

微かに笑った黒田は、そういう方面に自信があるのだろう。聞くに、こいつがこの高校に来た理由というのは、格闘技関係らしく、三人くらいなら本当に一人で片付けてしまっただろう。確かに、黒田がああ場にいればよかったのに。

情けないけど、俺が相手にできるのは多くて一人だ。二人増えたんだ、多勢に無勢でなす術もなかった。

「ま、なんとかなるんじゃない？ なんだったら、部員を一人増やせばいい」

「斬新なアイデアだな。でも……」

「でもなんだよ？」

俺が納得できない、なんて、言えなかった。我が俣を言ってる場合じゃないことは理解しているし、何よりの手段がそれだということ

とも同じだ。俺の作品を加えて、展示会に参加したい。しかしそれも確かな感情だった。

チャームが鳴り、担当教諭が入ってくる。黒田の席から離れていく俺に、彼から一言。

「次は呼べよ」

始まった授業中、雫は相変わらず真面目だ。ここに来てようやく気付いたのは、教師すらも雫を避けて通っている、ということ。設問に応じて、他の生徒を満遍なく指すような教師でも、彼女を指したことが一度もなかった。人間不信になっておかしくないこの状況で、よく俺に心を開いてくれたと思う。胸に、針が刺した。

四条さんは逆だ。少し難しい問題があると真っ先に指され、そしてこともなげに答えてみせる。学力も相当なものだった。

そろそろ期末考査が始まる。知ったところで何の意味もないけれど、雫や四条さんの具体的な学力もわかるだろう。雫の家に行くの大抵勉強をしているから、互いの弱点は大分克服してきたつもりだ。反して最近では雫の家でなく俺の家だから、勉強も疎かになってるけど、その分父さんとも親密になってきた。

一昨日のことがなければ、順風満帆になりつつあったのに。理性の保たない馬鹿のせいで、どうして俺達が困らなくちゃいけないんだよ。思い出すだに、苛々する、腕が痛む。

持っていたシャーペンをノートの傍らに置いて、後ろ手を組んだ。こんな時こんなこと、とは思うけど、確実な手段はあった。――例えば早紀から四条さんに頼めば、すぐにでも新入部員を用意してくれるだろう。彼女には、それを補って余りあるほどの人望がある。プライドとかそういう些細なものがなくなれば、俺は迷いなくその道を選んでいたはずだ。

雫を幸せにする。絵を完成させる。父さんを救い出す。これだけのこと、どうして俺は一步も踏み出せないのだろう。

うじうじ悩むのもらしくない。わかってはいる。頼杖ついて黒板を眺めていると、緩やかなスピードで黒を埋める白が確認できた。そ

れに合わせて教室の中は黒鉛が滑る音で満ちていき、独特の静けさが支配する閉塞感ばかりが増した。
たったの五十分。今日はやけに長く感じる。

昼休み、用意された弁当を携えて美術室に向かっていた。折れた利き手じゃ、固定してノートを取るのが精一杯だ。どうしたって絵は描けないけど、何かしらイメージを膨らませることくらいはできるはず。或いはただ未練がましいだけの行為かも知れないけど、何もせず諦めるより精神的にマシだった。

「特別教室なんて、授業以外で行くの初めてだなあ」

隣を歩くのは、俺の初めての恋人。雫にとってそれは見慣れた校舎だろくに、物珍しそうに辺りを見回している。今までの雫に、校内を見回すだけの余裕はあったか、そんなことが頭を掠めた。

「美術の授業とか、一年の頃あった？」

「なかったよ。だから、入るの初めて」

正確に言えば、二年に上がる時に音楽が美術かを選ぶことになっているそう。俺はある程度有無を言わさず音楽という面もあったし、不満もなかった。美術部に入ったのも、或いはだからこそだろうか。

「金城さんとか、いるかな」

「さあ。でも、あの子も友達付き合いとかあるだろうし」

「昼休みに部活してる人もいないことはないみたいだよ」

教室にいてもわかるだけで数人、昼休みになると部室に向かう人がいる。

「美術はどうだろうね」

「さあなあ。ホントなら、俺が一番頑張るべきなんだろうけど」

「行っちゃだからね。お昼休みは、一緒に食べるんだから」

笑いかけて首肯、ため息をついた。雫も随分我が侘になった。今までの雫を思うと嬉しい部分もあるが、やはり女の我が侘というのは男にとって都合の悪いようにできているものだ。雫に向けた笑顔

も、本当は苦笑だったのかも知れない。

話しているうちに、美術室にはすぐに着いた。中に誰かいるらしく、数人の女の子と思しき声がする。雫と見合わせてからドアを開けると、予想に違わず部員達が談笑していた。

「あら、どうしたの伊藤君。珍しいじゃん」

「いや……これの報告を」

ギプスに固められた腕を肩だけで少しだけ上げると、部員の女の子達は一瞬の驚愕の後、心配に表情を歪めてくれた。責められてもおかしくないって、思ってたんだけど。

「早紀が言ってたの、本当だったんだ。痛そー」

「いや、動かさなきゃ痛くはないけど……動かすのは、無理かな、と」

「描けない、ってこと？」

口には出しづらくて、首だけで肯定した。美術室のそこら中から漏れ出たため息に、しかし俯くことすら許されなかった。弱音を吐くことが許されるのは、やるべきことをやった者だけだ。

「どうすっかなー。早紀は何て？」

「無理するな、って。なんとかするから、って言ってた」

早紀の部内での信頼は大きく、昼休みにも集まるような連中には特に好かれている。だからというわけでもないが、それだけである程度安心したらしい。具体策があるわけでもなし、彼女の存在の大きさが窺える。

俺にできるのは、早くこの腕を治すことだけ。早紀も言ってたけど、本当にそれしかないのだろうか。握った拳に、力など入るわけがなかった。

「でもさ、警察とか出張らなかったの？」

「いや、昨日病院で色々訊かれた。鉄骨が落ちただけだし、答えようがなかったけど」

「そのことじゃなくて、不良のことよ。証拠は伊藤君自身で」

追いかけることもできたかも知れない。一度は考えたけど、そう

はしなかった。角を立てたくないという、至極勝手な我が俣の為だ。
「その……」

視線を向けられた雫の肩を叩くと、慌てた彼女が数瞬拳動を狂わせる。

「や、八千代雫ですっ」

「八千代雫って……マジで？」

やはり雫の噂は校内に回っているらしく、部員達は揃って嫌悪を露にした。雫もそれがわかっていているのか、次には口を閉じて俯いてしまい、どうやっても顔を上げてくれそうにない。

「そう険々な態度取らなくていいって。害はないから」

「でもさー……ねえ？」

「駄目なら、出てくわ。雫、寂しがりだし」

否定したいのかそうでないのか、雫は俺の二の腕にそつと触れた。顔を見合わせた部員数人が、顔だけで相談している様子だ。

わかつてはいた。雫に関する噂がたった七十五日で消えることがないことも、それがついて回る限り雫はどこへ行っても受け入れられないことも。それでも、胸が痛かった。疑ってるんだ。一昨日の事件が、雫のせいじゃないかって。そのくらい、言われなくてもわかる。

「まあ、いいや。お昼ご飯食べるくらい、何ともないし」

「あ、ありがとうございますっ」

「お礼なら伊藤君に言いなよ。伊藤君の彼女じゃなかったら、信用しないんだから」

目が合った雫に笑いかけて、その頭に手を置いた。背が低い彼女は、縮こまってくしゅつと笑う。

「そこにテーブルあるから、お弁当ならそこで食べて。私ら、皆パンだからさ」

「あいよ。ほら、雫」

雫も、自作の弁当を持参して、いつも俺と一緒に昼食をとっている。一度雫が「環くんの分も」と言ってきたが、そこまで世話をか

いけないと断ってしまった。少しだけ後悔はあるけど、間違った選択ではないと思う。

四人で食べた晩御飯の残り物。それが今日のメインディッシュだ。今回は聖と雫謹製だから、美味しくないはずがない。

「伊藤君さ、もう彩色するだけだったんだよね？」

「んー、まあ、もう少しかな。なかなか難しくてさ」

「ふーん。早紀も残念だろうねえ」

面目ないとは思うけど、俺の腕は、治らない限り動かせないというのが現実だ。本人が言ったわけでもないのに、「手塩にかけて育てたのに」なんて言葉が痛かった。

「今朝作ったの、それ」

「雫がか？」

「うん。美味しいかな？」

我が家によく泊まるようになった雫は、時折俺と協力して朝食を作るようになっていた。俺の目が留まらない間に、こんなものを作っていたとは。箸で摘まんだオムレツを口に放り込んで、味わうようにゆっくりと咀嚼した。

空気読め、とも思ってるんだろうか。部員達の、雫に対する視線は冷ややかだ。わかってる、雫は空気を換えようとしてくれていたこと。

「伊藤君ってさ、普段何してるの？」

「普段、ねえ……」

家でのことを指してるんだろうけど、やってることというところ余り思い浮かばない。

「雫と近所のお姉さんで遊んでる、かな」

「まーだ女の子がいるんだ。どんな遊びをしてるのかなあ？」

「健全だぞ。俺が雫をからかい、聖——ああ、お姉さんの名前な。

聖が雫をからかい、って感じで」

冷やかな視線に、僅かながらの憐憫が加わった。雫の弄られ属性は、異常なほどに進化してるからな。素直なところがあり、思っ

た通りの反応をしてくれるというのが、そうである一番の理由だ。

雫の美点でもある。人を素直に信じるというのは、ただでさえ難しいというのに、あんな状況にあって俺を信じてくれたのは、奇跡にだって近いと思う。

「まあ、雫も慌てちゃいるけど嫌そうじゃないし……だよな？」

「う、うん……特に嫌とは思ってないけど、すつごく、恥ずかしいんだからね」

顔を赤くしながら言うから、部員達の勘違いは最高潮だ。これも雫をからかっていることに、彼女は気付いてくれるだろうか。

笑いが収まると、一人の女子が準備室のドアを見詰めながら口を開いた。苦い表情だ。

「にしても、早紀も不憫よねえ」

「どういうこと？」

「あの子も結構色んな事件に関わってるのよね。皆は知らないけど、そういう背景もあるから、雫のことを無下にはできないという。」「ずっと前に自殺した子がいるでしょ。あの子達と最後に話したのが……」

「早紀？」

「だからかな、警察と話すのもうんざりしてると思うよ」

早紀も、今回の事件で警察から事情聴取を受けている。俺はよく知らないけど、警察のことを訊いた時、確かに彼女は言葉を濁していた。

早紀が噂にならないのは、本当に関わりが薄いからだ。最後に話したとか、悩みの相談に乗ったとかいうのは、周囲にとって些細なこと——或いは本当に「噂程度」でしかない。雫のように、その場にいた、という確実性がなかった。

どうしてだろう。俺の周りには、そういう人が溢れている。いつも感じていたシンパシーがそうだというのなら、四条さんも、そして……俺も。

「八千代さんさ、早紀のことどう思う？」

「え？ えと、いい人でした。やっぱり、怖かったみたいですけど」
「そうだよねえ。正直なところ、あたし達、今でも怖いもん」

気付かなかった。早紀は確かに最初、雫のことを恐れていたような視線をしていたけど、確実になくなっていたと思っていた。雫にしてみれば、なくなっただけなんかいなかったんだ。

でも、わからなくはない。怖いというのなら俺も同じだし、それが時折外に現れることも自覚している。

しかし――

「早紀と八千代さんの関係。怖い」

「え？ どう、いう？」

二人に関係があったからこそ、早紀は怖がっていたんじゃないだろうか。可能性はある、らしい。

「八千代さんに関わった人の中で死んだ人、何人かいるでしょ？」

「……はい」

俯く雫に「不躰でごめん」と謝り、部員は続ける。俺にそれを止める術はなく、そしてそんな気もなかった。

「さっき言った自殺者もそう。早紀が相談相手になったり――後は色々あるけど、確かに早紀も関わってるんだよね。多分、全員」

「全、員……？」

「そう、全員。有り得ないとは思うけど、関わってないと思う方が難しいよ」

異常といえば異常。偶然といえば偶然。聖の言葉を借りるなら、偶然でも人為でもないもの、とも言えはいいのだろうか。

敢えて言葉を探すのであればそう――

「早紀と八千代さんの両方と関わるのは、だから怖いんだよね」

「わ、わたしは……わたしは、怖がる皆さんを見るのが、怖いです」
本音を話すのは難しい。だからこの部員達も、「いなかったことにする」ようなクラスメイトに比べれば大分マシだ。そして、被害者である雫がそうすることなんて、今までないと思ってた。それはもしかしたらただの我が侘なのかも知れないけど、少なくとも自分

を閉じ込めてしまうよりずっと良い。ずっと閉じ込め続けていたら、そのうち自分を覆う殻が、壊れてしまうかも知れないから。

しかし悪びれた様子もない部員達は、容赦のない一言を浴びせる。「事実だから」と。この場で泣くことすら許されない雫は、そのまま走って部室を出て行ってしまった。

「本人も、わかってるんだろうね」

「だろうな。まあ、あの子にも友達ができ始めてるし」

「行ってあげたら？」

「当たり前だろ」

俺が行かなきゃ、誰が行くんだよ。雫にとって頼れる人間がどれだけ増えようとも、俺は最後に頼れる人間でありたい。まだ出会って一ヶ月だけど、この場にいる誰よりも雫に近づいたのが、俺なんだ。

走る必要はなかった。雫がどこにいるかわかったわけじゃないけれど、行くべき場所は、わかってた。

外に出て校舎裏を抜け——少しだけ勇気がいるけど、フェンスを越えてすぐのところに、薄暗い林がある。昼間だというのに陽光は届かず、風もないのに葉擦れが鳴る。不気味としか形容できないところに人が近づくはずもなく、だからこそ一人になるにはうってつけだった。

少しだけ拓けた場所にそびえる大きな杉の下、うずくまる小さな影が揺れていた。

「……わたし、何かしたかなあ」

震える声で、俺を迎えてくれた。悲運を嘆く声、自分を呪う声、それは悲痛な叫び。

「普通に過ごしてるだけ、だよ？普通に生きてる、だけなのに」
掛ける声は見つからず、それでも雫の声を遮ろうとは思わなかった。或いは、思えなかったといった方が正しいのか。そんな自分を肯定するつもりはないけど、下手に声をかけたところで、それが慰めになるとは限らないんだ。握った拳に、汗が滲んだ。

「皆、わたしを見てくれない。見ても、怖がって、誰もわたしを知ってくれない」

雫を見た人間がどれだけいるだろう。それはどんな姿を捉えていただろう。

雫を知る人間がどれだけいるだろう。健気で、素直で、優しくて、可愛くて、そんな雫を、どれだけの人を知ろうとしただろうか。

葉擦れと木漏れ日が場の空気を少しだけ温めたけど、それで雫の涙が乾くことはない。

「環くんがいてくれなかったら、もうこんな風に泣かなかっただろうな……」

「……雫は」

呼びかけたつもりだったけど、その掠れた声が雫に届いたかはわからない。ただ、震えた肩だけが雫を知らせてくれた。

「泣きたくなかったか？」

返事はない。嗚咽だけが届いて耳を震わせ、俺は握った拳を柔らかく解いた。

涙にも色々な種類がある。どれがどれとは言わないけど、雫が流す涙はきつと、悪いものじゃない。「泣いてもいい」なんて高尚なセリフは言えない。でも、俺の前で我慢なんてしないで欲しいと思う。

小さな声が葉を揺らし、空気を揺らし、俺の心に小波を立てる。

「今までね、辛いと思ったこと、あんまりなかったの」

慣れ、というのだろうか。人間や生き物は、環境に適応しようとして、慣れてはいけないうなことにまで慣れてしまうようできている。

「でも、ひとりだけ。ひとり、わたしの傍にいてくれる人がいるだけで、こんなにも景色が変わっちゃった」

「雫に会えたのは、間違いじゃないって思ってる」

「……まだ大丈夫なの。まだ、辛い」

だから、と言葉を続けて、雫はようやく立ち上がった。

振り返ったその顔に、もう涙はなかったけれど、その代わりに微笑みが張り付いていた。

「だから、一緒にいてね」

ああ、そうだ。雫のどこに惚れたか、今まで自覚することがなかったけど、もしかしたらこういうところに惚れたんじゃないのかな。こんなにも可愛い人、こんなにも優しい人、こんなにも強い人を、どうして俺が放っておけるだろうか。

キスをしてわかった。ほっぺた、まだ濡れてたんだな。

聖は笑ってる。彼女が、恐らく今回の事件で一番ダメージが少なかった。一度失神したけど後遺はなかったし、精神的にも落ち着いている。

聖の部屋には今も通ってるけど、もう俺を蹴ろうとはしなかった。その代わり、「自分でなんとかしろ」と、俺にはよくわからないことを言うようになった。何をすべきなのは教えてくれなかったし、何が迫っているのかも同様だ。

今更だけど、聖には見えない部分が多すぎた。時折俺を見ながら「他の何か」を見ているのが、その最たるものだ。それを証明するというわけではないけど、以前には「見える」と言っていた。

雫と部屋に遊びに行くと、笑って迎えてくれる。気になることは多々あったけど、俺や雫にとってはそれが何よりだった。それが全てだった。

「やはー、よく来た雫」

「は、はあ、どうも」

陽気に笑う聖に、雫は少し縮こまってしまった。

今更ながらに気付いたことといえば、雫を呼び捨てにするのは、俺だけだということ。

「さ、環も上がって。おじ様が帰るまで時間があるし、遊ば」

「父さん、最近帰るの早いよな」

「……いいことじゃない。仕事が順調なんじゃない？」

「だいいいな。ま、子供が仕事のこと気にしても仕方ないんだろうけどさ」

仕事は大人の領分だ、という認識が強い。父さんを支えたいと願う反面で、手の出しようがない部分があることに少しだけ辟易していた。

日本の会社は——昨今でこそゲゼルシャフトに移行しつつあるが、ゲマインシャフトという形態をとるところが多い。そういう「共同体」或いは「家」という認識下にあって、集団というのは少し閉鎖的な部分があり、外部の人間がその情報を知るのは難しい。父さんだって訊けば答えてくれるだろうけど——プライベートに仕事を持ち込んで欲しくない、なんて我が俣を、勝手ながらに抱いていた。「たーまきー。早く上がりなー」

「ああ、悪い」

聖の声に苦笑しながら、雫の大きなお泊りセットを抱え直して、部屋の敷居を跨いだ。

変わらない片付いた部屋。畳の、少しだけ冷えた感覚。

「聖の部屋って、すげえ落ち着くよな」

「そう？ まあ、お客さんを招くには気を遣ってるけどね」

「その割に誰か来たの、見たことないな」

「だって、呼んだことないもの」

こういうところも、聖の「見えない部分」と言っているのか。ただのボケ気質なんだろうけど、どうつつこんでいいのかわからない難解なボケだ。

「お茶菓子ね、いいクッキーが入ったのよ」

「あ、お構いなく」

「俺は構う。食べたい、いいクッキー」

雫に窘められたが、聖だから催促するんだ。出会って間もない俺達だけど、気安さという面じゃ、ある意味雫より上。聖という人間を嫌う人が、いるだろうか。例えばこの間のナンパだって、ただの逆恨み、聖が彼らを煽ったからだ。

あいつらを恨むつもりはないけど、せめて時間だけでも返して欲しい、なんて。

「ほら、これ。いい色でしょー？」

「美味しそう……」

「雫ちゃんもどうぞ。今お茶淹れるからね」

キッチンで紅茶の茶葉をティーポットに入れる聖を横目に、クッキーを一口口に放り込んだ。齧ると広がる、仄かな酸味。

「これ、レモンかな？」

「多分……美味しいね」

レモンの酸味と、そこに隠れる微かな甘みが、舌を心地良く刺激する。そう舌が肥えてるわけでもないけど、だからこそ「美味しい」と「美味しくない」の二元的な味覚になってくる。美味しいものは、美味しい。

紅茶はすぐに入り、聖も輪に入った。フランボワーズといわれる茶葉で淹れたフレーバーティー、らしい。木苺のような、甘酸っぱい香りがする。

「オシャレですね、聖さん」

「あはは、そんなことないよ。ただまあ、こういう『楽しむ』タイプのお茶が好きなんだよね」

味わうのもいいけど、せっかくの刹那だから、どうせなら楽しんでいたい、らしい。わからなくもないが、その感覚はどちらかというと女の子特有のものと思う。雫もその香りに満足してるみたいだ。「それはそうと、ごめんね？」

「何が？」

「腕さ、私があいつらを怒らせたからでしょ？ 謝るのも遅れちゃって、ダメなお姉ちゃんだなあ」

その自虐より、お姉ちゃんという響きに無理を覚えて、笑いを堪えるのに必死だ。なんて言ったら、聖どころか雫にまで怒られそうだから、口には出さないでおいた方が懸命なんだろうな。

女の子に囲まれた男っていうのも、幸せそうに見えて肩身が狭い

ものだ。以前の俺が見たら、羨むような状況にあるというのに。

「雫ちゃんも、ごめんね。辛かったでしょ」

「いえ、わたしは……」

雫は、聖の顔を見ようとしなかった。それがわかってか、聖は微笑みもう一度だけ謝った。「私が悪いんだよ」と、優しくだ。

「美術部でなんかあったよね？ 間に合いそう？」

「いや、無理っぽい」

「どうするの？」

方策はない。「任せろ」といった早紀だって、具体的な対策なんて持つちゃいないだろう。答えに窮した俺の言葉を待つように、聖はこつちを見ている。テーブルを挟んで向こう側、聖の目がやけに近く感じた。

「私がなんとかしようか？」

その提案には、流石に声が出なかった。冗談にしたって性質が悪いし、それなのに聖の声色に茶化すような響きはなかったから。

「言ったでしょ。交渉事は得意なんだ。私ならネゴシエーターになれるね」

「それでなんとかできるって？ 学校でできないことを、一介の大学生が一人で？」

「うん。私のせいだし、お詫びのつもりでさ」

言葉が出ない。呆れもあるけど、それ以上の迷いが俺の喉を塞いでいる。

自分の力で何とかしたい。でも、俺じゃあ力不足もいいところってことも、わかりきってる。頼れば可能性はあるかも知れないけど、今後に更なる悪影響が残るかも知れない。諸々の事情が、判断を阻んでいた。

それに、部員の皆に黙って決断するわけにいかない。だというのに、この場には、この件について黙ってられない女の子がいた。雫だ。

「それ、本当ですか？」

「うん。まあ、確実じゃあないだろうけど、確率が高いと思うよ」
そう言い切れる聖は頼もしくもあり、そして多少無責任に感じて疎ましかった。その自信はどこから来るんだなんて疑念が鬱積して、しかしその自信は確信に近い色を持つているように感じた。「私だから」という、ある種絶対の自分に対する信頼だ。

雫は俯いていた顔を上げて聖を見詰めた。少しだけ目線の低い聖が、上目遣いに笑う。

「お、お願いします。環くん、一生懸命やってたから、だから」

「それは雫ちゃんからお願いするようなことかな？ 雫ちゃんが決断することかな？」

見守る俺は、どこか蚊帳の外にいる気分だった。雫の必死も、聖のどこか試すような視線も、俺には届かない。

少しだけ面白かった。いつもより毅然とした雫や、いつもより余裕に溢れた聖が、どこまでもらしくなくて、笑いが込み上げてきたんだ。らしくもないし不謹慎なんだろうけど、不覚にも笑いを堪えることはできなかった。俺の大きい笑い声に、真剣だった二人の表情は一度に崩れ、代わりに「きよとん」という呆けた顔が残った。

迷うものじゃない、ってことかな。どんな選択肢が雫を、聖を安心させるかはわかってるけど、生憎とそれは納得できそうになかった。美術部員もそうだろうし、早紀だって、もちろん俺もそうだ。

「いいよ、聖。多分、俺達だけでなんとかするべきなんだと思うしさ」

「そう？ まあ、皆が納得してればそれでいいんだけど」

「だめだよ、環くん。毎日学校が閉じるまで頑張ってたでしょ？」

毎日下校時刻まで描き続けてきたから思うんだ。自分達だけで頑張りたい、って。

雫は、集団生活でのこういった感覚を忘れて久しいと思う。だからというわけではないけど、多分俺の選択には納得のできないものを感じているだろうし、もしかしたら「わたしが」でも思ってるのかも知れない。

出来上がる予定だった作品の数が十六から十五に変わる、それだけの問題だ。妥協のできない部員達に二作を制作させるわけにはいかず、俺はこの腕の状態で描くことができない。全治一ヶ月が今更二日に変わるわけもなく、八方塞とまではいかないものの、少なくとも四方は囲われてしまっていた。

「でもさ、雫。納得できなくても、聖に迷惑かけるわけじゃないだろ」

「でもでも、美術部員さん達、今でも自分の作ってるんでしょ？」

「俺が足引っ張るわけにいかないこともわかってるけど……もう、俺も部員なんだよ」

わかってくれとは言わないけど、雫には共同作業の楽しみを知って欲しかった。

「あと二週間だよ？ そうしないと、皆悲しいよ」

「不器用でいいからさ、雫」

「でも、でもお……」

こんな風に、何か——誰かに夢中になれたことを、自分でも驚いてる。

迷うくらいならやった方がいい、とはいうけど、その「やる」がどちらなのかわからない時、どうしたらいいだろう。どっちにしたって、納得のできる結果なんて残らないかも知れない、それも承知だ。どちらが上か、なんて比べるつもりもない。

「ただ、迷惑は本人達が被ればいいだろ？」

「だって……」

雫は、「自分のせいだから」と自責を抱いてるんだろうか。誰が悪いわけでもない、というのは、雫もわかってるはずなんだ。

或いは本音は、別にあるのか。

「見たいもん。せつかく環くんのお友達が作ったの、見たいもん」

ああ、そうか。

情けない話ではあるけど、そういう見方を失念していた。部員達の作品を見たがってる人達が、確かに存在しているという、簡単な

事実だったはずなのに。部員達にも、自分の作品を見せたい大切な人がいるかも知れないことを、怪我してからずっと、思い浮かべもしなかった。

気にすべき事柄が増え、迷いが生じて、その度に聖の提案へと心が傾いていくのを感じていた。俯いてみると、不思議と顔が上がらなかつた。

「環くん、やっぱり聖さんをお願いしようよ」

俯いてしまうと、言葉まで胸の奥で止まってしまふ。膝に置いた拳に、少しだけ汗が滲んだ。

入ってくる陽射しは傾き僅か。風はなく、外は遠く鳴く蝉の声で埋め尽くされて少しだけ喧しい。沈黙は、居た堪れないものだった。

「ま、二人共落ち着きな」

「聖……」

ようやくか、今まで口を挟もうとしなかつた聖が口を開いた。

「二人だけで決めることじゃない、っていうのが結局だと思うよ。明日辺り、皆に相談してみたらいいじゃない」

それだけのことだ。雫も俺もあっさりと納得して、代わりに落ちた静寂を打ち消すようにクツキーを頬張った。

雫と二人だけだったら、平行線を辿り続けていただろう。自分を引っ込めることに關して、雫の右に出る者はいないだろうけど、こゝと俺に關して、雫は決して自分を譲ろうとしなかつた。自惚れでもなく、雫は俺に夢中になってくれてるはずだ。

だからこそ、聖の存在がありがたかつた。確かに交渉事關して彼女を超える人間はそう見かけないし、何より「いるだけで」という安心感がある。

生まれ持った才能が違ふ。わかりやすいところで、黒田なら武道、四条さんなら大抵のことはこなしてしまうだろう。そして聖の持つ才能が、人と人とを繋ぐ架け橋、「仲介」である、ということ。

これといって際立つたものを持たない俺だからだろうけど、そういう才能を一つでも持つ人を羨ましく思う。そして同時に、その際

に背負うことになるだろう「責任感」について考えることもある。才能や技能は、振るってこそそのもの、という認識を持つ人間は当然いるだろう。それが聖のような才能を持つ人間だったら、ということだとだ。

重苦しいだろう、きっと。喧嘩の仲裁なんて、率先してやりたいものじゃない。

「悪い、聖」

「ん？ 何が？」

「なんでもない——さて」

首を傾げる女性陣を見回して、膝を叩いた。

「トランプしよう」

「……おっしゃ、ババ抜きで負けたら一枚脱ぐんだ」

「ひ、聖さん、一枚しか着てませんよお！」

さもありなん、今日の聖は小柄なキヤミソール一枚とミニのフリルスカートのみだ。雫以外の裸に大した興味はないが、こういう賭け事に対しては俄然萌えてくるというもの。

聖は不敵に笑う。

「負けなきゃいいのよ、雫ちゃん」

「聖如き、すぐ真っ裸にしてやる」

「た、環くんのえっちっ！」

普段は押しの弱い雫が俺達を止められるわけもなく、その場のノリだけで始まった脱衣ババ抜き。過程はどうでもいいとして、結果には少し驚かされた。

まあ、雫の下着姿は見たことあるし、そう照れるわけでもないけど。

8話

めざめて中の人

美術部のことは、結局のところどうにもならなかった。聖に頼めば、とかそういう問題でなく、聖に頼むことをしなかった、ということだ。自分達だけで解決する、というのが部員の総意だった。早紀も同じ気持ちだ。

聖は笑いながらそれを了承し、気を悪くした様子もなく黙り込んだ。雫は納得いかないみたいだったけど、部員本人達がそう言うからには反対もできない。

俺の家に集まっていたいつもの「家族」は、大きく纏わりつくような湿った空気に包まれていた。蛍光灯に照らされたいつものリビングは、どうしてかそれより暗く見える。

美術部のこともあったけど、それ以上の問題が降りかかっていたから。

兆候はあった。例えば帰りが遅くなったこと。これは多すぎる仕事に追いつかなかったから。例えば突然その帰りが早くなったこと。任される仕事が急に減ったから。帰宅が早くなる少し前から、言われ続けていたそうだった。

父さんが、リストラの憂き目に遭った。父さんは職場でも若い方だったけど、父さんの会社が典型的な「家社会」だった、というのが原因だろう。

稼ぎの当てがない。この借家も、じきに住めなくなるだろう。それを聞いて何を思ったか、なんて、何も思えなかったに決まっている。頭の中が真っ白になって、目頭が熱くなつて、それでいて脳髄が凍えるような冷気を感じて。それでも敢えて口にするなら、「どうして」か「どうする」のどちらかだ。

父さんが頻りに謝意を口にしてるけど、頭にはもちろん耳にすら届いては来なかった。父さんを救いたいと思いながら、慰めの言葉すら出てこなかった。

怖かった。ここにいらなくなることや日常が崩れること、父さんが小さく見えたこと、雪に捨てられたらなんて可能性を思ったこと。その何もかもが、俺の頭を引っ切り無しに殴るんだ。ガツン、ガツンッって、何度も何度も、思い切りに。

父さんの謝辞を遮られるような人間は、一人しか心当たりはなかった。

「まあ、おじ様、頭上げてください。まだお先真っ暗ってわけじゃないんでしょう？」

「それは、そうだけど……今のところ、当てはないんだ」

覚悟はしていたが、準備はできなかった。それは果たして覚悟と呼べるものだったかはわからないけど、人間というものは得てして「まだ大丈夫」という樂觀をしてしまうようにできているものだ。父さんを責めるつもりはなかった。

信じられなかったんだ。父さんは、決して怠惰でもないし、仕事に対して一生懸命だったから。それに対する会社の仕打ちがこれかと思うと、父さんより最初に会社を責めなくなるのが子供の心情だ。鼻屑目とか甘えかも知れないけど、納得なんてどうしたってできそうもなかった。

「そうですね……おじ様、何ができます？」

「何が、というと？」

「技能です。資格を持つてなくても、できることはあるでしょう？」
簿記、TOEIC、シスアド、宅建、知る限りでもたくさんありすぎて、どれがどういった企業に求められているかはよくわからない。

「……資格じゃないけど経理ソフト全般と、資格で言うなら英語——英検とTOEIC、あとシスアドと大型二種、くらいかな」

顎に手を遣ってしばし黙った聖は、三拍だけ間を置いてため息を一つ。どうして大型二種を持つてるのは、特に気にならなかったようだ。

「十分ですね。かけあっておきます」

「かけ、あう？ 聖、どういうこと？」

「環、今は大人の話し合いをしてるの」

何も言えず——言うことも許されず、俺はテーブルの上で拳を握った。家族の問題だというのに手を出すことすらできない歯痒さ、悔しさ。

「まあ大した影響力はありませんけど、以前逢坂インダストリーの取引を手伝ったことがあるんですよ。交渉事は得意、ってことで」

「それで僕を雇うような権限が？」

「ありませんけど……話を聞くくらいはしてもらえます」

つまり、優位な面接を受けることができる、っていうことか？

逢坂インダストリーは、この街にあるこの街の為の大企業だ。地域密着型の産業が功を奏し、——局地的ではあるが、大きな立場を持つ。そこで面接を受ければ、もし落ちたとしても、地元企業が拾ってくれる可能性も出てくる。

聖の話には少し信憑性が欠けてるけど、溺れそうな俺には、少なくとも藁よりずっと頼もしく映った。バイトもしていない聖が金を持つてること自体、前から疑問に思ってたんだ。

それにしあって、聖は異常だとも思った。交渉事が得意とはいえ、まさかプロとしての扱いを受けていたなんて知らなかったし、大企

業でそれほどの信用を勝ち得ているなんて尚更だ。何か特別な訓練でも受けていたとは思えないし、才能なんて言葉で納得できるようなものでもない。

「おじ様、プライドは捨ててください。おじ様の為でもありますけど、それ以上に――」
「それはわかってる。迷う理由はないよ」

ああ、俺だって、言われなくてもわかるさ。

聖に関してはもういい、気にするだけ無駄だ。ただ、父さんを救うという一点において、聖の存在はとても大きなものになった、というだけ。

問題は解決に向かい、場の緊張感は少しだけ緩んだ。ただ一人、黙しながら、震える肩を抱いていた雫を除いて。

「雫、どうした？」

「わ、わたしが……」

雫の感情を悟る前、聞き出す前に、彼女はリビングから走り出ていってしまった。少しだけ呆気にと取られて、けれど誰よりも早く追いかけることができた。それに少しだけ安心して、けれど父さんを放り出してしまったことに自分を責め、どうしようもないジレンマにこめかみを押さえる。

玄関から外に出て、暗がりの町で雫を追いかけた。雫が泣いてる。走る理由はそれで十分。だけど、立ち止まる理由も十分にあった。まだ、今後のことは一切決まっていけないのだ。

でもきつと、戻ったら聖が、そしてそれ以上に父さんが怒るだろう。自分の感情が雫と家を右往左往しながら、それ以上に父さんたちの感情が俺を後押ししていた。俺を支えてくれたのはいつも父さんだったから、父さんを悲しませるような行動は取りたくない。父さんが褒めてくれる選択がどれか、きつと俺は間違っていないはずだ。

母さんが生きてたら、こんな俺をどう思っただろう。どう言ってくれただろう。父さんを救えと責めるだろうか。雫を救えと褒めてくれるだろうか。

「――父さんを頼むよ、母さん」

きつと今、懐かしんでるだろう。聖に見守られながら、俺と母さんが一緒にいた頃を思い描いているだろう。その過去への憧憬は、父さんに悲しみより慰撫をもたらしてくれるだろうと思う。

だから今は、十メートル先を走る、俺の恋人を追いかけていよう。そして言っただけなんだ、俺は君のことを好きでいる、って。

本当は、少しだけ思った。雫のせいじゃないか、って。でも、それは口に出さなかった、というのが事実の全て。確かに父さんは追い詰められていたけど、それは雫のせいじゃないんだって、ちゃんと自分に言い聞かせることができたからだ。

「雫ッ！」

だからこうして、名前を呼ぶことだってできる。応えてはくれないけれど、この声は彼女の耳に届いてるはずだ。

行く場所は多分決めてない。だから、帰るんだろうと思う。

閉ざされた玄関。小さく響き扉を揺らす、雫の音。

「なあ、逃げることないだろ？ どうした？」

「あ、あ……環くん、あのね、あの……」

震えた音は、しかし声になることはなかった。何を訴えたいか、こういう時に悟ってやれないで、なにが恋人だ。父さんを投げ出してまで来たんだ、絶対に雫の涙を止めてやらなくちゃいけない。

「どう、どうしよう……身体がね、震え、てね、止まらないの」

「声、聞けばわかる。ドア開けたらさ――」

その涙も拭ってやれるのに。

なすべきこと。ああ、違う。なしたいこと、だ。

「雫さ、何か勘違いしてないよな？」

「勘違い？ 何が？ 環くんこそ、勘違いしないで」

「……多分、当たってると思うけど」

そうだ、雫は思ってる。父さんがリストラされたのは、自分が俺達の家に近づいたからだ、って。それが勘違いなのかどうなのは、少なくとも俺が決めることじゃない。

でも、俺がどう思うかは、俺が決めることだ。

「隣さん、すごく、辛いよ、ね？」

「辛い、だろうな」

「うん……だって、環くん、が、辛そうな、んだもん」

言葉が途切れて、それでも一生懸命に話を続けようとする雫がこんなにも愛おしいというのに、俺は彼女の心情も察することもできなかった。今更悔いても仕方ないことも知りながら、それに対して言葉を返すことができなかった。だってそうだろ、俺は確かに、父さんの顔を見ながら、そういう顔をしていたんだから。

「わたしが、何かできる、かな、なんて考えたら、ね？」

目の前の茶色いドアを見詰めながら、相槌を打った。

「できること、なんて……」

雫は、それきり黙り込んでしまった。聞こえてくるのは、小さな嗚咽と、一匹の蝉の声だけ。

掛けるべき言葉、言ってやりたい言葉。考えたところで何かが生まれてくるとは思えなかったけど、必死に頭を回してやった。けど、そんな焦りが生み出すのは、頭を焼き切るような熱と、言葉にならない呻きだけだった。

「……いる？」

聞こえた雫の声に、声を大きくした。

「いるよ。雫の顔見るまで、帰れないから」

嘘ついた。雫の涙を止めるまで、帰るつもりはないんだ。

「……見るだけ、だからね」

嘘も方便、って言っているのかな。そうすれば、開けてくれると思っただけからさ。

開いたドアの向こうは、外と変わらない暗闇が落ちていた。星空や月、街灯がないから、もしかしたら俺が立つ場所よりずっと暗いのかも知れない。湿った空気は、真夏のそれと変わらないはずなのに、いつも感じていた「雫の家」よりずっと、不快なものだった。

「ああ、雫……酷い顔だなあ」

走ってきたからか、綺麗な茶色をした髪は乱れ、涙に濡れた頬は真っ赤になってぐちゃぐちゃだ。慌てて髪を手ぐしで整え、ハンカチを持ってない自分を呪いながら親指で頬を拭ってやった。溢れた涙に覆い隠されそうなほど、小さな顔だ。

涙は次から溢れてきた。止まりそうもなかった。

「環くん？ 見た、よ？」

「雫が掴んでるんだろ、袖」

玄関先で、少しだけ可笑しな戯れ。

髪よりずっと綺麗な茶色の瞳は、薄い赤に縁取られている。これがいっつも色に戻ったら、きっともう大丈夫。

奥に見えるはずのリビングは、まだ見えない。

「入っていく？」

「もちろん。雫の家は、好きだからね」

「……うん」

それでも雫は、俺のシャツの袖を離そうとしない。仕方なく雫を引っ張って玄関から上がりこんで、廊下の電気を点け、薄暗いリビングへ向かった。中身のない金魚鉢がそっと透き通っていて、雫と俺を映しこんでいる。

勝手知ったる、とまではいかないけど、キッチンは何度か使ったことがある。夏だけど、雫の為に温かい紅茶でも淹れてやることにした。泣き明かした日には、温かい飲み物がすごく沁みる。

砂糖はなし、牛乳を多めに。雫は、柔らかい味が好きなんだ。

椅子に座って膝の上で拳を作った雫は、ずっと視線を下げ、テーブルを睨むようにしていた。声を掛け、目の前にミルクティーを置くと、微かに視線が緩んだように思う。

「さ、飲め。落ち着くぞ」

「うん。ありがとね」

「何を言う。雫が淹れるって言ったんだ」

「言ってるじゃないよ……」

両手で持ったカップが少し震えて、波打った紅茶が零れそうにな

った。口に運んで小さく啜ると、雫は安堵するようにため息をつき、しかし震えは止まりそうにもなかった。

「おいし」

「雫ん家のパックはあれだな、なんか美味しくなるようにできてるんだ」

なんのことはない、安物の市販品だ。こう言っちゃなんだが、淹れる側の心構え次第、ってことさな。

「パックはね、誰が淹れても美味しくなるようにできてるんだよ」

「なんだ雫、俺を馬鹿にしたいのか」

「そ、そんなことないよ」

カップを持ったまま首を振る雫が可愛くて、思わず笑みを零してしまった。失敗したかな、なんて思ったら、雫まで笑ってるのがわかって、少しだけ安堵した。

ああなんだ、そうか。笑顔って、伝染するものなんだ。わかったのは、それくらい。

「もう、大丈夫？」

「わかんない、けど」

紅茶はもう、波紋を立ててはいない。

「震えは、止まったよ」

結局、どうして雫が泣いてたかなんて、曖昧にしかわからなかったけど、笑えるのならいいのだろうと思う。自責の念を抱いていたとして、それを解放する術なんてのは、当人が笑っていることくらいしかないのだ。

身体を横に向け雫を呼び、いつものように膝に乗せてやった。柔らかく締まったお腹に腕を回して、首筋に唇を落とすと、雫は小さく呻く。

「痕、付けていいよ……」

「どうするかな。あんまり汚したくないけど」

綺麗な肌だから、鬱血点なんて作りたくはない。耳元で囁いてやったら、雫は身体を竦ませて喘いで、お腹にある俺の手を握った。

「痕、つけて」

「……まあ」

それで雫が喜んでくれるというなら、つけてやった方がいいんだろう。

滑らかな肌。少し過敏になっているのか産毛が立っているけど、蛍光灯の灯りを受けて輝いているようだ。口付けると、ぴくんと跳ねた。思い切り吸ってから甘噛み、ゆっくりと離すと、白い肌に赤黒い印が刻まれた。俺の証だ。

普通のキスよりずっと生々しい、蠱惑的な行為。目に見える証を立てるという点で、ある意味究極的にも思える。

息をついた雫が、身体を預けてきた。

「わたし、環くんのもの？」

「俺もお前のもの」

「わたし達、えむなのかな？」

「どうかな」

どんな会話だ。二人して笑う。

膝に乗った雫の柔らかな髪が優しく鼻にかかる、誘い惑わすような、酷く甘い香りがした。少しだけ眩暈がしたのは、きっと気のせいじゃないんだろう。

「環くんのせいで悲しくて、環くんのおかげで立ち直れた。色々、教えてくれたね」

「悲しいの、嫌だろ？ ごめんな」

首を二度横に振ってから、その首だけで俺に振り返った。確信した、大丈夫だ。

笑っていた。元々表情豊かな雫だけど、その内から溢れるような柔らかい笑顔だった。それはそれは特別可愛くて、思わず頬が緩んだ。「まだ、完璧じゃないからね。まだ、一緒にいてね」

答えを口に出すのに迷いはなかったけど、敢えてそうはしなかった。その代わり、まだ言い募る雫の唇に、その甘い言葉と吐息を全て塞ぐように、俺の唇を重ねていた。

首、痛くなかったか？ 俺が感じたもの、雫も感じてくれたか？
「お部屋、いこ？」

唇を離れた後の雫は、少しだけ大胆になっていた。涙の痕は、もうない。

折れたのは、上腕骨の上部と、前腕骨の尺骨と呼ばれる部分らしいが、そんな名称を言われたところで意味など理解できるはずもない。結局のところわかるのは、腕全体をギプスで固定し、手首のみを動かすことでノートを取ることくらいはできる、ということくらいだ。それでも辛いのだから、板書が遅れるのは当たり前だとも思えた。

それでもそれが気に食わない人間がいる。一人の遅れはクラス全体の遅れに繋がる、などと学歴社会を素足で突っ走る優等生、四条美鈴様だ。

「雫さんのノートでは、役不足でしょう？」

「余計なお世話ですよ……」

「何か？」

睨みを利かせる四条さんに、雫は怯えたように萎縮することしかできない。まるで蛙だぞ、雫。だとしたら、腰に手を当てて尊大な態度を取るこの子は、蛇だな。

「特別に貸して差し上げます。理解できなければ私……先生に訊いてくださいな」

「なんだ、ケチだな」

「貴方だって、私に教わりたいたいなんて思ってもないでしょうに」
事実その通りだけど、それを口に出すのは些か憚られる。無理をしての厚意を受け取って嬉しいとも思えないが、それを無下にするのも失礼というものだ。

かといって素直に受け取るのも癪。反骨心といえはそれまでの、くだらないプライドだ。理由は相変わらずはつきりしないけど、四条さんに共感することはどうしてもできなかった。

四条さんの後頭部で、大きな赤いリボンが揺れた。

「もうすぐ期末テスト……クラスに恥をかかせるわけにいきませんの」

「そんなら黒田にでも貸してやってくれ。あいつだろ、平均点下げてんの」

なんなら千円賭けてもいい。持っていないけど。

しかしそんなことはお構いなし、四条さんはその切れ長の目で俺を睨む。やれやれと言いたくなっただのは、多分俺が雫と同じく「蛙」だったからだろう。美人が怒ると怖いって、どうやら迷信の類じゃないらしい。

大体、勉強が遅れてるわけじゃないんだ。四条さんにはこの言葉を盛大に送りたいと思う。

小さな親切は大きなお世話、ってね。

「不服でして？」

四条さんの問い掛けを受け、俺の机に広げられたノートの束を見回した。板書の早い科目である数学、古文、世界史と日本史に、化学なんかも入っている。

確かにこれを借りれば授業の遅れくらいは取り戻せるんだろうけど、

「やっぱ遠慮しとく」

「な、なんでですか？」

珍しく狼狽した様子の彼女からは、転校初日の激昂が思い出された。そういえばあの日も、らしくもなく感情が昂ぶった様子だったな、なんて、昔のことのように懐かしく思うのだった。

彼女にしてみれば、自分の厚意を拒否されるのが信じられないんだろう。そういう風に生きてきたんだと思う。

「俺、頼れる人がいるし」

俺の視線に気付くと、四条さんはその細く整った眉を八の字に曲げた。指差し、懐疑的に俺を睨む。

「頼れる人、ですか？」

「頼れる人」

蚊帳の外になりつつあった「頼れる人」は、まだ状況が掴めていないらしい。俺の隣の席で、俺と四条さんの遣り取りを複雑そうな目で見つめていた。

「それにだな。教科書見れば、多少の遅れくらいはどうとでもなる」

「それは、そうですが……」

「大体、俺のこと嫌いなんじゃなかったの？」

「嫌い」と「受け付けない」じゃ天地ほども違うんだろうけど、敢えてそう言っておいた。いずれにしたって、彼女が俺に近づかない理由としちゃ十分すぎるほどだ。

だけど、そんなに簡単なものじゃないらしい。声を荒げて、四条さんは訴えた。思わぬほど必死な視線だった。

「わからないことつ、がつ！……」

でも、すぐに消沈した。平静を装っていたのは普段で、その実昂ぶった感情というのは本音でなく、戸惑いだった、ということか。

「わからないこと……怖いでしょう。私だって、好きで……」

ああ、彼女も同じだったんだ。共感できる部分は、決してないわけじゃなかったんだって、あのシンパシーは嘘じゃなかったんだって、少しだけ安心した。

生理的に受け付けないなんて、所詮自分に対する言い訳でしかないんだ。或いは未知に対する、だろうか。

好きで避けてるわけじゃない。でも、避けざるを得ない何かがある。確かにある。

「悪い。でもノートは遠慮しとくよ」

「……そうですか」

「自分で何とかする、っていうのがどうもマイブームみたいで」
自分でも下手な言い訳だとは思ったけど、強ち嘘ってわけでもない。

そんな冗談に、四条さんは俺に対して、初めて笑顔を見せてくれた。上から物を言う普段の態度からは想像できないほど、可憐な笑

顔だ。

「おかしな人。雫さんにぴったりですわ」

「それ、どういう意味……」

かくして雫の訴えは鮮やかに無視され、四条さんはノートを回収して自分の席へと戻っていった。細い肩は小さく震えていて、どうも俺の冗談がつぼに入ったらしい。お嬢様の笑いのつぼというのは、俺みたいな一般人には理解できないところにあるみたいだ。

残ったのは、少しだけ機嫌のよくなった俺と、据わった目の雫だった。

「環くん、嬉しそう」

「いや、まともな会話って初めてだからさ」

こういう時は、下手に否定するより、真つ当な理由をつけて認めってしまった方がいい。雫との付き合いで嫉妬されることは滅多にないけど、それがその中で学んだことだ。

しかし、雫と四条さんもまた、馬が合わないという事実もある。

「四条さん、綺麗だもん……」

「あいつには絶対惚れん。誓っていい」

笑顔に見惚れたのは確かだけど、それが恋に発展するかと問われれば、確実に否と答えられる。戸惑いはあるし、理由もわからない。ただ、どれだけ言い繕ったところで、受け付けない何かを四条さんが持つていることに変わりはない。今、少しだけ近づいた距離の中にも、堅固な壁が存在する。

雫は少し頬を膨らませ、そっぽを向いてしまった。お前、いくつだよ。

「雫、キスマーク見えてる」

「ええっ？」

つい昨日俺が首筋につけたばかりのキスマークは、小さなキヤミソールの肩紐と共に制服の隙間から見えている。一日も経てば流石に薄くもなるけど、その白い肌に淡いピンクはよく目立った。

「……そうだよ、環くんはわたしのものだもんね」

呟いた雫は、はっはっはと豪快に笑った。それでも声は小さいままなんだから、このクラスでの在り方、立ち位置に慣れきっているんだろう。

「うんうん、特別に許してあげるよ」

「偉そうにすんな」

脳天に軽くチョップをしてやったら、涙目になって俺を睨んだ。俺と雫の立場の違いに関して学ぶ気はないらしい。対等、と言いたところだけど、雫の気の弱さはそうそう治るものじゃない。

窓から注いだ陽光に目を細めた雫は、すぐに機嫌を直した。今日も暑いけど、開いた窓からは微かに風が吹いている。

「真夏日って割に涼しいな」

「うん。きもちいい風が吹いてる」

「……間延びした女の子の言葉って、なんか可愛いよな」

「そ、そおかなあ？ き、気をつけてみようかなあ」

それは流石に狙いすぎだ、なんて笑うと、雫は少しだけきょとんとした後、同じように吹き出した。

まだ何も解決したわけじゃない。でも、空ばかりは憎らしいほど青く、そんな蟠りも馬鹿らしく思えて仕方なかった。雫の小さな笑い声は俺の声に掻き消されてしまうけど、その笑い顔だけは、いつまでも心に留めておこうと思う。

いつか消え行くもの、だとしても。

9話

めざめて中の人

夏になると、油彩や水彩の色が高温多湿、日光により褪せてしま
う為、暗く乾燥した場所に作品を置くことにしている。学校にそん
なスペースはなく、つまり作品は各自持ち帰っている、ということ。
俺も早紀も例外でなく、部屋にはキャンパスが不器用に置いてあ
る。俺の部屋にはエアコンがなく、だから常にリビングに置くよう
にしていた。聞いた話だが、早紀の家には作品用の部屋があるらし
い。意外にお金持ち。

美術品はケアしなければ逐次劣化していく。時間は余りない。

どうしても、というのなら、キャンパスを倒してノートに書く感
覚で描けばいい。でも、妥協はしたくない。

今日は、早紀にその辺りのレクチャーを頼んでいた。雫にはまだ
見せたくないの、彼女はリビングで父さんと話してもらっている。
聖がいらないのを残念に思ってたみたいだけど、父さんの為に逢坂イ
ンダストリーに交渉に行っているのだから仕方ない。

「んー……動かないのは腕だから、肩で描く、っていうのもありか
な」

「肩で描く？　なんか、いまいち感覚がわからんけど」

肩だけなら動かせなくもないが、それだけで絵が描けるとも思えない。腕全体を使って大まかに描き、手首と肘で細部を描き込んでいく、というのが――いかにも素人テクではあるけど、今までのやり方だから、肩なんて使ったことがない。経験のないことには感覚がついていかない、というのが人間というものだ。言い訳してる場合じゃない、というのもわかってはいるんだけど。

早紀が、クロッキー帳をイーゼルに置いて見本を見せてくれた。左手を右肘に添え固定した上で、その上を滑らせるように肩と手首の動きだけで見事な絵を描いていく。

出来上がったのは、机の上に置いてあつた教科書や筆記用具のスケッチだ。

「うわ、すげえ……ほんと肩だけで描けるんだ」

「表現の幅は、上手くなればほとんど変わらないと思う。全身使って描く人もいるくらいだから」

俺が体の動きを最低限に絞ろうと思うと、恐らく動くのは肘だろう。早紀がしたように添えた左手の上は、しかし滑らせることなく基点にしてしまうはずだ。

「どうか。あと彩色だけみたいなものでしょ？」

椅子に座る早紀の後ろに立つ俺は、腕を組んでそのイーゼルの上を睨んだ。このイーゼルは、早紀が今日持ち込んだものだ。

彩色には主に手首のみを使うことになる。しかしそれだけでは確実に「大胆さ」が消えることになる。素人考えに通じるのは素人技術、手首だけでは繊細な動きしかできないというのが正直なところだ。

早紀ならば、なんて考えたところで、それで出来上がるのは「早紀の作品」だ。望まれるのは、それじゃない。

「やるしかない、んだろなあ」

「そう、やるしかないの。こんなレクチャー、最初から意味なんてないんだから」

だとしたら、荷が重い。

でもそう、荷は重いほどに実感が伴うもの。やり遂げた後の実感は、背負う責任の重さに比例するということも、ちゃんと知ってる。拙い技術でも、やれないことはない。そういう状況なんだから、やらない理由もない。早紀が「なんとかする」って言ったのは、もしかしたら“俺を”なんとかするってことなのかも知れないんだから、期待には沿わなくてはいけないだろう。

ただの自意識過剰かも知れないけど、思い込むこともたまにはいい。

「じゃ、早速始めようか」

立ち上がった早紀に代わり椅子に座ると、彼女の温もりが伝わってきた。それだけでなんとなく彼女の技術まで伝わった気になるから、我ながら簡単なものだ。鉛筆を持ち、キャンバスに向かい、まだ描きあがっていない部分に手をつけていった。

期限は、あと一週間。

デッサンは早紀がいるうちには終わらず、結局自分の力のみで完成させることになった。入部からまださして時間は経っていないというのに——というのが言い訳にしかないこともわかっていて、せっかくだからと昼食を食べていくことになった早紀を連れ立て、一階のリビングへ降りると、既にその準備は進んでいるようだった。

聖が不在ということで、今日の当番は聖ということになっている。彼女の手料理は——腕は聖とまでいかなないものの、本当に美味しいので、正直なところかなり楽しみだ。愛情の差、だろうか。

苦笑いを早紀に不審に思われ、手を振って誤魔化したところでリビングのドアから父さんが出てきた。

「今呼びに行こうと思ってたんだ。もうすぐできるから、って」
「うん、いい匂いがしてる」

笑いながらドアノブを押さえ、父さんは早紀をリビングに招き入れた。紳士な態度に、男慣れのしない早紀は紅潮していて、実に初々しい反応だ。

キッチンには、黄色のエプロンをした雫の後姿があった。聖も使っているそれは、生前母さんが使っていたものらしい。エプロンをして料理をしてくれる女性というのは貴重なもので、雫からは普段感じるこのない母性を感じていた。或いはそれは、エプロンの影に本当の母さんを見ているから、だろうか。

母さんのことをほとんど覚えていないのに、その理由がわからない。当時五、六歳程度だったというのもあるけど、その程度に成長していれば多少覚えていることがあるべきなのだ。

意識を失ったあの時、俺は母さんのことも失ってしまったんだろうか。

赤い炎。黒い森。藍色の、それなのにやけに明るい空。渦巻く風に巻き上がっていく灰は、十メートル上空で塵になって消えていく。「環君？ どうしたの？」

「……なんでもない」

なんでもない、という割には、シャツの背中がやたらとベタベタ張り付いて不快だ。隠し事の下手な自分に、苦笑いしか漏れてこない。

「座ったら？」

返事はせず、代わりに早紀の向かい側に腰掛けた。彼女の隣に座った父さんは、少しだけいつもの余裕を失っているけど、それを赤の他人に悟らせるような失態はしない。俺だからわかる、その焦燥感。

情けないけど、聖に縋った。早く安心させてくれ、って。結局のところ、父さんが安心する為には、俺がそうするしかないのだ。仕事を見つけてくれる、という以外に、その方法はない。

「雫、今日のメニューは？」

「えとね、海鮮春巻きと、あと麻婆豆腐。えびが安かったんだー」
言動が主婦染みて泣けてくるけど、そういうところに気を遣える女の子の方が一緒になった時にいい家庭を築ける。気が早いけど、雫以外の女が俺と一緒にいるところは想像できないんだ。

幸せだ、そう胸を張って言うにはまだ早いと思う。だから、今は日々を積み重ねていきたい。

「八千代さん、お料理得意なんだ」

「あ、えと、はい。外食したら、お金がたくさんかかるから」

「……変なこと訊いちやったかな」

親がいないことを共通項とするのは、きっと悲しいことなんだろう。気を遣われても少し困るし、かといって無神経に訊かれるのも気分が悪い。他意などなく、家計が助かるからという意味でそれを言ったのに、早紀はそこから雫の孤独を感じ取ってしまった。

困ったように笑った雫は、箸を使つてフライパンの中を掻き混ぜた。

少しだけ、空気が白んできた。容赦のない陽射しと共に踊る風が、奇妙な湿気を食卓に運ぶ。

どうしても拭えないものがある時、それはどうしたら消化できるだろうか。結局のところ、全て飲み込むしかないのだ。全て飲み込んで、それが喉元を過ぎた時、その熱さを忘れることを願うしか、残されたものに用意された選択肢は存在しない。

まだ熱いよな。覚えてないけど、父さんを悲しみに晒すそれは、本当に触れられないほどの熱を感じるんだ。だけど、その熱が悲しみなのか、いまや理解なんてできない。

早紀にだって事情はある。消化できないから、雫に対して快い態度を取ることができない。雫と早紀の関係は、酷く歪だ。数々の死に絡んでいるのが、果たして雫なのか早紀なのか、二人共わかつてはいない。二人共、自分のせいだと思っている。

死は様々なものを運ぶ。そこに貴賤はなく、大小もない。そのはずだった。

「母さんが生きてれば、苦勞かけなかっただろうね」

「父さん？ 何、言ってるの？」

だから少しだけ信じられなかった。その言葉は、弱音にしか聞こえなかったから。

何も言わない早紀の視線は、虚空へと消えている。

死が運んだものは確かに大きかったけど、父さんはそれに負けずに生きてきた。俺はずっと見てた。雫や早紀みたいに——ああ、わかった。

俺が一番、受け入れられていないんだ。だから、父さんや雫、早紀の間に不等号を敷いてしまう。死によってもたらされた悲しみに大小なんてあつてはならないはずなのに、それを図式化してしまう。「環君？ どうしたの？」

「い、いや……なんでも」

いなかったことになってできない。ただ、心の中に棲み続ける母さんを、確実に大きな殻で覆っていた。

「父さん、心配しなくても大丈夫だよ。母さんは確かにいた方がいいんだろうけど、父さんだけで十分——立てるからさ」

余裕がなくなってるんだろう。嫌なことがあつて精神的に不安定になると、誰だって幸せだった頃のことを思い浮かべる。ただそれだけ。

疼く心。俺と二人じゃ、幸せじゃないのかな？ 完全じゃないと、駄目なのかな？

言葉を失くした俺のことを気遣わしげに見る早紀が、少しだけ煩わしかった。何も言わない雫に、少し失望した。どうしたって納得できないことはわかってるのに、こんな風に八つ当たりのような感情を持て余す自分に、嫌気が差した。

雫が昼食を運んできたのは、それから十分後のことだ。取り繕うように「美味そう」と口にした俺の笑顔は、上手く作れていただろうか。

「たくさん食べてね。お昼にしては重いかも知れないけど……」
「いやいや、いいよ。昼って、一番豪勢にするんだろ？」

確か聞いたことがある。人間の一日を支えるのは基本的に朝食や昼食、終わりを飾る夕食を一番豪勢にするのは間違っているんだそう。

まあ、そんなことは一切気にせず、雫の料理は好きだから関係ないんだけど。

誤魔化した感情を白いご飯と一緒に飲み込んで、無理矢理に笑顔を引き出す。きつとそれが、俺にとって、早紀や雫にとって、そして父さんにとって、何よりの救済になるだろうから、いつまでも苦い顔をしているわけにはいかないんだ。

「早紀、食べないの？」

「あ、ううん。いただきます」

「ど、どうぞ。お口に合うかな」

期待と不安半分ずつ、だろうか。自分が食べるのも忘れて早紀を見詰める雫の顔は、少しだけ紅潮している。

「雫ちゃん、すまないね」

「い、いえ、楽しいですから。一人で作るより、ずっと」

雫の笑顔は、俺とは違った。その自然な表情に少しだけ嫉妬して、春巻きを一口放り込んだ。熱い海老が口の中で弾けて甘い香りが広がると、飲み込んでしまうのを勿体なく思う。

美味しいものを食べると元気になる。強ち嘘というわけでもなさそうだ。早紀も箸が進むみたいだし、父さんの顔から焦燥感が消えていくのを感じる。

「相変わらず美味しいなあ、雫の料理」

「そうかなあ？ そんなに特別なことしたつもりはないけど」

「八千代さん、どうやってお料理勉強したの？」

早紀の疑問に、雫は箸を止めた。考え事をしているみたいだけど、それがどういふ感情なのかわからない。ただ、何かを思い出す時、こんな表情をするんじゃないか、とだけ思った。

「色んなレシピを見てお勉強しました。すごく、美味しいのが作れるんですよ」

雫はそれだけ笑い、再びご飯に箸を伸ばした。

父さんには心当たりがあるのかな。雫のことそんな風に見て……そう、雫のことを俺以外の人間が理解していることを、少しだけ悔

しく思った。それが父さんじゃなかったら、きっと後で雫を滅茶苦茶に抱きしめてやるんだ。

しばらく無言の時間が流れた。箸が食器を叩く音と蝉の声、息遣いは微かなはずなのにやけに色づいて、風の音より空気が軋む音が沈黙を彩る。今日も真夏日、温かいご飯を食べていると汗が噴き出てきた。

作品については、午後はやらないことにしていた。時間はないけど、一日中早紀と一緒にいたら、雫が妬いて拗ねてしまう。

食器を洗い終えた雫と早紀が食卓に戻り、さっきまでの空気は全て払拭した後に談笑を重ねていた。全てを拭い去ったかどうかは疑問が残るけど、少なくとも皆が笑えているのだから問題はなく、何より父さんの笑顔が戻ったことに安堵を覚えた。或いはただ堪え溜め込んでいるだけなのかも知れない。そうであるとすれば、俺にはまだ父さんを救う資格なんてないだろう。

何をさせてはいけないか。悲しませることよりずっと、無理をさせることの方が罪深い。

「それでね、黒田君と環くんが突然野球拳始めちゃって」

「環がそんなことするなんて……黒田君って子は、よっぽどバイタリテイのある子なんだろうね」

「というか環君、それはどうかと思うわよ？」

三人に共通する話題といえば、俺のこと。突かれるのはわかっていたけど、雫がこんな話好きだとは思ってなかった。

まあ、楽しければいい。黒田の評判はもつとどうでもいい。

「結局ね、黒田君がその……ぱ、ぱんつと靴下だけになっちゃって」

「あれは笑ったな。あいつじゃんけん弱いなのって」

「それ以前に、どうして真っ先に脱ぐべきはずの靴下が残ってるかが疑問だわ」

早紀は手厳しいな。確かに美術部は女の園だから馴染みのない遊びだろうけど、女を顧客にしているということでは張り切る気持ちもわかって欲しい。黒田のノリの良さには驚かされるばかりだ。

しかし、裸靴下というのは、女がやってこそだ。あれはそそる。

「環くんがいやらしい顔してる……」

「なんか、話を聞きたびにどんどん印象が変わってくね」

そんな中で一番酷いのは、温かい目で俺を見守る父さんだと思う。何だよ、その「大きくなつたね」と息子の成長を喜ぶような視線は嬉しくない。確かに昔からそう目立つことをせず手段に紛れ込むタイプの男だったけど、ここに来て価値観が根こそぎ崩されてしまっている。それが良化か悪化かはわからないけど、少なくとも教室で野球拳をするような変化ならない方がましだ。

「環君、八千代さんとどんな話するの？」

「どんな？ えーと——」

二人のこと、学校のこと、私生活のこと、とにかく二人でいる限りは何でも話すし、隠し事も滅多にしない。

「環のこと、何でも知ってるぞ」

「環くんに訊かれると、断れないんですよ」

「二人共、すごく似てるから。なんとなく、感覚的に。それに、私とも……」

感じていた。

「確かに、早紀には環と通じるものがあるよな」

「ええ？ でも、性格とか全然似てないよ？」

環だつて気付いてるはずだ。四条さんや聖、早紀——黒田を加えてもいい、皆に、自分と似たような部分があること。性格や教養の変化によつて変わることはない、それは人それぞれが持つ「イド」の顕れにも似ている。

否定したい。その気持ちに正に、四条さんのそれに対する自分の感情を肯定している。俺だつて時折そう思う。環もあるはずだ。自分は特別な何かを持って生まれてきた、特別な人間だ、と。

少しだけ窮屈に思い、腰を浮かせて椅子を引いた。引き摺った音は、蝉の声を一瞬だけ掻き消す。

少しだけ嫌悪しているのが見て取れる。早紀の視線は、テーブル

へと向かっていた。

「四条さんってさ、俺達のことお似合いだって言っただろ？」

「うん……貧相って言われた……」

覚えてたのか。雫も結構執念深い。

「聖が言ってた、『見える』っていうのがそうなんじゃないかな？」

「わかんない。でも、そうかもね」

その笑顔に、少しだけ安堵した。隣に座る雫から伝わってくる熱は夏の暑さに負けず、だけど不快にはならない、雫だけが持つものだ。多分、俺にだけ伝わる。

繋がっている部分があるから、俺達是一緒になった。今でこそそんなことじゃ揺るがなくなっただけど、知り合ってから時間が短いのは、そういうことなんだと思う。だから或いは、早紀という可能性もあつたかも知れない。

「不思議な場所だね、ここは。環が変わったのも、そのせいかな？」

父さんの言葉は少しだけ耳に残り、その後に猛烈な吐き気を催した。だって今のは、明らかに変化を喜んではなかった。父さんが、おかしくなってる。今日の父さんは、その姿勢や言葉の調子、表情に柔らかさがない。

笑顔を上手く作れない父さんなんて、今まで見たことがなかった。作り笑顔に失敗した時に、人は酷く不細工になる。それは時に、苦悶の表情にも似ていた。

悔しいのかも知れない。父さんと接する時間は変わっていないのに、俺を変えたのは雫や早紀、聖だ。会ったことのなかった人達が自分の子供を変えていくのを素直に喜べないでいるのは、父さんらしくないのもわかってる。

似ているのは、父さんと俺だって同じだ。互いに離れられないから、そういうことまでわかってしまう。

次の瞬間、椅子から崩れ落ちる父さんを支えられたのも、多分そのおかげだろうと思う。

「父さん？ 父さんッ！」

頭の中が少し熱くて、思考を奪われていくのを感じる。次第に白
んでいく意識の中で必死に父さん呼びながら、俺は声を掛けてく
れた誰かに酷いことを言ってしまった。耳には残らなかった俺の言
葉は、その人に何を残しただろう。

「環くん——」

「うるさいッ！」

「——っ」

目に映るのは、瞼を固く閉ざした父さんの顔だけ。苦しいはずな
のに、どうしてか安らかな顔をしている。

倒れたのはどうしてだろう。考えてすぐ、答えに辿り着いた。あ
あ、そうか——

「お前のせいだろ！……、さつさと失せろよ！この——」

叫んでからも、その言葉に疑問の一つも覚えなかった。つい数秒
前まで笑い合っていたのに、確かにそう、思ってたんだ。

父さんが倒れたのは——

雫のせいだ、って。

聖が帰った時、そこには焦燥する俺と、意識のない父さんしかい
なかったそうだ。

救急車を呼んだ聖は、とりあえず俺が——或いは父さんや本人が落
ち着くようにと応急処置をしてくれた。多分それ以外の何をされた
って落ち着けなかっただろうから、聖の判断は正しかったのだろう。

診断は、ストレスによる狭心症。

心臓の筋肉が必要とする酸素量に見合う血液が供給されず、心筋が
虚血に陥り胸痛が現れるという、虚血性心疾患の一つ、という説明
を聞いた。最悪の場合心筋が壊死し、心筋梗塞へと繋がるらしい。
医者の疑問は、そのまま俺の心を絞り上げるように責め抜いてきた。
発作があったはずなのに、どうして誰も気付かなかったのか、とい
うものだ。

狭心症であれば、顔が蒼白くなったり冷や汗が流れたり、目に見

える症状はいくらでもあつたはずなのだ。気付かない方が鈍いか、患者が我慢強いのか、或いは安静狭心症——睡眠時から朝方にかけての発作、その多発か。

いずれにしたって、父さんが危ないってことを理解しろ、それだけ言われた。

全ての検査が終わり、病院に運ばれてから二日が過ぎようとしていた。

学校へは行くことにしている。聖と、何より父さんの進言があつたからだ。きつと父さんだって辛いだろうけど、学校は休むべきじゃないと思えたのは、他の誰でもなく本人の言葉だからだった。

ずっと傍にいてあげられないのが何より辛くて、父さんをこんな風に弱らせた「何か」が憎くて、そのせいで言葉が出てこなかった。

今日も学校には来たけど、この空気には少しだけ辟易した。こんな明るい空気は、今浴びるべきものじゃなかったし、隣の空席が何よりも辛かった。

どうして雫は傍にいてくれないんだろう。

ああ——納得も何もできやしないという以前に身勝手ではあるけど、全て俺のせいだ。雫が俺を避けたんじゃない、俺が雫を遠ざけた。信じていた人に裏切られるというのは、どういう気持ちなのだろうか。

それでも、雫に会いたいとは思えなかった。会ったら、また酷いことを言ってしまいそうで、怖かった。

「珍しい。去年も同じクラスだったけど、彼女皆勤だったのに」

真面目というよりずっと、不器用だったのだろう。彼女の資産がどこから来ているかは知らないけど、無駄なお金は使いたくないと言っていた。

それを今、俺はさせているんだ。

「喧嘩かな？ 思春期の女の子は敏感なんだから、大事にしてあげなくちゃー」

少しだけからかうように俺の肩を叩くマキは、多分気遣ってくれ

たんだろ。だけど曖昧な苦笑だけを返して、彼女と目を合わせる
ことができなかった。目が合ったら、俺と雫の間に何があったか露
呈してしまいそうで、それを恐れる臆病な自分が憎くて、俯いた顔
が上がらなかった。

雫の机を見るのも怖い。いつもの笑顔や控え目な自己主張、小さ
な身体を精一杯使って送られる温もりが、そこから伝わってくる。

「伊藤君、何か知ってるの？」

「……色々、あってさ」

ナオの言葉にも、素直に答えることができなかった。誤魔化して
何が変わるわけでもないのに、責められるのが——というより、自
分がしたことを認めてしまうようで、それが怖かった。

最低、なんだろ。認められるわけがないけど、あれだけ真面目
だった雫がこうして学校を休んでいるのを見てしまうと、彼女にと
つての「伊藤環」がどれだけのものだったかが、痛いほどにわかっ
てしまった。

求められるのは心地良かった。だから、心にある空虚も一入だ。

「不器用なのね、可愛いわ」

「ちよつと黒田君、茶化さないでよ」

あほか、なんて思ったけど、本当にあほなのは俺だ。気持ちの悪
いお姉言葉を咎める気にもなれなかった。

「なんつーかも、なあ？」

「なあに？」

「ナオさん？　この子、最低ですわね」

そうやってはつきり言ってくれた方が、すつきりする。

けど、認めてしまうということはつまり、雫を否定するといふこ
と。今まで付き合ってきて、雫を見てきて、それだけはできそうに
なかった。

「何がわかるんだよ」

「あ？」

「黒田さ、お前に俺らの何がわかんだよ」

ああ、何もわかりやしないだろう。

わからないから何も言うな、それがどれだけ愚かしい発言かはわかってる。それだったら、批評家なんて職業は存在していない。

「お前、マジで言ってる？」

だから、二の句が継げなかった。

俯く俺に、俺の席に集まった皆が視線を集めた。それがどんな視線か、それを合わせなくとも簡単に察することができる。

軽蔑、或いは憐憫だろう。

「私も今のはどうかと思うな」

「だよな、ナオちゃん」

「うん、でもナオちゃんはやめて欲しい」

「……あ、そう」

茶化すように話しているけど、その実俺の発言を心から責めているのがわかった。

自分でもそれが最善とは思えなかったけど、少なくともその瞬間だけは、間違っているとは思ってなかったんだ。多分、それが今の俺だ、ということなんだろう。

擁護して欲しいわけじゃない。罵って欲しいわけでも、責めて欲しいわけでもない。かといって、放っておかれるのも苦痛だ。自分で勝手に我が侬で、自己中心的で、本当に救いようがない。

「伊藤君さあ、喧嘩なんてそんな難しい問題じゃないよ？」

どうしろって言うんだ。俺、今の気持ちに素直にはなれないし、父さんの病気を肯定することもできそうにない。

雫を心から——こういうのも変ではあるけど、許せそうにもないんだ。

「仲直りしたかったら謝るだけ。どっちが悪いかなんて二の次でさ」「それともお前は、八千代が悪いとでも言うつもりか？」

喧嘩両成敗、なんて子供染みた屁理屈を肯定するつもりはないけど、理性では理解している。顔は上げられない。

「伊藤君は、自分には全く悪いところはない、って、言いたいのか

な？」

悪くないと思えたら、今こうやって俯いてたりしない。血が滲みそうなほど、手を握り締めたりしない。

だけど、雫の顔が脳裏から離れない。笑った顔。怒った顔。喜んだ顔。ああ——そんな顔しないでくれよ。そんなに悲しそうな顔、見てるこっちが辛くなるだろ。そんなことを思い描いたら、目の裏が熱くなった。

ため息一つ、三人は肩を竦めた。何を言っても無駄だと思ったのか、それとも俺が何を思っているのか理解したのか、もしくはその両方だろうか。

「一人で悩む方が楽、ってこともあるけどさ」

「私達、伊藤君がいなかったら、雫のこと何もわかんなかったんだ」「ナオの言う通りだよ。こういうのも妙な話だけどさ」

照れ臭そうに頬を掻いた——俯く俺には見えちゃいないけど——マキは、笑い声で言った。

「感謝してるんだ、君には」

誰より雫を知っているって思い上がって、一番知っていないながら何より傷つける言葉を吐いてしまった。

彼女を知る、知ろうとする人間を作ったのは俺じゃない。雫本人だ。背中を押すくらい、俺じゃなくてもできる。

「感謝なんて、大袈裟だよ」

こんなことを考えてしまう時点で、俺はもう駄目なんだろう。

「別に俺じゃなくてもよかった」

破裂音に似た波が、空気を劈いた。平手で叩かれた頬に痛みを感じるのには、それから少しのタイムラグを要した。集めた視線が気になったのは、多分弱い自分が恥ずかしいからだと思う。

「そんなこと言ってさ、そんなに自分が可愛いのか？」

「八千代とお前、どっちが哀れだかわからんな」

精神的に参ってる。言い訳にもならないけど、冷静になってからずっと考え続けていた。雫にとって俺というものは必要不可欠なも

のであって、何より頼れるものだ。多分、間違いはないと思う。俺にとって必要な人というのは、頼れる人というのは、雫ではなかった。それを肯定するつもりもないけど、やはり父さんという存在は、俺にとって大きすぎるものだ。たのだ。

その人が憂き目に遭っている時、俺は大切な人を氣遣うこともできなくなった。

「事情、あるならさ」

「……うん」

その相槌は、自分の声かわからないくらい小さな声だった。まるでその様子を、俯瞰で見ているかのようだ。

「話してとは言わないから。解決するのにさ、せめてもう少し頑張つてよ」

マキの懇願は、泣き声にも似ていた。

顔を見ることはできないけど、ナオや黒田も、俺のことを見てくれているんだろう。

期待には応えなくちゃいけない。今の俺に必要なのはそう――顔を上げる勇氣だ。

「まだ割り切れないんだよね？」

「もう少し、かかりそう」

雫が休んでいるということはつまり、少なくとも嫌われてはいない、ということ。愛の反意は無関心だと、よく聞く話だ。

悩むことを辞めない。その代わり、善悪は置いておいて、答えが出たら会いに行こう。

雫の為というのはもちろん、今ここで笑ってくれる、マキやナオの為にも、だ。

……しかし黒田は、いつの間に四条さんの隣に移動したんだろうか。「哀れ」な俺が悪いんだろうけど、少し薄情だと思ったのだ。た。

美術部に顔を出すと、氣遣われることが多くなった。それは絵の

進行具合だったり、腕の具合だったりするけれど、総じて気遣いには変わりない。それが義務感が正義感か、或いは心配なのかはわからないけど、皆優しい気持ちを持っている。

早紀のこともそうだ。誰も、その沈んだ表情の理由を訊こうとしなかった。それは腫れ物に触りたくないという自分本位な考えでなく、確かに早紀を気遣ったものだ。

ああ、そして気付くのだ。

俺が傷つけたのは、雫だけじゃなかったということ。

雫の周りで起きる事故の内、死亡事故の全てに早紀が絡んでいる。それが偶然にしろ、今回父さんが病気になったことで、早紀も相当参ってしまったはずだ。それに追い討ちをかけるように、俺が口にした言葉。それは雫に対して言ってしまったものだけど、早紀の心にも確実に響いただろうと思う。

角を立てずに生きたいという理想、或いは信念にも似たそれは、父さんの生き方から学んだものだ。それなのに、父さんが倒れた今、こんなにも棘を突き出して生きている。

申し訳なかった。早紀にも雫にも、父さんにも。

「もう彩色入った？」

「いや、まだ。思ったように描けなくて、何回かやり直してるんだ」
それなのに、まだ俺は独り善がりに動いている。

腕が痛いというのを抜きにしても自分が傷つくのが怖くて、あれから一度も絵には触っていない。嘘をつくのは、何より嫌いだというのに。

「あと四日か……どうなるかな」

「早紀なら大丈夫だよ。心配ない」

「そうかな……環君が言うなら、うん、信じてみるよ」

今の俺でも、この言葉は信じてもらって構わない。早紀の作品がどれだけ素晴らしいものか、今まで見てきて身に沁みてる。あれだけ一生懸命やって、その上で早紀は問いかけてきたのに、どうしてそれに嘘をつけるだろう。

どうして、嘘がつけるだろう。雫がどれだけ俺を信じているか、わかっていたのに。

「環君が間に合わないと思うようなもないんだから、君も頑張つてね」

即答はできず一瞬の間が空いたけど、それを悟られるようなことはなかったと思う。

「大丈夫、最後までやるよ」

「四日であれを全部彩色しようと思うと結構辛いね……」

まだ俺は大丈夫だろうか。この感情、「罪悪感」は俺にとって、皆にとってどういったものだろう。

後押ししてくれるなら何でもいい。例え義務感でも、何もできないよりずっとマシだ。

「ねえ、環君」

「ん？」

茶色の木で作られたイーゼル——美術部の備品に立てかけたキャンバスに鉛筆を添えたまま、早紀の言葉を聞いていた。腕の痛みを堪えながらだけど、不思議と震えるようなことはなかった。

そして早紀もまた、その細い手には汚れた絵筆が握られている。

「私のこと、皆に聞いたでしょ」

何のことを言っているのかは、すぐにわかった。

「うん、聞いた」

「怖い？」

それでも、それにどう答えていいのかはわからなかった。

聖が言っていた。可愛い子だって。それがどんな意味かは今でもわからないけど、今ここで「可愛い俺」を演じなくてどうするんだ。取り繕った偽善はいらない。早紀を傷つける言葉も、今は不要だ。ただ、正直な気持ちがあった。多分これを言えば早紀は深く傷付くんだろうけど、嘘はつけそうになかった。

「……少し、怖い」

「うん。だよ。私も怖いもん」

キャンバスに淡い水色の油彩絵具を塗りこんで、早紀は小さく苦笑した。本当なら——それが苦笑であれ、笑える要素なんて一つもないんだろうけど、それでも早紀は気丈だった。

それはきつと、早紀を支える人間がたくさんいるから。

じゃあ……そう思ったら、どうしてか薄ら寒くなつて、思わず身体を掻き抱いた。川に落ちるよりずっと、その寒気は圧倒的なものだ。

「私より、怖いんだろうね」

「そう、かな」

「そうだよ。あの子のこと、私、よくわかるもん——どうしてもかは、わかんないけどさ」

早紀も感じていた。

俺と雫は一緒だ。何がどう、そういうのはなくて、ただ繋がっていた。理由もなければ因果もない、そういう類のものだ。

早紀も同じ。四条さんや聖とは違う繋がりを持っている。

「好き？」

鉛筆が、その軌跡をキャンバスに残した。黒というよりは、ずっと濃い灰色。

ああ、これだ。俺が欲しかったのは、水彩の淡いそれではなく、どこまでも深い、輝くようなこの色だ。

それはそう、“そういう気持ち”があるからなんだろう。だから、早紀の視線を受けても、はっきりと答えることができた。

——そう。俺は雫のこと、好きだ。

「そつか……そうだよね」

ああ、そうだ。

少しかだけ返事が遅れたのは、俺にまだ迷いがあるから、だろうか。いずれにしたって、この言葉は空に放たれ、早紀の耳に届いた。もう覆すことなどできない。

それはきつと、俺の気持ちが増定された瞬間。だからだろうか、早紀はそれから部活が終わるまで、一度も喋ることはなかった。

聖の部屋は、それでもいつも通りだった。整然として過ごしやすい、何よりそこにいると落ち着く、不思議な因子を孕んでいると思う。

俺の部屋は、少しだけ荒れている。絵の描かれたキャンバスが無事というのが、未だに不思議なくらいだ。いつもはメイキングしておくベッドも、シーツやタオルケットが乱れたまま。机の上は、憂さ晴らしに向かった教科書が置きっ放し。そこまで言うほどじゃないけど、「いつもなら」という言葉を使えばそれで済む程度の状態だ。

聖には、俺の“それ”が痛いほどに伝わっているのだろう。だからこそ、いつもの笑顔を絶やすことはなかった。

「でさ、絶対環って小学生ぐらいの頃苛められてたと思うのよ」

「あ？　なんで？」

「名前の最後に『ん』をつければわかるさー」

閉口する俺を差し置いてけたけたと笑う聖の、このいつもの笑顔。これが気遣いなのかどうなのか、いまいち判然としない。

「意外。聖って下ネタ言うんだ」

「言うよ。私だって女の子だもん、興味は津々ですよ」

雫や早紀みたいな女の子ばかりと付き合ってたから、今までに下ネタを平気で口にする女の子は知らなかった。それを口にしたら、聖は「幻滅しないでね」と伏し目がちに呟く。憂いを秘めた表情は美しさを孕むというけれど、聖は対象外らしい。

テーブルの上に置かれたコーヒーマグカップを持ち上げ、そつと中身を啜った。聞くに特製ブレンドらしいけど、コーヒーというよりはずっとチョコレートだ。甘いコーヒーと、苦味のあるミントがよく合う。

「ま、処女だけどね」

コーヒー噴いた。幸いなのは、聖の顔を直撃しなかったことくらいか。

「きつたないなあ。畳なんだから、気をつけてよ」

「お前はもつと発言に気をつける。そんなだから恋人できないんだよ」

「だいじょぶよ、環の前だから言うんだもん」

それは光栄と喋っているのか、微妙なところだ。「素顔を晒してくれる」という意味では、恐らく俺は聖の中で大きな存在になりつつあるんだろうけど、それにしても気安すぎやしないだろうか。

洗面所から持ってきた雑巾をコーヒーに濡れた畳に押し付けて、聖は笑う。ぼやくような俺への文句は、或いは戯れだろう。

「さつさかさ、と。うーん……臭い残りそう」

「悪い、っていうか聖にも責任はあるんだからな？」

雑巾が粗方茶色に染まると、聖は再び洗面所へ引っ込んでいった。それを見送って、ため息一つ。

あの人の前にいると、空回る自分を見詰めずにいられる。張った肩肘から、思い切り力を抜くことができる。そしてその笑顔が一度目の前からなくなると、それが一度に押し寄せてくるんだ。

雫、早紀への想い、罪悪という名の感情。消えていくはずのない好意が、それを消すのに反骨心を抱く。

半分ほど残ったコーヒーを口に含んだ。食道を通り胃へ溜まる温もりが、せめて冷めた心臓をも温めてくれたらいいのに。

聖はすぐに戻ってきた。

「環、ご飯どうする？」

「家で食べるよ。父さんもいるし」

「じゃあ、買い物行こう？」

反対する理由もなく、後しばらく休んだら商店街に行くことになった。聖と一緒に夕飯の買い物なんて、どれくらいぶりだろう。本当に主婦みたいで、最初の頃は驚いたものだ。

大げさかも知れないけど、聖のことは尊敬している。何を、ではなく、何もかもを、だ。骨を折られたのは彼女の責任じゃないと発言すること自体、彼女を責めることになるのかも知れないけど、そ

れでも敢えて言わせてもらえば、あれは確実にあの不良の責任だ。それどころか、聖がいなければ、今頃雫と早紀が酷い目に遭っていたかも知れない。

ぞつとしない想像をして、身震いした、

聖がいれば、色々なことに際して安心して行動ができる。聖を嫌いになれる要素なんて、一つたりともなかった。

どうしてここまで気にかけてくれるのだろう。考えたこともあった。

答えが、意外なところにあるとは知らずに。

「ねえ、環ん」

「……喧嘩売ってる？」

「じよ、冗談だよ。怒るなよお」

咳払いを一つ、改まった表情で聖は問う。ありふれた質問ではあったけど、それは聖の中で、最も大切なものだったのだろう。

「環はさ」

「うん？」

「神様って、信じてる？」

10話

めざめて中の人

展示会への提出期日まで残り二日となった今日になっても、雫の席は空のままだった。

いるだけで疎まれ避けられていた雫がいない。クラスメイト達にとって喜ばしいことであるはずなのに、それを喜ぶような人間は一人もいなかった。

恐らくだけど、マキやナオのおかげだろう。二人が雫を許したから、他のクラスメイトも、雫を疎むことの無意味さに気付き始めている、くらいものだろうか。

確実に歩み始めている幸せへの階段。どうしてもそれを阻んでいるのが、俺でなくちゃいけないんだろう。少しだけ失望しながら、一人類杖をついて窓の外を眺めていた。青い空と白い太陽、風はなく、校庭ではたくさんの生徒達がサッカーに興じていて、大きな喧騒を醸している。

いい天気、いい日和。晴れ晴れとした気分にはなれないけど、少なくとも暗鬱とするわけでもなかった。

その代わり、授業を大人しく受ける気にもなれない。まるで子守唄のような古典担当教諭の声が、耳の中を右から左へ突き抜けてい

く。

いつもいた、隣の女の子がいない。授業中、不謹慎にもたくさんのことを話した。授業が終わると、真つ先に俺を見た。いつもいつも、この教室の外に出て、隣にいてくれた。なのに、どうして。

そんな時に、空を見た。俺の空が、雫の空が晴れてくれるようにと。

——あれが真実かどうか、信ずるに値するかどうか、決めるのは俺だ。

だとすれば、俺は何を為すべきか。非現実的だし、何よりその偶像是過去に切り捨てたはずだった。だから、それが真実としても、素直に従う気にはなれなかった。

でも、救われる。雫が幸せになれる。

父さんは、何を望んでいるだろう。俺が雫を拒絶して、会って慰めてやることもできず、涙を見ることさえしてやれないでいる。誰が一番悲しいかなんてわからないけど、俺が一番愚かなこともわかってる。「あの時は頭に血が昇ってた」なんて下らない言い訳にしかないし、何より独り善がりもいいとこだ。

わかっていながら、何もできずにいる。父さんの病室に通い、少し青ざめた顔を見るたび、不安になる。不安が再燃すると、雫への疑念が再び心に燃え上がる。

聖。なあ、どうしたらいい？

だってさ、真実だったとしたら、余りにも救いがなさすぎるじゃないか。

授業の終わりは、いつもより少し早く訪れた。十二時四十分程度だろうが、時計を持たない俺じゃあ確かめようがない。

弁当を作ってくれた。朝の弱いはずの聖が、無理をしてまでそうしてくれた。

世話をかける。利己的でない善意などあるわけもない、なんて言

葉をどこかで耳にしたことがあったと思う。だとして、聖や雫が俺にしてくれることっていうのは、誰の為の善意だというんだ。

利己的。そう、俺は利己的なんだ。結局、父さんを失うのが怖いという、自分の気持ちだけしか考えてないんじゃないか。

わかってる。どうしたって、生き方なんか変えられないってこと。弁当の包みを開いてふたを外すと、彩の豊かな料理が目を楽しませた。和洋折衷、色々なメニューがいかにも弁当らしい。或いは、「聖らしい」とでも言うべきか。

「いただきます」

マキやナオ、黒田がいないこと、少しだけ残念に思った。

かといって、別にこの人に近づいて欲しいと思っただけでもないというのに。敢えてその理由を考えるなら、「クラスの為」くらいのもものだろうか。

目の前で視界を塞ぐ女の子の影が机にかかる。大きな白いリボンが、その艶やかな黒髪に鮮やかで目に楽しい。

「環さん、少しよろしくて？」

「……うん、なに？」

周囲を見渡した四条さんは、その視線が気になったらしい。

「少し、外に行きましょうか」

気が引けたけど、無理して近づいてくれたんだ。邪険にするにも気が引ける。これも、利己的でない善意の一つなのかな？

連れて行かれたのは、一度も行ったことのなかった屋上だ。昼休みに全面開放されているだけあって、そこにはたくさんの生徒が食事をしていた。

白い陽光が目にも痛い。喧騒もどこか遠くに聞こえ、それから逃げるように四条さんの背中を追いかける。クラスどころか学校中の人気者、四条さんじゃどうしたって人目を集めるけど、それでも追いかけてくるような無粋な輩はいなかった。

隅の真白なベンチ、下には駐輪場が見える。点々と絵具を落としたような木々が、少しだけ無機な色の学校に彩を添えていた。

「少し、暑いかしら？」

「そうでもない。四条さんこそ、あんまり焼きたくないんじゃない？ 女の子だし」

「ご心配なく、でも意外ですわ、貴方に氣遣われるなんて」

「そりゃ、俺だって一端の男だ、女の子に氣遣いくらいみせる。それに打算が含まれるかは、自分でもよくわからないけど。」

「こうやってベンチにハンカチを敷いてあげるのも、最初で最後だろうけどさ。」

「氣が利くのね」

「四条さんこそ、慣れてるな」

「それはそう、慣れてるんだろ。」

「名家とは聞いたけど、どんな類のものは知らない。ただ、この歳になると社交界にも出て行くことになるだろうし、そこで俺なんかじゃ及びもつかないような多様な氣遣いを受けているはずだ。」

「親の七光りとは言えない彼女だから、それを慕う人間は多い。俺には、ちよつと信じられない事実ではあるけれど。」

「お弁当、頂きましょうか」

「話は？」

「急かないで下さいな。そう長い話でもないわ」

「敬語が混じった、独特の喋り方をする。以前から思ってたけど、これがお嬢言葉ってやつだろうか。」

「そんなことを思いながら、包み直しておいた弁当を再び開く。」

「……あら、随分マメなのね」

「それを覗き込んだ四条さんの頭から、仄かに香る柑橘。四条さん相手に、とは思ったけど、少しだけ眩暈がした。」

「言葉に窮した俺を、四条さんは怪訝そうに覗き込む。」

「環さん？」

「あ、ああ……これ、お隣さんが作ってくれたんだ」

「親切な方もいるものね。それとも世話焼きなのかしら」

「聖の言葉が本当なら、その答えは「打算」だ。」

近づきたいから近づいてきた？ 肯定もできれば、否定だってできる。聖を信用してないわけじゃないけど、少なくとも全面的に信頼できるわけでもない。それを正直に話してくれただけ、信用に値するんだろうけどさ。

聖の言葉は真実だろう。だとしたらさ、雫、俺達どうなるのかな。

「いただきます」

その声に呼ばれて、俺はようやく箸を手にとった。隣の弁当を覗くと、意外に質素なもので、数秒考えてようやく納得した。女の子が人前で大食いはできないだろう。特に、四条さんみたいな人間は「それ、誰が作ってるの？」

「お母様。に、教わって私が作ってるわ」

「へえ……」

意外といえば意外だけど、彼女も努力家なんだよな。

でも、それを食べてみたいとは思わなかった。やはり「四条さんが作ったものだから」という、理屈も何もあったものじゃない、妙な理由が先行したからだ。

「ねえ、環さん」

「ん？」

不意の言葉は、几帳面に卵焼きを飲み込んだ後。箸を咥えたまま返事をする、四条さんは言い辛そうな表情だけを俺に向けていた。らしくもない。不躰な言葉なら、あんたの口からは飽きるほど聞いている。

「その、私にあんまり縁のない話だから考えたことなかったのだけど……」

「言いたいことがあるならはっきり言ってくれよ」

「ちよつとはこつちを慮ってくださいな！——だからその、雫さんのこと」

「……ああ、答えられるなら、答えるよ」

自分の弁当に視線を落としたのは、多分同時。でもその表情も感情も、恐らく正反对だっただろうと思う。

「彼女が初めてだわ。初めて、人を嫌いになった」

「そりゃ、幸せな人生だな」

皮肉のつもりだったけど、彼女は笑っていた。

「ええ、とても幸せでしたわ。だからこそ、周りに不幸があるのは許せなかった。事件、事故、私の目の前では一切起きて欲しくない。我が俣かしら？」

「我が俣、ではないな。誰でも思う」

幸せになりたい。幸せで在りたい。そうなれば、周りにそれを求めるのも当たり前の話だ。外環境から感染するような不幸だって、世の中には当然のように存在するんだから、周りに不幸があれば不安になるのも頷ける。

ただ、四条さんに関してはそうとばかりも言えないらしい。これが本当の、利己的でない善意、なのだろう。

「私は皆さんを幸せにしたい。私だけ幸せなのは、不公平でなくて？　そう思うのは、おかしいことかしら」

「その中に？」

「それは、少し違いますけど。私があの子を嫌い——受け付けられないのは事実です」

それにも理由がある。全ては聖の言葉通りで、不可思議なのにそれが根拠になつていて、まったく嫌になる。

「ですから、あの子にも進んで近づいた。怖くはなかった。だってそうでしょう？　私は、こんなにも幸せなんですもの」

「私の幸せを壊すことはできない、って？」

もちろんと頷いて、四条さんは苦笑いを零した。

今日は吉日だろうか、それとも厄日だろうか。この人のこんな表情を、俺は初めて見た。今までに見た、辛辣、憮然といった表情達とは全く違う、憂いの籠った表情だ。それは胸を締め付けられるような、それなのに優しい笑顔にも見える。

「悩みが人を育てる、っていうのも、初めて体験しましたわ。嫌味に聞こえたらごめんなさい——私、今までに努力して手に入らなか

ったものがありませんの」

「そら立派なこと。まあ、でも、それもありだろうな」

悩みはないにこしたことはない。雫を見てると、それがよくわかる。

雫は俺を育ててくれただろうか。恋愛は弱さばかりを与えてくれる。その反面、どこかに芯を持った自分を認めることもできた。

その芯は、どういうものだろう。強いだろうか、太いだろうか、簡単に折れたり、しないだろうか。それはそう、しかし全てにおいて単純なものだ。

「勉強すれば成績は上がった。練習すればスポーツができた。愛想を振りまけば、人気だって集まったわ。それなのに……」

「上手くいかないなあ。そりゃそうだ、相性が悪いんだ」

「それだけで納得できるもの？ 私は、順風が好きなの」

あんたが逆境を好きだって言うなら、世の信仰は今頃崩れ去つてるところだ。

「それなのに、貴方はいとも簡単に雫さんの心に入り込んだ」

「だろうね。そりゃそうだ、相性がいいんだから」

「……真面目に、聞いてください」

「至つて真面目だよ。全部、事実だから」

不愉快だろう、四条さんはその大きな目を細めて俺を睨んだ。雫よりずっと怖いそれに、俺は噴出しそうになった。だって、こんな時にも雫と比べてしまっている自分が可笑しいから。

相性はいいはずなんだ。だから、上手くいく。そんな単純なことが、どうしてできないのだろう。

「雫さん、私のこと、嫌つてるでしょう？」

「いやー……どうだろうね」

二択を迫られているのに、どうしてもその質問は曖昧に聞こえる。どうというのが「好き」で、どうというのが「嫌い」なのか、俺達の間には明確な線引きが存在しない。

俺のせいだった。それを雫に押し付けて拒み、俺は自己の保身に

走った。自己嫌悪というモノを通り越して、呪えるものなら呪ってしまいたかった。どうしたって、俺は俺自身を壊すことなんてできないのに。

「もう、駄目……あの子見てると、自分に自信がなくなっていく。貴方もそう」

「四条さんって、かなり正直だよな」
「虚構で好かれて、嬉しいかしら？」

わかんないやそれで幸せだとは思った。でも、諸々の理由はあれど、何より四条さんがそう思っていないんだから、言っただけ無駄だ。

「でもね、環さん。私は、やっぱり幸せが好きなの」

「……そう」

「貴方ならって、思ってますの」
難しい問題だ。だって、俺は一度拒んでしまってる。

覆す意思はある。ただ、覚悟がない。今更歩み寄って、俺が雫に何を言えるというんだ。それに、何より、雫に拒まれるのが怖いんだ。

「俺に何をしろって？」

「貴方が、じゃなくて」箸を膝に置いて、四条さんは俺を見据えた。
「貴方に」

「俺に？ 四条さんが？」

「ええ。私の幸せ、分けて差し上げます」

今度の笑顔は、晴れやかだった。自分のやりたいことを見つけたから、だろう。

羨望、或いは嫉妬という気持ち、俺の口を塞いでいた。「幸せを分ける」なんて荒唐無稽な話ではあるけど、真面目に聞いてしまった。

「どうかしら？」

俺のやりたいこと。

とても難しいことだ。でも、とても単純なことだった。

覚悟ができないのならば、意思だけでそれをできないものだろうか。四条さんのように、やりたいことを見つけただけで笑えるんだ。意思さえあれば、なんて甘いことは言わないけど、自分にできることを探せばいい。それは「やりたいこと」という願望とは違うものだけど、何か必ず、俺にしかできないことがある。

今、聖を信じた。その上で、自分が背負うものを自覚した。それはそれは重い荷物だけど、下ろすことはできそうにない。

「環さん？ 私、貴方のお返事が欲しいの。多分隼さんには、それが必要だと……」

「……ああ、そうか」

「へ？ な、何か？」

覗き込んできた四条さんの怪訝そうな顔を見詰めて、ようやく答えが出た。

四条さんにできて俺にはできないことはたくさんあるだろうけど、その逆はきつと少ない。でも、誇れるものがある。

俺の返事が欲しい。多分隼には、それが必要だ。

不幸を呼ぶのなら、それを上塗りするくらいの幸せを築いていけばいい。隼の幸せを考えて、その答えに辿り着くことはこの先もあるかどうかはわからない。少なくともこれは答えなんかじゃないだろうけど、「俺にしかできないこと」がある。

だからそう、

「悪いけど、四条さんの助けはいらないよ」

「な、何故！ 私が、せつかく！」

声を荒げる四条さんに周りの視線が集まった。四条さんの意外な姿に、皆目を丸くしている。多分、そんなことも気にならない程度——それ以上の「覚悟」してきたんだろう。だからこそ、嫌い——受け入れ難い俺に話しかけてきた。

俺は覚悟もできていない、半端者だ。でも、今の今まで忘れていた気持ちがあった。それは俺にしかできないことなんだ。隼——疫病神を救うことはさ。それで父さんが救われるかは、わからない。

それでも、まだ頼れる人がいるから。なんて、らしい甘えた発想をしながら、青空だけを見上げて、穏やかな気持ちで口にした。

それは多分、あの空のように晴れやかな笑顔だったと思う。

「福の神なんか、頼りにできるかよ」

笑いながら、「今だけは」、なんて心の中で付け加えた。

「環はさ、神様って信じてる？」

何気ない言葉だったろう、それでも何か惹かれるものがあって、俺は「信じない」とだけ答えた。神がいるなら——思ったところで、聖が言う。

「じゃあ、どうして宗教があると思う？」

「世界の始まりを考えて、その上で頼れるものを探した」

「そうだね、神様は元々哲学の世界の住人だもん」

神話を創り出したのは、宗教学でも神学でもない、哲学だ。もつとも、万学に通じるといわれる哲学だから、それが宗教に繋がっても何ら不思議はないけど。

「じゃあ、信仰はどこにある？」

「決まってる」

個人の心の内に。或いは、「そこにしかない」ともいえる。明確な形を持たないから、その強さも硬さも、個人の資質に問われてくるわけだ。信仰心が強い、というのはそういうことを言うんだらう。「明確な形を持たないの？ どうして？」

「どうしてって……聖は、人の気持ちに明確な形があるって思うのか？」

「人の気持ちと神様は、違うもん」

「同じだろ。神に形があるんなら、世の中もつと救われてる」

母さんだって……父さんだってそうだ。

幼い頃信じていた神は、世界を創り生き物を造り進化させ、そして全てを操作しながら理想の都を作っているのだと思っていた。唯一絶対で、それがいる限り人間は最終的に救われるのだ、と。

でもどうだ。母さんは死に、父さんはそれに縛られいつまでも救われることがない。神なんかより、悲しみの方がよっぽど絶対的じゃないか。

聖は、それでも俺を否定した。

「環はさ、一神教と多神教どっちが正しいと思う？」

そうやって考えてみると、無意識に「一神教」を信じていたことに気付く。培ってきた常識で、この国では多神教が多数を占めると知っていながら、どうしてそうなったんだろう。

そもそも、それに「正しい」などという概念は当て嵌まるのだろうか。聖の話が「神はいる」という前提で進むにしろ、そればかりは納得できそうになかった。言葉を飲み込んでしまうのは、神学を嗜む聖の言葉を、すぐには否定できずにいたからだ。

「人ってさ、なんでか知らないけど『神様』っていうと一つだけしか思い浮かべないの。どうしてだろうね？」

「そっちの方が想像しやすいからだろ？ 想像できなきゃ、神なんていないも同じなんだから」

「ユダヤ、キリスト、イスラム。他にも色々あるけど、主な一神教だね」

クセノファネスは、原初——アクメーを「一なる神」と位置づけた。神は一であると共に全体で、不動な一者であるという、汎神論的な立場をとっていたそうだ。多神教は人間であれば恥ずべきことを神々に帰したとして、ホメロスらを非難した。人間的な神を否定した。

俺達が考える神とはそういうものだ。絶対に曖昧で、理性把握を持たない、人間にとって最大のものだ。

聖が哲学にまで通じてるってのが、少し意外だったけど。

「でもね、誤解してる。人間は神様に創られた。だったら神様は誰に創られた？ 環も知ってるでしょ、人間だよ。人間が創り出した神様を、どうして人間がその人間性を否定できるの？」

「なんか、神学を学んでは思えない発言だな」

「言ったでしょ。私は、『見える人』だもの」

「……それ、どういう意味だよ？ 前も言ってたよな？」

「見えるから、俺達は面白いと言っていた。俺達はこれからだ、と」

「結論から言おうか。一神教と多神教、正しいのは多神教だよ」

「随分はつきりと言い切るんだな」

「聖はもう一度言った。『見えるから』と、迷いない口調でだ。」

「ここで理解した。聖が見えると言うのは、『神』だ。それを理解すること自体、神を信じたことになるけど、そうとしか思えなかった。」

「もちろんそれを信じられるわけがない。だってそうだろ、つい数分前まで神を否定してたんだから。」

「神様は具体性を持つてる。でもまあ……抽象的ではあるかな」

「それ、完全に矛盾してる」

「意識は持つけど意思は持たない。形はあっても直接的な力を持たず、性質のみをこの世に顕現させる程度のもの、ってことね」

「なんかよくわかんないけど……どういう？」

「人の信仰はどこにある？ その際、神はどこに住まう？」

「それはそう、個人の心の内に。」

「つまりは、そういうことだった。」

「もちろん名前がつくほどの具体性は持たない。ゼウスとか天照とか、そういうことじゃない」

「というと？」

「うん、例えば西洋なら死神とかそういうのがポピュラーかな。こっちだと福神——とかね」

「それで納得できた。名前のない具体というのは、そういうものだ。それらが人の内に住まうと、その人の周りに影響が出てくる。聖の言う神は、そういう存在だ。」

「意識としての身体しか持たない。だから、それを知覚することは本来不可能なのね」

「それが聖にはできる？」

「私にも住んでるの」

時の氏神、と呼ばれる人がいる。

都合のいい時に現れて仲介をしてくれる人のことを言うが、この場合の「時」が都合だ。つまり、産土神である氏神が現れることを表す。

聖に住むのは、正にそれ、時の氏神だ。聖が物事の仲介に長け、そして他者に住まう神を見ることができるのは、そういう背景があったから。納得できそうで、しかし余りに荒唐無稽で説得力に欠けた。

次の言葉を聞くまでは。

「他には死神——早紀ちゃんだね。雫ちゃんは言うまでもない、疫病神」

「ちよ、と、待てよ。じゃあ、全部、本当にあいつらの影響なのか——？」

「そうだよ？　だって否定できる材料がないじゃない」

早紀——死神の相談で死への階段が現れる。雫——疫病神の影響下でそれらを一度に駆け上る。自殺や事故死の被害者は、そういう理由で死んでいた。

救いようがない。もしそれが真実なら、彼らはいつまで経ってもあの呪縛から解き放たれることがないのだ。神という意識が縛っているそれを、人間がどうやっても解くことはできない。

人間を縛るのは、そう、偶然でも人為でもないもの。

それは、“運命”だ。

「だったら、どうして俺らは『これから』だなんて言えたんだよ。どこに救いがあるって？」

逃げ場のない戦場を、どうして面白いと形容できる。それが、俺には理解できない。

「眠気眼が可愛いじゃない？　起きたらどんな顔してくれるのかなー、って、楽しみになるでしょ？」

「眠気、眼？　意味わかんない」

「事故でね……つい最近まで眠ってたの」

事故——どくん、と、心が跳ねた。

赤い色。黒い森。やけに明るい藍色の空。巻き上げられた風が耳を突き抜ける、酷い音。目に映るのは、

——汗が止まらない。夏だからというには暑すぎる。喉が渴いて、目の奥がチリチリと焼けるように熱く、そのくせ空気はどこまでも乾いていた。あの真っ赤に燃える、

炎のせいだ。

「環？ 大丈夫？」

「……」

目の前にいるはずの、聖の顔が見えない。どこか霞んでいて、頭がこの部屋を知覚してくれない。目に映る全てが紅く、葉や木の燃える小さな破裂音が耳の中に木霊する。風のないこの部屋に、どうしてかうねりを上げた空気の流れが、身体を駆け巡った。

「フラッシュバック、かなあ……意外に厄介なんだ」

「はっ……か……ああ……」

ぱちんっ

木っ端が熱で弾ける音と共に、視界が開けた。

目の前にあったのは、氣遣わしげな聖の顔だった。我を取り戻した俺の顔を、小さなハンカチで拭ってくれる。

「ごめん……昔——色々、あつてさ」

「そっかあ。私のせいで思い出しちゃったかな。辛かったね、ごめんね」

「聖のせいじゃ、ない」

あの日、母さんが死んだ。

「……そうだよ、誰を恨むとか、そういうのじゃないんだ。いなくなったのは、——どうして？ どうしていなくなったんだ？ どうして、俺と父さんを残して……！」

「環、落ち着いて」

「いなくななきゃ、父さんはこんなに苦しんでなかったんだ！」

いてくれれば、ずっと笑っててくれれば、父さんは！」

「環！」

強い声が耳を裂いて、漠然と、殴られるかも、って思った。でも次に顔で感じたのは、聖の小さな胸だった。柔らかくて温かくて、不思議と涙が止まらない。

「駄目だよ、お母さんのせいにしちゃ。環がお母さん恨んでたら、おじ様悲しいじゃない」

優しく響く声は、いつまでも耳に残るような錯覚を覚えた。いつもの快活な声じゃなく、心の奥底をゆっくりと撫でるような、穏やかな声だ。これも、聖に住まう神の力だろうか。思わず信じてしまいたくなるような、そんな声だった。

わかつてはいる。母さんが死んだのも、父さんが泣いているのも苦しんでいるのも、母さんのせいじゃない。理性ではわかつてるはずなのに、どこかでそうやって責める気持ちを抱いてしまっていた。多分、もつと甘えたかったんだ。母性を知りたかった。わからない気持ちが大きくて、それを知りたいと願ってしまったんだらう。

「ねえ、環？」

「ん……ごめん」

胸に埋めた顔じゃあ、少し喋りにくい。籠った声は、自分でも情けないほどに震えていた。

「謝らないでいいの。環は、お父さんのこと好きでしょ？」

「大好き」

「お父さんだって環のこと、大好きだよ。でもね、お父さんはお母さんのことも、大好きなんだよ？ 環がお母さんを嫌いだったら、お父さんすごく寂しいじゃない」

わかつてる。それは理性の上でのことで、やはり本能的に母さんを許せずにいたんだと思う。父さんを縛り続ける、或いは父さんを独占し続ける母さんが、どこか憎らしく思っていた。

父さんが母さんを愛していた——愛しているのは知ってる。

死んだ人間に敵うわけじゃないか。母さんが父さんを縛ったら、他の誰にも解いてやることはできないじゃないか。

それもわかってるから、俺は悔しいんだ。悔しい？ 悲しい。

「不器用な家族。それとも、私が擦れてるのかな」

「聖は。聖の家族は、幸せ？」

俺の頭を撫でていた聖の手が、僅かに止まった。

「……うん。環は？」

「……」

「答えられない？」

違うんだ。これを幸せだと認めてしまうのが、怖いんだ。母さんのいない日常をそう定義したら、母さんの居場所がなくなってしまう。

だからわからないんだ。俺は母さんを認めてるのか、そうでないのか。

誰かがそれを知ってくれるのを待っていた。認めてくれてもいいし、或いは諭してくれてもいい。それが聖だった。

「今は、まだいいよ。いずれ……答えじゃない、何か見えるからさ」

聖の小さな身体が、少し震えた。

僅かながらに落ち着いた俺を抱きながら、聖は穏やかな声を絶やすことはない。顔を横に向けると、聖は小さく喘いだ。

「ごめん、ありがとう」

「ううん、だいじょぶ。いい子だね、環は」

そうやって頭を撫でてくれたから、今度は本当に涙が出た。これは多分、嬉し涙に似たものだと思う。自分では涙の理由なんてよくわからないけど、これは頬に感じていてとても暖かいものだ。

「泣き止むまで、こうしててあげる。今までの分、たくさん泣いてね」

「あ、はは……情けないなあ、俺」

敢えて否定はせず、聖は「そうだね」と笑った。

人に縋って泣くのは、どれだけぶりだろう。思ったより悪い気分

じゃなかったし、聖の胸は薄いなりにとても柔らかい。暖かい。あ、これが母性かな——知らないなりに、そう思った。

嗚咽もなく、ただ涙を流した。それは父さんが母さんを想って流す涙に似ていたけど、その中にある感情は遠く対角に位置している。父さんも、こんな涙を流せるようになったらいい。心で母さんを想いながら、そして心からそう思うのだ。

聖の中では、俺はまだ「可愛い子」なんだろうか。俺の頭を優しく撫でる彼女の顔が、鮮明に胸に浮かんた。

「環は甘え方が下手だね。こんな風に……すごく不器用」
「悪かったな」

優しい聖に応える声は、思った通りに震えていた。

「ほら、私の腰に腕回して、ね？」
「うん」

少しだけ前のめりになった情けない体勢は、ちよつと辛い。

「すごい、細いな」

「小さいからね」

「でも、柔らかい」

「でしょー。こういう時ってさ、無性に柔らかいのが恋しくなるんだよね」

自分より頭一つも小さい女に縋って、どうしてこんなにも大きく感じるんだろう。聖という人間——或いは神が、俺にとつてどれだけの存在か、こうしてみるとよくわかった。たった一ヶ月半、それなのにここまで大きくなった。

心を占めるのは、たった数人。父さん、母さん、マキやナオ、黒田なんかも加えていい。四条さん、聖。そして——

ああ、どうして。こんなにも大きく胸を締め付ける存在を、どうして拒絶することができたんだろう。

「聖は、裏切られたことある？」

「どうかな。そういうのは、あんまりないかな」

「俺、やつちやつたんだ」

「……そっか」

父さんがそれを望んでいないとわかっていて、それを口にした。それも裏切り。

信じていた人が傷を抉る言葉を投げるのは、それよりずっと残酷なことだ。

雫、お前は泣いてるんだろう。涙は拭ってやったばかりだというのに、どうして再びそれを流させてしまったんだろう。

「どうしたらいいか、わかってるんだ」

「わかってるけど……」

「怖い？」

怖い。雫と話して、許してくれるかどうか。

怖い。雫がそれを許さず、俺を拒んだとしたら。

考えただけで、寒気がする。

「でも、私からは何も言ってあげられない」

「うん、わかってる」

雫のことにに関して、俺は聖には何も求めてはいないから。確かなことといえばそれだけで、他には何も浮かばなかった。

「ただね」

胸にあつた俺の頭を掴んで引き剥がし、聖は自分の顔とそれを付き合わせた。

深い黒瞳。吸い込まれそうなそれに覗かれて、俺は目を離すことができずにいた。やっぱり聖の言葉は、全ては、どこまでも深く染みこんでくる。

「環にしかできないの。少なくとも、この世界ではね」

「……少し、違う」

「うん、環が思ってるのと私が言ってるのは、多分違うよ」

聖の言葉は、頭に残る。

その言葉は、ずっとずっと、この先死ぬまで、頭から離れないだろう。

「雫ちゃんから生まれた環以外に、誰が雫ちゃんを救い出してあげ

「?」のねら

11話

めざめて中の人

「——え？」

手を離し、俺の身体は自由を取り戻した。そのはずなのに、身体は凍りついたようにその場から動いてくれない

俺が、雫から生まれた？ そんな馬鹿な話があるか、俺の母親はいつだって一人だけだ。父さんを愛した、母さんだけだ。

「元々、それは疫病神の一つだったの。それが分化して、次第に一個の存在として神格化して、今や最も恐れられる神になった」

「何、言ってるんだよ」

「現代で一番恐ろしいものは何？ 考えるまでもない、お金。それは人を蝕み時に拒絶して、多くを墮落させていくもの」

金を持つ者持たぬ者、対極に位置しながら、総じてそれに縋るものだ。卑しく媚びへつらい、時に命すら絶ってしまうものだ。そしてそれを奪う神がいる。

「環に住む神様はね。そういうもの」
よく知られた神だ。

「貧乏神。この国に最も多く分布、最も多くの犠牲者を出す神様だよ」

何より先に笑いが込み上げてきた。神を信じていないという前提でそんなことを言われても、他に何も浮かんではこない。

聖の顔は、それでも揺らがない。それは多分、確信と覚悟の顔だろう。

「それだけじゃないよ」

「もういいよ、聖。聞いても何もなんないよ」

「雫ちゃんの呼んだ災厄が、小さな神様を襲ったの。とある山の中、とある家族が、旅行中に崖から転落した」

どうして蒸し返すんだよ。事故と聞けばまたああなるってわかってて、どうして――

――え？ 山の中。旅行中の家族。崖から転落。そして車の炎上。

――母親の死。

「聖、お前」

「そこで、雫ちゃんと同年の男の子の中にいた、小さな神様が眠りに就いた。長い長い眠り、ほんとは意識不明の重体んだけどね」

「待て」

「それが最近になって起き出してきた。その影響が少しずつ現れてるみたい」

父親の左遷に始まり、ファミレスの食中毒による損害、工事現場での事故による治療費や、その業者の損失。

そして、父親のリストラ。

「待てって」

「残酷な神様。何を奪っても満足なんかしないのに、こんなにも可愛い、あどけない顔してる」

聖は、俺の描いた絵を何度か見たことがあったはずだ。それを見て何を思っただろう。

「どうして知覚できたのかはわからない。ただ、環の心は既にそれを受け入れているってことだけは、はっきりしてる」

「待てつつってんだろ！」

「抗えないよ、環。誰だってそう、自分から逃げることなんてでき

ないんだから」

じゃあ、全部俺のせいだっていうのかよ。

父さんが今も苦しみ続けてるのは、雫のせいじゃなくて、全部全部、俺のせいだって？ 救いたいと願う俺が、諸悪の根源だって言いたいのか？

「あの絵、すごくよく似てるでしょ」

何も答えられなかった。

「神様に家族はいない。それなのに、どうしてだろうね」

俺の心に眠り続けていたあの少女。絵に描き起こそうと思ったのは、どうしようもなくそれに惹かれたからだ。

確かに疑問には思っていた。どうして、こんなに、雫に似ているのか。

「元来貧乏神は、だらしない人に好かれるような、みすばらしいお爺さんみたいな格好してるのね。それが現代になって、変化してきた。現代のそういう人が好くのは、多分そういう姿なんだろうね」
好く、というよりは、共感を得られるような姿をしているのが本来だ、らしい。それが俺にとって、あの姿だったのだろう。

「元々環の中の貧乏神は、力が弱かったのね。それぞれ惹かれる姿になるという以前に、その時既に力の強かった疫病神に、その意識が引つ張られる形になった」

「だから、雫に？」

「そういうこと。雫ちゃんに訊けばはつきりするよ、その日、雫ちゃんはどこにいたか」

俺の家は母さんが生きていた頃から、ずっと貧乏だった。それは軽度のものであったと思うけど、あの事故から不思議とお金流れ出てきた記憶がある。

それも、聖の説明なら適っていた。

神様とか、そういうファンタジーの世界の住人を、どうして信じられるかはわからない。ただ、俺の中に何かしら見えていたから、聖はここにいるんだろう。最初からわかっていたから、俺の傍にい

てくれた。

「そういえばそうだ。聖がいた時は、不思議と何も起きないんだ」
「うん。それも私の仕事だよ。人間と神様を仲介して、できるだけ影響が出ないように、ってね。まあ、あの時は力尽きちゃったけどさ」

鉄骨が不良を襲ったあの日、聖の意識は既になかった。意識を失くしたということは、神の影響力が消えるということ。

「俺とか四条さん、それから早紀もそうだ」

「環と早紀ちゃんは、単純に相性がいいだけだよ。同族を汚すのは、神様の中でも禁忌らしいから。それとその四条さんって子は――」

「クラスメイト。多分、相性最悪の」

「じゃあそうだね。きっと」

福神、だそうだ。その種類は多岐に渡り、才能や財産、地位なんかをそれぞれ格段に上げるような影響があるらしい。しかし種類は多々あれど、現実になんか分けを分けた神はなく、福神単体として扱われる為、四条さんはその全てを手に入れたんだろう。聖の見解だ。

俄には信じがたいけど、一応それで全てが説明できることになる。

「まだ信じてないでしょ？」

「だってそうだろ、神なんて……」

「環が描いてるのは？ あれ、現実が存在する人かな？」

「偶然頭に浮かんだんだ。キャラクターの一種だろ」

「ふーん……環はそんなので納得できるの？」

わかってる。納得なんてできるわけない。

あの子は、確かに俺の中に住んでいる。でも、それは雫のように、記憶や心の大部分を占めるような、大事な人のことだと思っていたんだ。

何より、それを信じたら、俺は俺でいられなくなる。きっと、確実に。

「怖いよね。全部自分のせいだなんて」

「……」

「雫ちゃんと早紀ちゃんと環。私と四条さん。他にもこの町にはたくさんのお神様がいます」

今まで、そうやって何かに突出した人間を見たことはなかった。それなのに、この町に来てから、何人もの才媛を見ている。

「この南町はね、環。神様の出逢う坂。逢坂なんだよ」

ありとあらゆる神が、ここでは見られるそう。誰もそれを自覚することはないが、色々な吉凶がこの町にはあるという。

神は惹かれ合う、というわけじゃない。それなのにこの町に集まったのは、ここがそういう場所だからなんだろう。所謂霊地、というやつだろうか。

「信じるしかないくらい、揃ってると思っただけだよ」

「お前さ、慰めたいのか追い詰めたいのか、どっちだよ？」

「落ち着いて聞いて欲しかったから、慰めた。それじゃ駄目かな？」

「それが真実だとしたら、落ち着いて聞けるわけないじゃん」

元凶は誰？ 雫であり、俺でもある。聖は、そういうことを言っている。慰めた時の優しさに嘘はないんだろうけど、どうしてもその残酷さに一歩引いてしまった。

「でもね、環。私が『義務』で環に近づいたなんて思わないでね。環のこと、ほんとに好きなんだから」

「……疑ってないよ」

「……そっか」

本当は気付いているんだろう。聖のこと、少しだけ疑ってしまったこと。

でも、聖と一緒にいたい、というのは正直な気持ちだ。これからも近所の住人として、姉として、母として、生活を共にしていきたい。

誰を恨むとか、そういうのじゃない。ただ、一緒にいて欲しかった。

それは、対象を持たない曖昧な感情。それが誰に向けたものなのか、それが答えなのかも知れない。

「うん、よし。環」

「ん、何？」

「たくさん悩みな。答えなんか出さなくてもいいからさ、いつか『何か』見えるまで」

解決にならずともいい。

道が見えるまで、頑張ってみよう。聖の瞳を見詰めながら、小さく頷いた。

真夜中の住宅街は、ひっそりと静まり返っている。遠くから聞こえる川の音は、水というよりは砂を転がしたような音に近いと思う。藍色の空に光る小さな点の隙間に、大きな黄色い光が煌いて、夜を薄く照らす。

いつもより、少し幻想的な夜だ。音のない世界に響くのは、自身の小さな足音。潰れた革が叩くアスファルトは、ちょっとだけ情けない音を立てている。

もう少しで雫の家だ。一言目に何を喋ろうか、もしかしたら喋ることすら許してくれないかも知れない。怖い。

右ポケットに入れた大きな布は少しかさばるけど、持ってみると意外に心強いものだ。白いリボンは、多分幸せの力。

「結局頼っちゃったけど、これくらいならな」

その声は、予想以上に大きく反響した。川の流れる音を掻き消した声が萎んでいくと、次には風が鳴る。

静かな夜。自然がざわめく夜。草木は、まだ眠らない。

「雫、寝るの早いからなあ……」

もう眠ってしまったているだろうか。あの可愛くてあどけない顔を、無防備にさらけ出しているだろうか。あれを知っているのは、夜の空気と俺だけでいい。気取りすぎかな、なんて苦笑すると、雫の寝顔が克明に浮かんだ。

少し、戸惑っている。どうして？ 多分、雫に会えば答えは出る。そよぐ風。流れる水。瞬く星。煌く月。そして、ざわめく心。

ようやく認めた雫の家に、心臓が跳ねた。八千代と刻された表札を指でなぞって、小さく呟いた。

八千代の隣に佇む黒い機械。インターフォンを押せば、雫の耳にベルが鳴る。

出てきてくれるだろうか。

「まあ、これくらい覚悟しないと。贖罪、ってやつだから」
かっこつけすぎかな。

表札をなぞった指を、そのままインターフォンに添えた。いつもより少しだけ硬く感じたそのボタンは、でもいつも通りの感触を俺に伝えてくれた。家の中から微かに聞こえた、無機な電子音。乾いた音なのに、雫に俺を伝えてくれる。

右ポケットには布の感触。左ポケットに紙の感触。今は、ただそれだけ。

結局、返事はなかった。一分、二分……十分も経つ頃には、少しだけ諦念も浮かんできた。まだ諦めるわけにいかないとわかっていながら、「雫は来ない」と都合のいい解釈をしてしまう。

捨てられれば楽だ。だってそう、諦めればそれで終わりなんだから。ただ、諦められるはずがない。雫は、俺と一緒にいる。いなくちゃいけないんだ。

形は色々ある。外聞を気にしてる場合じゃないこともわかってる。

「雫ーっ！」

住宅街の隅まで響き渡るようなその声は、果たして雫の耳には届いたのだろうか。他の誰に届いても、あいつに届かなくちゃ意味がないんだ。

何を言うべきだろう。

呼びかけてから何十秒も空いちゃったけど、結局一言だけを伝えて、背を向けた。

「ポスト、見とけよーっ！」

夜道を照らすのは月明かりと星明り、小さな街灯。どれが一番大きいのか判然としない中を歩いていると、どこか不安になる。自分

の足元には何があるんだろう、そんな感情だ。星屑。月の欠片。街灯に群がる羽虫の死骸かも知れない。

でも、悪い気分じゃない。ポストにはたくさんの郵便物が溜まって、きつと雫はあの日から一度も外へは出ていないのだろう。それでも……勝手に悪いけど、俺の言葉なら聞いてくれると思うんだ。俯く先に、街灯に照らされた自身の黒い影。重なる影は、それより一回り小さなものだ。

「走るとこけるぞ、雫」

「……遅いよ、環くん」

雫に後ろから抱きつかれて、少しだけ、寒気がした。それはそう、四条さんに会った時のような、悪寒だ。

でも、表に出すことはなかったと思う。俺が感じたとしたら、雫だって感じたはず。隠したところで意味はないだろうけど、この気持ちに嘘はないんだ。雫のことを求める心に、偽りはない。

「わたし、いつも怖かった」

背中に感じる温もり。小さな嗚咽。震えた声が、それ以上に心を揺らした。

「人付き合いなんて、久しぶりだったし。環くんにくつつきすぎじゃないかな。環くん、迷惑じゃないかなって」

「くつつかれるのは、少なくとも嬉しかったぞ」

「うん。でもね……」

怖かった。

何が怖いかって、そんなの決まってる。だってそうだろ、信じた人に裏切られるのって、想像もできないくらいの痛みを伴うんだ。

それを、俺は。

「シヨックだったよ？ わたし、枯れるくらい泣いたよ？ わたしが運んだ不幸でわたしが不幸になったの、これで二回目」

「ごめんな」

陳腐な言葉。心だけで吐き捨てるように呟いた。

「謝られると、困るな。だって、わたしも悪いんだもん」

「雫は、悪くないだろ？」

雫の知らないところで、疫病神が暴れただけ。それが、雫の中だったというだけの話だ。そう割り切るのには、随分時間を使った。だって、それは俺自身を許すことになるんだ。家を貧乏にした、母さんを殺した、父さんを苦しめた俺を、全て肯定することになる。だから、雫を許すことが、できなかった。

四条さんの話を聞いて、ようやく思った。その場で解いて渡してくれた白いリボンが心強くて、ようやく一步を踏み出せた。

「環くんの背中、温かいね」

「雫も。少し、瘦せた気がするけど」

「たくさん泣いたもん。身体の中から、いっぱい水が消えたんだよ」
「それ言われると痛いなあ」

揺れた身体が、涙でないことを願った。苦笑した俺と同じであるように。

「顔、見たい」

「わたし、多分すごいぶさいくだよ」

「ぶさいくな雫なんていないから、大丈夫。だと思う」

「うっ……な、泣かないでね？」

そこは「笑わないで」じゃないか、普通？

恋人の顔を見るのに許可を得るのも変な話だが、俺はようやく振り向くことを許されたようだ。今の俺が恋人を名乗っていいのか、まだわからないけどさ。

「目、真っ赤じゃんか」

瞼に手を伸ばすと、小さなそれは震えて閉じた。なぞる指に迷いはなく、でもその柔らかさに陶醉したように揺れる。

ああ、駄目だ。触れてると、怖いんだ。

「環くん、変わった」

「ああ、変わったな」

「四条さんみたい」

「ああ、多分そうだろ」

ここで他の女を出すのは如何なものかと思うぞ、雫。

でも、事実だ。俺もそう、雫との間に壁を感じていた。それは以前に四条さんとの間に感じていたそれで、やはりどこか受け入れ難いものだ。

結局そう、雫も同じ。硬く閉じた瞼を撫でていると、その震えがどんな種類のものかがはつきりわかる。戸惑いや恐怖、そういった負の感情が多くを占める、感情的な揺れだ。陶醉した俺の指も、その限りではなかった。

「でもなんでだろうね……嫌いになれないんだ」

「うん。俺も」

でも、好きだ。

飾った言葉は何も要らない。ただそれだけの気持ちを伝えるのに、もう言葉は必要なかった。

雫の顔から手を離し、その代わりに背中に腕を回した。抱き寄せた身体に、嫌悪はないように思える。耐えているのだとしても、それは「耐える意思」とそれに叶うだけの身体を持っているからだ。

まだ、二人は繋がっていられた。

「雫」

「うん……」

「ごめんな」

陳腐な言葉。だけどそれは、素直に言うのはとても難しいものだ。本当の謝意を告げるといえるのは、とても尊いことだ。

俺のそれは、雫に通じただろうか。雫は何を答えることもなく、ただ俺の背中に腕を回した。これでそう、抱き合いながら話せる。もっと近くで、雫の耳に囁いてやれる。

「辛かったな」

「環くん……」

「自業自得だけどさ、俺もすげえ辛かった」

「わたしが許したら、楽になれるのかな？」

「いや、無理そうだ」それだけ言うと、二人は小さく笑った。

だって、罰が与えられても罪は消えない。誰が納得しても、本人は納得しないものだ。

雫がそうだったように、自分を責めるといふのはとても悲しいことだ。

「絶対に許さないよ」

「ああ、いいよ」

「それまで、一緒にいてくれなきゃだめなんだから」

最初からそのつもりだ。それは口には出さずに、抱きしめた腕に力を込めた。もっと、もっともっと近くにきて、一緒になりたい。

壁は感じている。壁越しに何したって、本当の意味では一緒にならないのかもしれないけど、今更この気持ちが消せるはずもないじゃないか。この細く小さな身体に色々なものを背負って歩いているのに、どうしてそれを支えない？

一緒に歩ける？ 俺の背中にもたくさん荷物はあるけど、それを分け合いながら生きていけるかな？

「環くん、痛いよ……」

「嫌か？」

「……うつん、やじゃないよ。だってわたし達、えむだもんね」

「よく覚えてたな、そんなの」

「環くんと話したこと、全部覚えてるよ」

二人は、ようやく身体を離れた。

スポットライトは小さな街灯。舞台は閑静な住宅街。観客は風と星と月。

ちんけな演技。だけど、どうしてそれを間違ひなんて言えるんだろう。

「好きでいられる？」

「いられるさ。雫の隣に、俺以外の誰が立てるんだよ」

「そう、だね。誰も立たせたくないや」

羽虫が燃え落ちる音が、耳に届いた。

身近にあった“死”を掻き消すように、俺達は唇を重ねた。酷く

甘く、それなのに酸い。その柔らかさは全てを酔わせ、身体に心に、雫を刻み込んでくる。

離れたのは、多分同時。「どちらともなく」というのは、こういうことを言うんだろっうな。

これで演目は全て終わり。

「送るよ」

「帰らせるの？」

「送り狼って、絶滅しないんだってよ？」

笑ってくれた。久しぶりに見た雫の笑顔が眩しくて、視界が歪んだ。

「ごめんね」

「許せないな」

「じゃあ、ずっと一緒にいるよ。許してくれるまで、ずっと」

手を繋いで、街灯の下から二人で歩き出した。舞台を降りた演者は、自由を取り戻す。星々の煌きの元で、雫に優しく囁いた。

「パジャマに裸足。可愛いぞ」

「も、もうつ、環くんのばかっ」

エピソード

めざめて中の人

「おおー、皆上手いなー」

「でしょう。どれも自慢の作品ですよ」

「聖、あんまりはしゃぐなよ」

「うるさいなあ。ちゃんと小声で喋ってるじゃない」

市内の小さなミュージアムに、客は余り入っていなかった。実績のない美術部の作品じゃあ、注目度が全然なかったようだ。

それでも、この人達に見せられれば満足だ。俺だけ満足しても、意味はないんだろうけどさ。

「どれ？ どれが早紀ちゃん？」

「あ、あっちの——」

早紀と聖は、そのまま隅の方に行ってしまった。あっちは、優秀な作品が集まる区画だ。

「環、君のは？」

「うん、あっち」

俺が指差すのは、照明も薄くなる小さな区画。情けないことに、結局大した作品は作れなかったわけだ。誰も俺にそんなことを期待

しちゃいない。わかつてはいるけど、少しだけ悔しかった。

「これ」

指差した先に、女の子が微笑んでいた。黒鉛色の髪、淡くぼかした輪郭に、そして瞳。結局、彩色はしなかった。言い訳になるかも知れないけど、彼女に色は必要なかったと思う。彼女には、鮮やかな色は不快だろうからさ。

「なるほど、よく似てるね」

「でしょ。今度父さんも描いてあげるよ」

父さんは順調に快方へ向かっていた。もちろんこんな短期間でどうになる病気でないことは承知の上だけど、全て上手くいく自信があった。

だってそうだろ、今は全部順調なんだ。

ギャラリーは無事開かれた。俺の腕からも、もうすぐギプスが外れる。聖はいつも通り笑っているし、早紀も——少しだけ陰があるけど、笑ってる。雫は次第にクラスに溶け込み始め、そして父さんの再就職も決まった。

全部、聖と四条さんのおかげ。そして——

「僕は色々見回ってくるから、仲良くね」

信じられるか？

貧乏神って、状況次第で福神に変わるんだって、聖が言ってた。

それがどんな時だか、聞かせてはもらえなかったけど、代わりに有名な落語を教えてもらった。

福の神が訪れた村のある家には貧乏神が住んでいて、その家はずっと貧乏のままだったそうだ。それを見かねた福の神がその家を訪れた。それなのにその家の老夫婦は、「ここにはもう神様が住んでいる」と、福の神に対して自分を主張した貧乏神を激励した。結局その家には貧乏神が残り、激励され親切にされた貧乏神は、福の神が落としていった打ち出の小槌の力で、なんと——

だそうだ。

上手く行き過ぎだろうとは思ってたけど、つまりはそういうことだ。

「じゃあ、わたし達は上手くいかないのかな。もう、終わりかな」

「どうか。ただ――」

「ただ？」

確かに、福神と疫病神じゃ相性が悪すぎるのかも知れない。

目覚めからたった二ヶ月。この絵に描かれた女の子は、その姿を変えてしまった。もう、この世にこの子はいない。その代わり、俺の身体には別の子が住んでいる。やはり知覚はできないけど、その姿は簡単に想像ができた。

「雫を幸せにできる男は、俺だけ」

「……環くん」

「心のどこかに壁があっても、一生一緒になれなくても」

「悲しいなあ……」

でも、笑えるだろ？

あの日、ちゃんと抱き合えたじゃないか。ちゃんと唇を重ねて、その気持ちを確認し合った。

「他の何をできなくてもさ、」

雫の手を握って、目の前の“肖像”を見詰めた。

変わらず微笑む女の子は、雫の写しのようだ。この子はもういないけど、雫はこれから不幸を運ぶんだろ。

それを救えるのは、俺だけ。ずっと一緒にいる覚悟というのは、そういうことだ。

「他の何ができなくても、俺は雫を幸せにしてやれる」
目覚めたあの子と一緒に、な。

エピソード（後書き）

ここまで読んでくれて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8292c/>

めざめて中の人

2010年10月8日15時12分発行